
舞刀迦唯

赤神幽霊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

舞刀迦唯

【Nコード】

N1709C

【作者名】

赤神幽霊

【あらすじ】

少女の名は迦唯^{かい}。彼女は殺し屋で娼婦だった。ある日、迦唯はある少年の護衛依頼を受ける。少年を狙って彼女の前に現われたのは、死んだと聞かされた育ての親 発矢だった。彼を放つたのは謎の機関。はたして迦唯は、無事に少年を守りきれぬのか！？

第0話 五年前

湿っぽい空気が満ちる地下室。そこに檻があった。大人二人くらいなら十分に入る大きさの檻だ。その中に、一人の少女が閉じ込められていた。

少女は外気に裸身を晒させられていた。年の頃は十歳くらいで、体は痩せ細っていた。

少女は、天井から伸びる二本の鎖に両手をそれぞれ縛られ宙吊りにされて、両足もまた、それぞれに鎖が巻かれていた。両足の鎖の先には、少女の体重よりも重い鉄球が一つずつ繋がられており、それらは床に届いてはいなかった。

つまり、少女の両腕には、自身の体重と鉄球の重さ あわせて少女の三人分以上の重量が常に加えられているのだ。さらに、足にも自分の体重以上の重量が加えられていることになる。当然、少女の体は悲鳴を上げていた。その身を苛む、絶え間ない激痛に、少女の表情は苦悶に満ちていた。

悲鳴は無い。いや、声にできないだけだ。声はとうに枯れ果てた。涙は流していない。いや、流せない。そんなものはとうに枯れ果てた。

そして、少女の体は刃物で切り刻まれていた。

少女の命は、失われ始めていた……。

いつの間にか、一人の男が檻の前に佇んでいた。無精髭を生やしたスーツ姿の男で、およそ四十路に見える。

男は少女を無表情に“観察”した後、なんと素手で檻をこじ開けた。そして少女の傍まで歩み寄り、鎖を全て、またもや素手で引き千切っていった。

崩れ落ちる少女を丁寧に抱きかかえると、男は尋ねた。

「……名は？」

それに反応してか、少女の口が微かに動く。

「か……い……」

声は出なかった。しかし男は口の動きで理解したのか一つ頷くと、そのままどこかへ去って行った。

「う、うっ……」

少女は目が覚めた。と同時に、全身に痛みがはしった。特に両腕と両足が酷い。動くのは諦めた方がよさそうだと判断し、じっとしていることにした。

少女は目だけで周囲を確かめようとした。が、それで視認できる範囲などたかが知れていて、結局分かったことと言えば、自分が見知らぬ場所のベッドの上で寝かされている、ということだけだった。足元の方からキイという、軋む音が聞こえた。頬に空気の流れを感じた。この場所の扉が開かれたようだ。

「目が覚めたか」

「えっ!？」

いつの間にかベッドの脇に、男が立っていた。微かだが少女は覚えてた。自分をあの檻の中から連れ出した人物だ。

それにしても。この男は今、足音はおるか心配すら感じさせずにすぐ隣まで近づいてきたというのか。

「あ、あの……」

「む?」

「え、えっと……」

どうしよう? 何から聞けばいいのだろうか? 少女は困り顔で言

葉に詰まった。

「発矢^{はうや}だ。そしてここは私の家だ」

「は……つや……」

「今日からここがお前の家だ。この部屋を使え」

「え? あ、あの……」

訳が分からない。この発矢と名乗った男は何がしたい？ 少女は相手の言葉の真意を測りかねた。

「どうかしたか？」

少女は少し様子を見ようと思った。

「発矢さん」

「何だ？」

「手当をしてくれたのはあなたですか？」

「そうだ。……どうしてそんなことをしたのか、という顔だな」

発矢は少女の言いたいことにすぐ気がついた。

「……染火せんかに頼まれた」

「父の知り合いですか？」

「ああ。染火は俺の相棒だったからな」

そういえば父がよく発矢という名前を口にしていたなと、少女は思い出す。

この男を信用してもいいのかもしれない。嘘をついていいなければの話だが。

「染火に頼まれていたのさ。もし自分が死んだら、その時は娘を頼むってな」

先ほどからだだ淡々と述べている発矢だが、染火と口にするときだけ、複雑な感情が込められているような気がした。

「そんな話を信じると？」

発矢が目を細めた。

「信じられないと？」

「ええ。うまい話には裏があるはずですから」

「そんな体でどうする？ 俺が助けなければ、お前はあの檻の中で死んでいた。そうでなくとも親を失ったお前は、野垂れ死んでいたところだ」

「そうなりますね。自分の力で生きていけないものは、死ぬ定めですから」

「……染火にそう教わったのか？」

「はい。そして、弱者は強者に蹂躪こしつぶされてもしかたがないとも」
発矢はなんとも言えない表情になった。

（あの野郎。年端もいかねえ自分の娘に何教えてやがる）
「時に、迦唯かいよ。今幾つだ？」

「どうして私の名前を……？」

少女 迦唯はきよとんとした。

「なんだ、自分であるの檻を出る時に言ったのだぞ？」

迦唯は記憶を辿った。……確かに名乗ったのかもしれない。

「えと……なんでしたっけ？」

「年だ年。今何歳だ？」

「先月十歳になりました」

「そうか……。で、お前はどうしたい？」

「なにを言っているのですか。私に選択権などありません。どうぞ捨てるなり殺すなり好きにしてください。それとも辱めはづかしますか？」

「舐めるなよ小娘」

発矢は凄みを効かせて睨んだ。

「……で？」

まるで臆する様子もなく冷ややかに見返す。

（……こいつマジで十歳か？）

性格が完全に父親に似てしまっている。

せつかくの可愛い顔が台なしだなと発矢は心の中でため息をついた。

「どうしました？ 髯ながらないのですか？」

「……」

発矢は無言で迦唯の腕を掴む。ちょうど痣あざのある、最も痛む場所の一つを。

そこに徐々に力が込められてゆく。

「っあ……」

迦唯の顔に僅かだが苦痛の色が浮かぶ。
それを見てさらに力を込める。

「っ！」

迦唯は悲鳴を漏らすまいと歯を食いしばる。

「ほう……。泣き叫ぶと思っただが……。強情だな」

そう言い、もう片方の手首の痣のところも掴む。そして今度は一
気に締め上げる。

「う……。あつ……………」

痛みで軽く体を反らせた。それでも迦唯は殆どほとんど声を漏らさない。

額に浮かんだ大量の汗と潤んだ目が、彼女が苦しんでいることを伺うかが
わせた。

「…………ち。もしかしてお前の体にあつた切り傷…………染火がやった
のか？」

「はっ…………はい……………」

荒い息をしながらも迦唯は律義に答えた。

「どうしてだ……………」

発矢は呻くように、小さな声で言った。

「父は痛み慣れる訓練だと言っていました」

訊ねたつもりはなかったが答えが返ってきた。まだ少しだけ苦し
そうだ。

「迦唯。染火の後を継ぎたいというようなことを言ったのか？」

ふるふる。首を横に振るう。

「いいか。これからはお前の意思で生きる。自分がどうしたいか、
それを考えてみる。答えはすぐに出さなくてもいい。いいな？」

「…………強くなりたいです。父のように」

「それはなぜだ？」

「ほかに道を知りませんから。それに……………」

「それに、なんだ？」

「父が生きていた世界で私も生きたいです」

「それは本心か？」

迦唯は発矢の目を真っ向から見つめて頷いた。

「甘くはないぞ」

「構いません」

「厳しいなんてものじゃない。お前に待つのは、痛みと苦しみと裏切りと理不尽の世界。そこでお前は常に独りだ。死だけがお前の傍にいる」

「構いません」

「……わかった。ならば鍛えてやる。もし泣き言を抜かすようなら、その時は出ていってもらう」

「ありがとうございます」

そして少女は育っていった。

第一話 彼女の日常

闇の中。“それ”目がけて一筋の銀光が閃いた。
まるで水が詰まった袋を切ったかのような手応え。

それはひうつと肺に残っていた空気を吐き出し、地面の赤い水溜まりへ倒れ込む。

「……目標の沈黙を確認」

呟かれた声は美しいソプラノ。

それ 血溜まりに伏す人間のようだったモノ を冷めた目で

見下ろすのは、刀を携^{たす}えた少女だった。

少女は無言できびすを返した。

無法地帯。ここは一言で言い表すとそういうところだった。

^{ロウズ}合法地帯の人々から嫌悪とともに、カースと呼ばれている。

カースは犯罪者や麻薬中毒者、精神異常者達の巢窟。怪しげな宗教の本部が有ったりもする。物盗りや殺人は茶飯事。ここはそういうところだった。

蜘蛛の巣のような町並み。建物にはまるで統一性がなく雑然としていた。

その建物の中で一際目を引く、過剰なまでに装飾された巨大な塔。蜘蛛の巣の中心に位置するそれは、単に『ギルド』とだけ呼ばれていた。

その地下、地上のものとは比べて質素な作りの部屋に先程の少女がいた。

対面には、どこから持ってきたのかわからない玉座に、足を組んで腰かけている妖艶な、けれど威圧感のある女性。

「終わりました」

「相変わらず仕事が早いわね。報酬はいつも通りでいいかしら？」
少女はこくりと頷く。

「わかったわ」

もう用は済んだとばかりに少女は立ち去ろうとした。

「待って」

呼び止められ、ピタリと立ち止まる。

「あなたを抱きたいってお客さんがいるけど……どうする？」

「その人は何が楽しくて私を抱くのでしょうか？」

「静かでもいいんですって。それにあなた、かわいいもの。ホントよ。ドレスでも着て、適度にお化粧すればかなりイケルと思うわよ？
って、言ってるそばからそんな嫌そうな顔しない！」

そんなに嫌そうな顔をしていたのだろうかと少女は首を捻る。

「……いくらですか？」

尋ねる少女に「これだけ出すわ」と現金を見せる。

「……引き受けます」

「決まりね。それじゃあ迦唯ちゃん。さっそく準備して頂戴」

「はい。オーナー」

少女 迦唯は無表情に頷いた。

“仕事”を終えて家に着いたのは翌日の昼前だった。

「ただいま。ネア。ファウ」

迦唯と一緒に住む者達の名前を呼ぶ。しかし、返事はない。

彼女はもともと返事を期待していなかったのか、自分の部屋へ向かう。

木製の扉を開け、部屋の中の様子を見る。

ベッドと服かけ、そして机があるだけの部屋。まるで飾り気がない。

彼女の視線はベッドの上に向けられていた。

そこには、一匹の猫が丸くなって眠っていた。

「私……どこで寝るの？」

服かけに目をやる。そこには一羽の黒い鼻うぶくちばしが止まっていた。完全

に眠っているようだ。

迦唯は一匹と一羽のためのご飯を用意しにキッチンへ向かい、部屋に戻って隅の方に置いた。

そして地下にある別室へ。

武器庫として使われている地下の一室。銃や弾薬、様々な形のナイフ、中にはどうやって使うのかわからない武器まである。

そんな中、一つだけ明らかに他のものとは違う物があった。

氷のケースに納められた一振りの刀。

今はもういない、この家の本当の主が言うには、氷のケースはどつやつつても溶かせなかつたらしい。迂闊うかつに素手で触れようものならたちまち自分が凍りついてしまうから、決して近づくなと言われていた物。

しかし迦唯にはこの氷が冷たく感じられなかった。むしろ温かい。そんな気さえしていた。その気になれば、中の刀を取り出せるのだろう。それは確信だった。

迦唯は固いコンクリートの床に座り込み、ケースにもたれかかるようにして、瞼を下ろした。

これの近くにいと、なぜだか安らぐ。

「おやすみなさい」

数秒後。すうすうと小さな寝息が聞こえてきた。

迦唯が発矢に拾われてから、もう五年が経っていた。

迦唯は十五歳にして、実力は既にこの無法地帯の中でも五指に入るほどに成長していた。多くの物事に対して才能を発揮し、とりわけ刀に関しては類ない才能をもっていた。

発矢が指導者として優秀だったことが、それをより引き出させた。ただ発矢は刀を普段獲物として使わないので、迦唯は我流で剣術を身につけた。

発矢により、ギルドに始めて連れていかれたとき、そのオーナーたる女性、麻莉亜まりあに一目で気に入られたのも合わさって、彼女の名

を知らぬものは殆どいなくなった。

名声が響くにつれ、名を上げようと何人も刺客に襲われるようにもなっていた。

ほんの少し前までは発矢がいた。

そのため目立った動きをするものはいなかったのだが、彼がいなくなつた後、彼女は幾度となく襲撃にあつたようになつた。

しかし、迦唯はその全てをあっさり返り討ちにしてしまった。

本日も、命知らずな腕自慢が彼女を殺そうとしていた。

運よく彼女の隠れ家を見つけて武器庫に忍び込んだそいつは、危険な臭いがプンプンする氷のケースにもたれて眠る彼女に、今がチャンスとばかりにゆつくりと、気配を消し、足音を忍ばせて歩み寄る。

そいつは知っていた。彼女に銃などの飛び道具が通用しないことを。その程度には予備知識があつた。

手にしたナイフを無防備な首筋目がけて振るう。

獲つた、とそいつは思っただろう。

いや、今もそう思っているに違いない。永遠に覚めぬ眠りのなかで……。

「つまらないです……」

迦唯は相変わらず無表情。

それにしても、一体何があつたのだろうか。

答え。相手に斬られる前に相手の首を貫いた。それも、貫手で。

迦唯は手に僅かに付着した血をペロリと舐めた。

「……まだまだ遅いですね」

少し不満そうだった。

「寝ます……」

迦唯は死体を片付けて、再び眠りについた。

第一話 彼女の日常（後書き）

続きは一定量でき次第投稿するつもりです。基本的に週一ペースを目標に頑張ります。誤字や脱字、おかしい表現、わかりにくい文章があればご指摘いただけると幸いです。できるだけ改善する努力はしますので……。

第二話 依頼

迦唯^{かい}は目を覚ますとすぐに自室へ行つた。

扉を開けると黒い鼻が飛んできて肩にとまった。

足元には白い猫が擦り寄ってきていた。

「ネア。ファウ。おはよう」

迦唯は一匹と一羽に挨拶した。

「おはよう迦唯。ごめんなさいです。ベッドの上で待ってたら眠くなっちゃって……」

「迦唯殿。おはようであります」

白い猫の名はネア。黒い鼻の名はファウ。彼等は迦唯に挨拶を返した。

それも、人の言葉で。

彼等は人の言葉を理解し、話すことができるのだ。

理由は不明。共通しているのは、過つて違法薬物を食べたこと。

一体どんな作用なのか見当もつかない。

迦唯はそんな彼等を人として扱っていた。

“二人”がそんな迦唯と一緒にいることを望んだ結果、今に至る。

迦唯はネアを抱き上げ頭を撫でる。ネアは気持ちよさそうに目を細めた。

そしてファウも撫で、頬擦りした。

ほんの少しだけ口元が笑みの形になっていた。

こうしている分には、迦唯はどこにでもいる少女であった。

「今日はお仕事ないの？」

ネアが訊ねた。

「昨日のお昼から今朝までずっと寝てたから、これから聞いてくるつもりだよ」

「そうでありますか」

「さて、とりあえず朝ご飯にしましょうか」

言い残し、キッチンへ向かう。

その後をネアとファウはついて行く。

「もしかしたらなかなかこっちに帰ってこれないかもしれないから、とりあえずしばらく分用意しておくね」

ときばきと用意をすませ、“三人”で食事をとった。

「それじゃあ行ってきます」

『いつてらっしゃい』

ネアとファウに見送られて、迦唯はギルドへ向かった。

迦唯がギルドに着いたのは昼前だった。

伸びるに任せた黒髪を肩のところまで二つに分けて赤いリボンを結んでいた。服装はキャミソールにミニスカートと、かなり露出度が高い。手にはいつも持ち歩いている刀。

なんとも奇妙な光景だった。

そんな彼女が通路を歩いていると、すれ違う相手が皆一様に顔を強張らせ、道を開けていった。

彼女が通り過ぎるまで誰一人として動くことができないでいた。

まるで蛇に睨まれた蛙のように。

迦唯はそれを気にも止めない。

やがて、地下の一室の前に辿り着いた。

「オーナ……。麻莉亜^{まじあ}さん。迦唯です」

言い直したのは、入るときくらい名前前で呼べと言われていたからだ。

それを律義に守っているのは迦唯くらいだが。

「開いているわよ。入って」

扉の向こうからすぐに返事がきた。

「失礼します」

相変わらずの玉座と、そこに座るあたかも女王であるかのような麻莉亜の姿。女王、というのもあながち間違ではないが。

「オーナー。今のところ私に何か仕事はありますか？」

「ええ、あるわ。でもその前に話があるの」

「なんででしょうか？」

「行方不明だった発矢が今朝方『機関』^{オルガン}の連中に殺されて捕まったらしいのよ」

「機関……？ あの訳のわからないことを唱えている人達に、ですか？ 発矢さんが？」

発矢の強さを知っている迦唯にとって、にわかには信じがたい話だった。

「ええ。そして今回あなたに頼みたい依頼は、どうやらそいつらが一枚噛んでいるみたいなの」

「殺した後その死体を持っていったということは、もしかすると“化け人”となつた発矢さんと戦わなければならない、ということですね」

「迦唯ちゃん……。大丈夫なの？」

「今の私ではまず殺されてしまいますね」

あつさりとは自分では勝てないと言い切る。

「そういうことじゃないわ」

「機関に捕まった女性の運命のことですか？」^{オルガン}

麻莉亜は何も言えなかつた。

「私なら大丈夫です。麻莉亜さんが気にする必要性は無いと思われ
ます。それに……十歳の時に同じようなことを経験しましたから」

「っ！ そう……。それじゃあお願いするわね」

すっかり失念していた事実が痛む。それでもあえて依頼したのは、彼女くらいの強さでなければこれはこなせないと判断したからだ。

「はい」

返答はいつものように、一言。

「早速だけど、内容を説明するわ」

一通り説明を受けた迦唯は、ギルドを後にした。

第三話 顔合せ

その店は無法地帯カースにおいて比較的 안전한場所　ギルドの影響が強い　にあった。

木造のつくりで店内は広く、大勢の人々が昼間から酒を飲んでい
た。ここに来ている連中の大半はどこから流れてきた傭兵くずれ
だ。せわしなく店員が店内を駆け回っていた。

迦唯かいはカウンターの方へと進む。

カウンター内でグラスを磨いていた男性がこちらに気付いた。

「お嬢ちゃん。ここは酒場だ。お前さんのような子どもが来る場所
じゃない。トラブルに巻き込まれない内にさっさと帰りな」

迦唯はそれを無視して告げる。

「……ギルドに仕事を依頼したのはあなたですか？」

男性の表情が切り替わった。

「まさか……お嬢ちゃんが、“あの”迦唯なのか？」

男性は目を丸くした。

「どうすれば信じていただけますでしょうか？」

その反応を迦唯は不信と受け取ったようだった。

「おいおい、待て。信じないとはまだ一言も言っていないだろう」

「……まだ？」

「い、いや……その、なんだ。わかった。信じるから」

「……では本題に入りますよう」

迦唯は無表情に淡々と確認をしてゆく。

「御依頼内容は店主である逸いっ様のご子息、理り乃様の護衛。理乃様が
狙われている理由及び狙っている相手は不明。心当たりは特になし。
現在のところ相手との接触はなし。狙撃などの遠距離攻撃や尾行が
主。……よく無事でしたね」

「言つな……」

逸は非常に疲れた様子だった。

「理乃様はどちらに？」

「二階の一番奥の部屋にいるはずだ。俺はそろそろ仕事に戻らないといけねえ。後は任せていいか？」

「かしこまりました」

迦唯は理乃に会うために二階の居住スペースへ上がり、二階奥の扉をノックした。

「理乃様」

「だ、誰だ？」

「迦唯と申します。依頼を受けてギルドから参りました。入ってもよろしいでしょうか？」

しばらくの沈黙。やがて扉が少し開いた。

迦唯は待つ。

どうやら理乃はこちらを観察しているようなので、気が済むまでやらせたほうがいいと判断した。

「……いいよ」

「ありがとうございます。お邪魔させていただきましたね」

迦唯は刀を廊下に立て掛けて、部屋の中に入った。刀を置いたのは彼女なりの配慮だ。同時に、かなりのリスクを背負うことになるが。

部屋の中にはベッドと机と椅子くらいしかなかった。

机の上には大量に文字が書かれた紙が散らばっていた。

理乃はベッドに腰掛けていた。

「理乃様……女の子？」

彼の姿を見るなりそう口にしていた。

「ちがつ、男だー！」

迦唯が間違えたのも無理ない。理乃は中性的な顔立ちに小柄な体。背は迦唯と同じくらいか、少し低いかもしれない。その上、声も高めだった。

「申し訳ありません」

謝罪しつつ、年齢は自分より下と判断。

口にしたら失礼だろうが、かわいいと思った。

「……なあ、あんたって何歳だ？」

理乃が躊躇いがちに尋ねた。

「十五歳です。それから……私のことはどうぞ、迦唯と呼んでいただけないでしょうか？」

「俺の一個上か……。それだけしか変わらないのに。あんた……じゃなかった。その……か、迦唯は……」

理乃は何やらぶつぶつと呟いていた。

迦唯は聞き取れてはいたが、よくわからないので黙っていることにした。

その前にやらなければならぬことも、二つほどあるようだ。

彼女は理乃をいきなり抱き寄せた。

「なっ……！」

驚きはしたものの、彼が抵抗する様子はない。

迦唯は、理乃から伝わってくる震えが止るのをよしよしと頭を撫でてやりながら待つ。

「あ……」

やがて、理乃の震えが無くなった。

「もう怖がらなくても大丈夫ですから……。私が盾になりますので、ゆっくりと体を離す。」

そして気持ち、敵を狩る者のそれへと切り替えた。

迦唯の気配が急激に冷たい殺気を帯びたものになったため、理乃はそれが自身に向けられたものでは無いとわかっていながらも身動きをとれなかった。

「そこを動かないでいてください。すぐに済みますので」

動くなど言われた理乃は、それ以前に動けねえよと内心毒づく。

目を瞑った迦唯は理乃の部屋の四隅それぞれで手刀を振り降ろした。

何もなかった空間に小形の監視カメラが四器。それぞれ壊れた姿

で出現した。

どうしていままで気付かなかったのだろうと理乃は不思議に思った。

迦唯はせつせと壊れたカメラから何かを回収した。

「認識解除といったところでしょうか……」

「な、なんだよそれ？ 認識……解除？」

「言葉の通りです。実際には見えているはずのものを見えていないと思わせる。そうですね……。例えば今、理乃様の前に私がいて、それをあなた様は見ている。つまり認識している状態ですね。ところが認識解除は、たとえすぐ傍に誰かが、今で言うなら私がいたとしても、全く気付けないようになります。理乃様は私を見ることができなくなってしまうのです」

「わかったような、わからないような……。けど、どうして分かったんだ？」

「要は見えるものが見えなくなるだけなんですよ。つまり、視覚に頼らず、認識してしまわない方法で、そこに周囲となんらかの違いがあるかどうかを調べれば発見することは可能です。特別な道具も用いずにこんなことが可能だということは、どうやら相手は先天的、或いは後天的になんらかの要因により特殊な能力を得た存在である“獲得者”のようですね」

「よかった……。化け人じゃないんだな？」

理乃は安心したように言う。

しかし迦唯は頭を振った。

「いいえ。余計に性質が悪いです。化け人は、獲得者の出来損ないですから」

理乃の表情が凍りついた。

「なんでそんな奴が俺の部屋にカメラなんかしかけたんだよ！」

「獲得者である覗き魔に理乃様が女の子と間違われて……。そんな訳ないですね」

否定しておきながら、あながち間違っていないような気がしてい

た。

どうにも腑ふに落ちないのだ。

少なくとも狙撃犯とは別人。殺す気ならカメラなんて仕掛ける必要がそもそもない。

尾行はどちらの場合でも考えられなくはないが、ストーリーカーがエスカレートしてカメラを仕掛けたというのなら……。覗き魔と化したストーリーカー？

勝手に推察し、一人頷く。

どの道、敵なら斬るまでだが。

「俺はどっちであつても絶対に嫌だ……」

理乃は自分の腕で身を守るように体を抱えていた。

そして、体が動かせるようになっていたことに気がついた。

カメラを全て破壊した時点で迦唯が臨戦体制を解いたためだ。

「さて理乃様」

「理乃でいい。というよりもそう呼んでくれ。あと話し方も、無理し過ぎ」

迦唯はちょっと驚いた。一ミリくらい普段より目を開いた。

「どうしてわかったの？」

「……なんとなくそんな気がただけだ」

あまり面白くなさそうに言う彼を迦唯は不審に思った。

狙われている理由と関係があるのかも知れない。

同時に疑問も浮かんだ。もしかしたら理乃は……。

そこで自分が伝えなければならぬことを、まだ言っていないことに気づいた。

さっき伝えようとして、理乃に遮かきこられたのだ。

今度こそ、と口を開く。

「先に言っておくけど……今日からは私と常に一緒にいてもらうことになるから」

「は？ 何で？」

「いざという時に守れない」

正論だった。

いや、彼はわかってはいるのだ。しかし彼は同じ年頃の少女と行動を共にすることに、言いようのない気恥ずかしさを覚えた。

それに彼女はやたらと露出の多い恰好をしていた。理乃にとっては些いさか以上に刺激が強かった。

迦唯はまるで気づいていなかった。

理乃は知らなくて当然のことだが、彼女はそういうことを気にしてはいないのだった。

理乃の心境がまるで理解できていない迦唯は、さらに追い撃ちをかけた。

「トイレもお風呂も一緒だからそのつもりでいて」

「ばっ、馬鹿。なんてこと……」

「いたって真面目よ。もしかして……嫌なの？」

「嫌とかそういう問題じゃなくて……ああもう……！」

「なら問題無しね」

なんでそうなるんだと理乃は肩を落とした……。

第四話 一悶着

「理乃^{りの}って普段はどう過ごしているの？」

「狙われるようになってからは滅多に外に出てない。親父が家から出しゃがらねえんだよ。そうだ！ 今は迦唯^{かい}がいるから出してもらえるんじゃないか？！」

「……お父さんにちゃんと言ってからなら、構わない」

迦唯は内心苦笑した。もちろん表には出さない。

「親父ー！」

迦唯は部屋を飛び出す理乃を追う。扉の近くに立て掛けておいた刀を回収し、きちんと扉を閉めるのも忘れない。

そして一階へ。

階段を降りてすぐのところまで理乃が立ち止っていた。

一体どうしたのだろうと、その隣に並んで様子を見た。

酔っ払いが睨みあっていた。険悪なムード。

間もなくケンカを始めた。掴み合い殴り合う。

なぎ払われるテーブル上の酒瓶。蹴り倒される椅子、テーブル、近くにいた人。床に散乱した酒瓶は何本か割れ、破片が四散する。巻き込まれた相手もケンカに加わり、事態は泥沼と化してゆく。

「ケンカなら外でやれ脳ミソ筋肉馬鹿野郎ども」

理乃の父親 逸^{いつ}の怒声は、面白がって煽^{あお}る野次馬となった他の客達の声にかき消されて届かない。

彼は仕方なく、直に割って入って止めようとした。

ケンカを始めた張本人達二人は酒瓶をぶつけあっていた。相手を本気で殺すつもりなのだ。

ようやく二人の元にたどり着いた逸に、あるうことが酒瓶が頭目にかけて飛来する。

片方が手を滑らせたのだ。

逸は目を見開き、すぐにぎゅっと瞑った。

理乃はただ呆然とその様を見ているしかなかった。だから気付かなかった。すぐ隣にいた人物がいなくなっていたことに。

「親父　　！！」

理乃の脳裏に自分の父親の、頭から血を流して倒れている姿がありありと浮かぶ。

そして

「え……？」

疑問の声は、誰のものだったか。

店内の騒動が違うざわめきに変わった。

逸は不思議に思い目をゆっくり開く。

いつの間に？！

逸の目前に、彼を庇^{かば}うように立つ、引き締まった細い肢体。

赤いリボンで二つに分けられた長い絹糸のような黒髪。

間違いなく依頼で来たと言っていた少女だった。

左手には鞘に納まったままの刀。

右手には酒瓶　　自分に当たるはずだった物。

「大丈夫ですか？」

迦唯は念のため訊ねた。

油断なく周囲に気を配りながら。

誰も動こうとはしなかった。いや、動けなかった。

皆、彼女のことを知っていた。自分たちが束になってかかったところ、傷一つ負わせることのできない化け物であることを。

一気に酔いが覚めたのか、我に返った彼等は逸に謝罪し片付けを始めた。そして相応の額をそれぞれ出し、最後にもう一度「今日はすまなかった」と言い残して皆帰っていった。

理乃はようやく逸の元へ。

「親父……無事か？」

「ああ……」

親子揃って騒動を一瞬で終わらせた少女の顔をまじまじと見てしまふ。

「……ゴクリ」

二階で一對一だったときは気恥ずかしくて直視していなかった理乃は、息を呑んだ。

「おい理乃。変な気越すなよ。彼女はギルドのオーナーのお気に入りで。もし間違っても起こそうもんなら命がねえ」

律はひそひそと耳元で囁く。迦唯に聞かれなかったためだ。

そう言っておきながら、逸はものの数秒で視線が控えめな胸を経てミニスカートから覗く白い太腿へと向いていた。

「親父が言えることか？」

それに気づいた理乃はすかさずつつこみをいれた。

「うるせえ。まあ胸はアレだが顔はかわいらしいし、何よりあの見えそうで見えない絶対領いぶあつ、いてえな！ 何しやがる！！」

そして冷めた目を向け、告げる。

「鼻の下伸びてるぞ」

ふん、と鼻を鳴らす逸。

「お前もな。上でもそんなだったんじゃねえだろうな、ああ?!」

二人の不毛な会話はまだ少し続いた。

迦唯は二人の、いやらしい下心丸出しの視線にも動じなかった。

「……………全部聞こえてる」

横目で二人を見ながら、小声で、それこそ二人に聞こえないように呟いた。

一度くらいなら無料ただで抱かれてあげてもいいけど、と思いつつ聞こえないフリをしておく。

本人達はまるで気付いていないようだった。

半ば呆れながら、もう少し好きにさせておくことにした。

第四話 一悶着（後書き）

なんで三人称で書こうとしたのやら……と早くも後悔し始めている赤神幽霊です。へたさと苦手意識全開でお送りしております。修行が足りなさ過ぎました。読みにくい文章、申し訳ないです……。

第五話 彼の思惑

……十数分後。

「親父。少し出かけてくる」

理乃は約束通り訊ねてくれた。

「……止めても行くんだろ。迦唯さん。こいつのこと、頼みましたぜ」

渋々ながらも逸は許可を出した。本当は行かせたくないのだろう。

「はい」

迦唯も本心では逸に同意していた。相手がわからない以上、へたに動くのは危険だった。

「じゃ、行ってくる」

逸と迦唯の心配と不安をよそに、理乃は意気揚々と出口へ向かう。

「日が暮れたら無理やりにも連れ帰ります」

「ああ、是非そうしてくれ」

一つ頷くと、出て行こうとする理乃の後に続いた。

店を出た二人は迷路のような街並みを歩く。

迦唯は理乃の少し後ろを歩いていた。

理乃は上機嫌だ。鼻歌交じりに先に行く。

どこか行く場所でもあるのか、足取りに迷いが無い。

迦唯は一つ心配していた。

理乃が中心から外へ向かって進んでいるということだ。

無法地帯カースは蜘蛛の巣のような形をしている。大きな正六角形の中に小さな正六角形を幾つか内包するようになっており、最外周の各角から中心まで、一直線に通ずる大きな通りが六本、それぞれ伸びている。それらの中心にそびえるのがギルドだ。

無法地帯カースと言えども、暗黙の了解じみた最低限の秩序らしいものはある。それをもたらししているのがギルドで、そのギルドのある中

心に近づけば近づくほど安全性が上がり、逆に遠ざかれば遠ざかるほど危険性が増してゆくのだ。

迦唯一人ならどうってことはない。だが今は理乃がいる。ただでさえ正体不明の相手に狙われている上に、すれ違う者がいつ牙を剥くかわかったものではない領域に入ったとなると、正直、面倒見切れないかもしれない。

「さて、この辺でいいかな」

そろそろ日も暮れようかという頃、大通りに出て中心と最外周のちょうど中間くらいのところまで進んだところで、理乃は言ったのだった。

「どういう意味？」

迦唯は彼の真意を測りかねた。

「困だよ。餌をちらつかせてやれば向こうだって黙っちゃいないだろ？」

得意げに理乃は言う。

「……………どうして？」

「こんなことさっさと終わりにしたいからさ」

「私が嫌なの？」

「そういつわけじゃない。でも風呂やトイレまで一緒ってのはな…

…

「……………」

迦唯は無言で刀を抜き放つと、それを眼前に構え、腰の重心を僅かに低くする。柄をお腹の前で固定し、刀身をゆっくりと理乃の方に傾けた。正眼の構えだ。

今にも斬りかかりそうな勢い。

「お、おい!？」

動揺した理乃に対して迦唯は、冷たく研ぎ澄ました声で、

「どいて……………。お客さんよ」

と静かに告げる。

「へ?」

彼は慌てて迦唯の背後に隠れた。そして、迦唯の視線の先を見て絶句した。

こちらに向かつて駆けてくる“人影”が二つ。それらは、一見ただの人間に見える。しかし、それが故に異常だった。

一つ、それらは人間には成し得ない速度で近づいて来ていた。

二つ、それら腕は鋼鉄の鱗のようなもので覆われていた。

三つ、それらは関節を奇妙な形に捻じ曲げ、四足歩行していた。

そして最後に、とても人の声帯では出し得ない声を上げていた。

それは獣の叫びというより、化け物の叫びといった方がいい。まるで聞いたこともない、慣れないものが聞けば、背筋が凍るような声だった。

そいつらを、無法地帯の人間は大抵こう呼ぶ “化け人” と。

間もなくそれらは。自身の攻撃射程に入ったらしく、身を地面すれすれまで縮め、体のばねを使って飛び跳ねた。

どちらも、迦唯を無視して理乃を目指していた。

「うわあああ！！」

金属と金属が激しくぶつかり合う甲高い音が響く。

迦唯はそれらが突き出した両腕を刀で受け、そのまま力をうまく流して軌道を逸らした。

二つの影が理乃の両脇を目にも留まらぬ速さですり抜ける。

すぐさま二体は跳ね起き、接近戦を持ちかけてきた。

うるたえて動けない理乃の手を引き、自分の背に庇う。

「しっかりしなさい！」

果たして迦唯の叱責が耳に入っているかどうか。

そうしている間にも敵の攻撃は絶え間なく容赦なく浴びせられる。

理乃は信じられない思いだった。

迦唯は、二体の異様に素早い攻撃を全て捌き、一瞬の間とも言えないような間をついて一体の首を刎ねたのだ。

化け人の腕よりもお速い神速の剣技。

それを見た残りの一体はすつと身を退かせ、慎重に間合いを測り始めた。

そこへ鳴り響く一発の銃声。

理乃は自分の目を疑った。

空中で静止する、一発の弾丸。それも、自分の目と鼻の先で。

“何か”に阻まれた銃弾は間もなく地面に落下した。

「狙撃者まで出てくるなんてね。案外あなたの考えは良かったかもしれないわ」

「ど、どういふこと」

「今落ちた弾丸拾っておいてくれる？」

「ああ」

理乃は素直に従う。

そこへ続けざまに銃声が鳴り響く。

「ひっ！」

背後から情けない悲鳴が上がった。

「私から絶対に離れないで！！」

銃弾はやはり何かに阻まれ、一旦空中で静止した後、カランと地に落ちた。

理乃はその内の一つを拾い上げ、迦唯に寄り添うようにして立つ。

「なんで銃弾が宙に？！」

「後で説明してあげるから、今は気にしない……でっ！」

化け人の腕を押し返す。

狙撃が始まってから化け人は攻撃してはすぐに離れる、を繰り返し始めた。

知っているのだ。迦唯が動けないことを。

おそらく狙撃している相手と化け人は同じグループ。理乃を殺そうとしている者達。

そして、迦唯の能力を知っている。

仕方ないか。

迦唯は構えを解き、刃を納めた。

「か、迦唯？」

「これ持つてて」

と、刀を渡された理乃は大いに困惑した様子だった。

「つてええ?!」

次の瞬間、彼女は理乃を片手で抱き上げた。

改造して射程を無理やり長くした機関銃にでも持ち替えたのか、銃撃はもはや狙撃のレベルではなくなり、雨霰あめあられと降り注いでいた。

しかし、銃弾は何かに阻まれて届かないので全く気にする必要はない。

彼女は化け人に向かって走った。

「わひゃああああ!!」

理乃が素っ頓狂な声を上げた。

化け人は彼女もろとも理乃を串刺しにせんと鋭い突きを放つ。

紙一重でそれを避けたと同時に、迦唯の放った貫手が化け人の体を貫いた。

ズブリと肉とその奥の心臓を貫く、生暖かく嫌な感触。

迦唯は無表情に血に塗れた手を引き抜いた。

血が吹き出し、二人に降りかかる。

迦唯は理乃が血を浴びてしまわないように自分の体を前面に出した。

「!!!」

理乃は声にならない絶叫を上げ、失神した。

それに合わせて銃弾の雨がびたりと止んだ。

迦唯は弾が飛んできていた方向に向かって、気を失った理乃を抱えたまま走りだした。

普段の彼女ならこのようなことはしないし、追えてもあえて見逃すところだが、今回は機嫌が悪かった。彼女にしては、珍しく感情で行動を決定したことにまるまる気づけない程度には。

意識を失っても理乃は刀を手放さないでいてくれたので、片手は空いている。ならば、殺せる。

少し走ると、慌てて逃げ去る人影を見つけた。他に人の気配はなく、動きからもかなり熟練している様子が伺えたので、そいつを犯人と断定。

足音を殺して、走る速度を上げた。

道を何度も曲がって逃げる相手。

このままでは、いつも持ち歩いているナイフで狙いにくかったが、曲った直後ならば僅かな間だけでも射線軸上になる。その一瞬をっけばいい。

幸い理乃の体重は軽かった。そのおかげであつという間に追いつき相手と直線に並ぶと、スカートをたくしあげるようにして中に手を入れ、内側に作つてあるナイフホルダーから一本引き抜くと、それを勢いよく、無駄のない動作で投擲する。

狙いは違たがうことなく、ナイフは吸い込まれるように首に突き立った。

それは、確実に喉を貫いていた。

間もなくそいつは地に伏す。

彼女は倒れたそいつに近づき、念のため止めを刺すと踵を返した。もう日が落ちていた。早く戻らなければ逸に会わせる顔がない。

迦唯は無カース法地帯の道を熟知しているので迷うことはなかった。

最短距離を彼女はひた走った。

第五話 彼の思惑（後書き）

うう……相変わらず三人称（文章もだが）ヘタです。

テストが近いせいで魂燃え尽きそう（^| ^ ;

ある程度定期的に更新したいのですが、もしかすると……orz

第六話 思惑の結果

「ただ今戻りました」

「お……う？」

血に塗れた迦唯に抱きかかえられている理乃を見て、みるみる逸の表情が青ざめた。

「理乃!!」

駆け寄ってきた逸は迦唯から理乃をひったくるようにして引き取った。

「落ち着いてください。気を失っているだけです。どこにも怪我はありません」

「うるせえ!!」

逸の拳が迦唯の頬を打った。

もろに食らった彼女の体は少し浮き、床に倒れた。

口の端から血が流れた。口内を切ってしまったようだ。

それを拭おうともせず彼女は、「申し訳ありませんでした」と言っ
つて土下座した。

逸は自分の拳を見つめて驚いていた。

「す、すまない。そんなつもりは……」

ばつが悪そうに頭を掻きながら言った。

迦唯は立ち上がる。

「逸様がお怒りになられるのも無理ありません。少なからず精神的なショックを与えてしまっているでしょうし。これは自業自得です」

「迦唯さんは……怪我してるんじゃないかねえのか？」

「これは返り血ですので。心配して下さっているんですね。ありがとうございます
とっございます」

迦唯は丁寧にお辞儀した。

「まあともかく、血を洗い流してくるといい。シャワーは二階に上がってすぐの部屋だ」

「ですが……」

逸に返す言葉に詰まる。彼女は理乃の傍にいなければならないのだ。

「なに。返り討ちにされた以上、そうすぐにまた攻めてきたりはないだろうよ」

「………わかりました。万が一の時はお呼びください。飛んでいきますので」

確かにこの恰好でいつまでもいるわけにはいかなかった。それここは飲食店だ。衛生上とてもよろしいとは言えない。

ここは甘えさせてもらうことにした。

二階に上がり、脱衣所にナイフと刀を置くと、服を着たままシャワー室へ。

中は意外と広く、無^{カス}法^ス地帯では珍しい浴槽があった。湯船にはたつぷりとお湯がはってあった。

すぐ浸かりたいという欲求に見舞われたが、このままでは血が落ちなくなってしまう。

先にシャワーから冷水を出して頭から浴びる。

少し寒かったが、けれど冷たくて気持ちよかった。

適当なところで服を脱ぎ、手洗りする。排水溝に赤い水が吸い込まれてゆく。

「これでよし」

軽く絞って、今度は髪を洗う。そこでリボンを洗っていないことに気がつく。

「………」

丁寧に洗浄すると、ようやく自分の番。

こびり付いた血が落とされてゆく。髪が終わって体へ。こちらもすっかり血染めだ。

一通り洗い終え、全ての血を落とせたかを浴室にあった鏡で確認する。

「………」

まずは殴られた頬を見る。……痣にならなければいいのだが。
鏡に映る自分の姿。やがて迦唯の視線の先は起伏の乏しい胸に。
「む……………」

迦唯はかなーり気にしていたのだった。
それも数秒のことで、その後彼女はかけ湯をし、お湯に浸かった。
冷えた体がじんわりと温まる。迦唯は心地よさについて身を委ねた。

その頃。

逸は理乃を部屋まで運び、着替えさせてからベッドに寝かせた。
ほどなくして理乃は目を覚ました。

「ん……………」

「おお、気が付いたか」
視界に飛び込んできた、父親の顔。

「……………親父？　ここは……………俺の部屋か。一体何が……………」
「俺が知るか。それよりも迦唯さんに感謝するんだな」
「迦唯という名前を聞いた途端、彼は跳ね起きた。」

「そうだ、迦唯は?!」
理乃はあわてふためき飛び出そうとしたが、逸に落ち着けと体ごと
と押さえつけられる。

「彼女なら、風呂に入ってもらっている。安心しろ」

「そうか……………よかった」

理乃はホッと胸を撫で下ろす。

逸はそんな彼をニヤついた顔で見る。

「な、なんだよ気持ち悪いな!」

「おい、親に向かって気持ち悪いとはなんだ。まあいい。それより、
理乃、まさかお前……………」

「ど、どうしたんだ……………」

いつになく真剣な表情をする自分の父親に、理乃は戸惑いを覚え

た。

「あの子に惚れたんじゃないかねえだろうな？」

「……は？」

「なんだよ。びっくりさせるなよ、まったく。それにしてはやけに心配してるみたいじゃないかねえか」

「それは……」

目を逸らして言い淀む。

理乃のこういう仕草は何か自分に非があったときだ。そのことを知っている逸は訝しんだようだ。

「何があったか、隠さず話せ」

「うん……」

理乃は、訥々（とつとつ）と語り始めた。

「馬鹿野郎！！」

さっぱりした迦唯がバスタオルに身を包んで廊下に出るといきなり、耳が痛くなるほどの怒声が聞こえた。

声は奥の部屋　理乃の部屋からだった。

何事だろうと、部屋に向かう。

「だ、だつてよ！！」

理乃の声。意識を取り戻していたようだ。

「だつてじゃねえ！　わかつてんのか？！　お前は自分だけじゃなく、迦唯さんまでいたずらに危険な目に合せたんだぞ！！」

「悪いかよ。俺を守るためにアイツを雇ったんだろ？！　ただでさえ金がねえのに、ギルドに高い金払って……。だつたら、さっさと終わらせた方がいいに決まってる！」

「やり方つてもんがあるだろう！　どうして何も相談しなかったんだ！　だいたい、ガキのくせに家の金の心配なんかするんじゃないねえ！！！！」

「　　っ！！」

急に扉が開いたかと思うと、中から弾丸のような勢いで理乃が飛び出してきた。

「……！」

案の定、廊下にいた迦唯は理乃とぶつかった。

廊下はすれ違うには少し狭かったため、さすがの迦唯も避けられなかったのだ。

「いつ、ててて……」

「……」

理乃は額を押さえていた。

「待ちやが……れ？」

後から出てきた逸が凍りついた。

「お前……なんてことを」

逸はこの世の終わりを見たかのような、絶望感溢れる声を絞り出した。

「え………？」

理乃は迦唯の上に覆いかぶさるようにして乗っていた。

問題は、彼女の体を包んでいたバスタオルがはだけて、白い裸体が露わになってしまったことだ。

理乃の視線が思わず顔から下へ流れる。

迦唯の控え目な胸を、続いて腹、へそ、腰、そして……その先も、見てしまった。

「ごごごごごごごごごごごごごごごごごめめめめめごめんなさい……！」

彼が何が言いたいのかは、辛うじてわからなくもない。

急いでどここうとする理乃だったが、焦ったために体勢を崩して彼女の体に倒れこんだ。

拳句の果てに、すぐに起き上がるうとして手を床に突こうとするもうまくいかず、彼女の胸に手をつけてしまった。

理乃は思った。とても掴みにくい。

けれど、確かに“それ”だった。それ特有のやわらかさが掌に広がった。

「さつさとどきやがれ!!」

理乃は逸に体ごと持ち上げられて、ようやく離れる。

……触れた肌はしっとりとしていた。

その間、迦唯は顔色一つ変えることなく、一体何をそんなに動揺しているのだろうと不思議に思っていた。

別に不快感など無い。けれど、面白いのでこのまま黙って見ていることにした。

「……ああ、もうだめだ。殺される。オーナーに殺される」

逸の嘆く声が聞こえた。

理乃はそれを、ぼーっと遠い世界の出来事のように聞いているみたいだった。

第七話 ギルドにて

翌日。

結局昨夜は何事もなく、平穩そのものだった。

迦唯は理乃の部屋の椅子で座ったまま眠った。着ていた服が乾くまで、理乃の服を借りて。

目を覚ました迦唯は、干しておいた自分の服を取りにいった。服は乾いていたのですがすぐに着替えた。ついでに頬を確かめたが、幸い痣にはなっていないかった。

一階からはカチャカチャとした物音。おそらく逸だろう。

暇なのでしばらく理乃の寝顔を眺めていた。

しばらくして、ゆっくりと瞼が開かれる。

そしてそのそと起き上がる。

「おはようございます」

「……？」

不思議そうにこちらを見る理乃。どうして迦唯がいるのか、まだ思い出せていないのだろう。少しの間をおいて、その顔がみるみる赤くなった。思い出してくれたらしい。でも、どうして赤くなるんだらうと疑問に思う。

「おおお、おはよう！」

彼は大慌てで挨拶を返してきた。それはいいのだが、どうしてつかえたのだろう。

昨夜のあの出来事から、どうにも彼の様子がおかしい。

「どうかしたの？」

迦唯は一応訊ねてみた。

「な、なんでもない。それより下行くぞ。飯だ飯！」

「……なら、後ろ向いてるから早く着替えてね」

「お、おう……」

着替えを済ませた理乃と共に一階へ。

「逸様、おはようございます」

「ああ、迦唯さん。おはよう。飯ならできてる。先に二人で食べていってくれ」

「はい」

テーブルの一つに三人分の食事があったので、その一席に腰かけた。

理乃は無言で席に着き、食べ始めた。

迦唯も、理乃が食べ始めてから、ありがたく頂く。

「お前も挨拶くらいできんのか……」

少し呆れた様子だが、あまり咎めるような響きはない。

「……おはよう、親父」

理乃は気のない返事をした。

「どうしたんだお前らしくない。もしかして昨日のこと気にしているのか？」

「悪いかよ……」

「悪いとは言わんが……」

「気にするって、一体何を？」

昨日のことなどすっかり過去のことと、それが仕事であった、として完全に割り切ってしまったていた迦唯にとつて、理乃が何をそんなに気にしているのか皆目見当もつかなかった。

「昨日のことだよ!」

「自分を困にしたこと？ 廊下でぶつかったこと？ それとも押し倒したこと？」

迦唯は可能性を列挙してみた。

みるみる理乃の顔が紅潮していく。

「困……」

理乃はなんとかそれだけを絞り出した。

「確かに少しは苛立った。けど理乃を守るのが私の仕事。だから、できるだけ意思を尊重しなければならない。それに結果的には良かったからいい」

そう告げる迦唯の表情は変わらないままだ。

「……そうなのか？」

「二度も言わない」

「良かったって、どういうこと？」

「昨日拾ってもらった弾丸とか、手がかりになりそうなのをいくつか得られた。そこで一つお願いがあるのだけれど……」

「な、なんだ？」

何を要求されるのだろうか、理乃は少し不安顔になった。

「私と一緒にギルドに行つて欲しいの」

「えっと……」

「行つてやれ。心配いらねえよ。取つて食われたりはしない」

仕事にきりがついたらしい逸が、席に着くなりそう言った。

「逸様、ありがとうございます」

「ああ。ま、後は本人次第だが」

二対の視線が理乃に注がれる。

「わかったよ」

「では、食事も済んだし早速行きましょう」

「おう、気をつけてな」

逸に見送られ、二人はギルドへ向かった。

ギルド第一階層。

迦唯は理乃を伴つてリノリウムの廊下を歩いていた。

理乃はさきほどから自分達、特に迦唯に向けられる視線が、奇異だけでなく畏れや敵意、嫌悪を含んでいることが気になった。

「なあ……迦唯って……」

「みなまで言わないで。私はこの人からしてみれば異分子なの」

迦唯は淡々と述べる。前を歩くその表情は伺えない。

「そう、なのか？」

「私以外に小娘いないから」

「知り合いとか誰もいないのか？」

「いな……」

迦唯はいない、と言おうとして固まった。

「お、迦唯じゃねえか。相変わらずおっかねー顔してんな」

迦唯に話しかけたのは軽薄そうな、年若い男性だった。

燃え盛る炎の様な赤い髪が目を引いた。

「知り合い？」

「こんな人知らない」

理乃の質問とほとんど同じタイミングで迦唯は否定した。

「おいおいそりゃねーだろ?!」

「理乃。この人の言葉を真に受けちゃダメ」

「ほー、ついに迦唯にも春が……って冗談だ。だから刀を下げてくれ」

男の首筋にあてがっていた刃をどける。

いつ抜刀したんだ?!

理乃は改めてこの少女が並の人間ではないと思った。

「心配すんな。俺にも見えねーからよ。見切れんのは麻莉亜くらいさ」

まるで理乃の心境を見越したかのような口ぶりで男は言った。

「麻莉亜？」

「オーナーの名前」

疑問の声には迦唯が答えた。

「んで俺様は……」

「理乃、いきましよう」

男が何かを言い始めるなり理乃の手を引いて先に行こうとする。

「だあぁっ！ 待てコラ！ 無視すんな!!」

「ギルドのナンバー2、シエオル。私より強い人」

一旦立ち止まるとそれだけ告げて、また歩きだす。

「おおっ……迦唯に褒められた。感激だ!」

浮かれたシエオルはなぜか着いてきた。

「馬鹿言わないで。私より弱い人のほうがよっぽど問題よ。私みたいな青二才くらい軽くあしらえないで、一体なにができると言うの？」

迦唯は諦めたのか、相手をし始めた。

「手厳しいねえ……。けどよ、誰もがお前みたいに強くなれるわけじゃない。お前はいろんなものに恵まれ過ぎてるんだよ」

「どうせなら胸にもう少しだけ大きくなってもらいたいわ」

「迦唯?!」

理乃は予想外の言葉に驚いた。

気にしてたんだ……。

「そいつは……。まあ、それはそれで需要あんだろ」

さすがにこれにはシエオルもどう返すべきか迷ったらしい。

「……そう、かしら」

迦唯はあまり納得していない様子だった。声に力強さが無い。

「ところでシエオル」

「あん？」

「あなたもオーナーに用事？」

「ああ。お前にも関係あることだ。だからこのまま一緒に行かせてもらうぜ」

「私にも? ……仕方ないわ。我慢する」

「我慢つて! おいおいひでえぜ……。なあ? ……えっと、理乃だったか」

シエオルは理乃に同意を求めた。

「た、確かに……」

「さっさと行くわよ」

迦唯はスタスタと行ってしまった。

理乃はシエオルと顔を見合わせ、お互いに肩をすくめて見せた後、足早に進む彼女を追いかけた。

第八話 二人の報告

「麻莉亜まりあさん」

迦唯かいは扉に向かつて呼びかけた。

「入っていいわよ。可愛らしいお客さん。迦唯ちゃん。シエオル君」
どこにも監視カメラのような、内側から外を見られるようなものはない。にもかかわらず、麻莉亜は扉の外に誰がいるのかわかったらしい。

理乃は目を丸くした。

そんな彼に気づくこともなく、なんの疑問も抱いていないのか、迦唯とシエオルは扉の向こうへ。

中はどこかの城の謁見の間のようなところ。

玉座に足を組んで座る女性 麻莉亜が微笑みで三人を迎えた。

「理乃りの。あの女性むすめがギルドのオーナー、麻莉亜よ」

「あ、ああ……」

理乃は少しばかり気圧されてしまっているようだった。

無理もないと迦唯は思った。自分も初対面の時は、思わず発矢の後ろに隠れてしまったのだから。

なんとというか……。普段は感じることはない、空気の重さを急に感じさせられるというか、体が重くなるのだ。息も苦しくなったのを覚えている。

麻莉亜が戦っているところを見たことはないが、彼女が普段から纏うこの威圧感から思うに、相当強いのだろう。なにせナンバー1なのだし。ただ、消そうと思えば消せるはずなのにそれをしないところから察するに、相手がどうという反応をするのか楽しんでいる気がする。

理乃をこのままにしておくのも忍びないので、さりげなく彼を背に庇うように立つことにした。

「レディファーストってことで、迦唯からでいいぜ」

シエオルが気障つたらしく先を譲る。

迦唯は小さく一つ頷く。

「護衛対象　ここにいる少年、理乃を狙っているのは機関で間違いなさそうです」

ポケットから弾丸一発と、それと同じくらいのサイズの正方形の何かを取り出し、麻莉亜に手渡す。

それを見た麻莉亜の顔が険しいものとなった。

「弾丸は機関構成員専用品。正方形のこれは化け人の思考をコントロールする専用のチップね……」

そして溜息を一つ。

「どうしてわかるんだ？」

理乃は迦唯に囁く。

「昔は機関所属の研究者だったらしい」

「なんでまたそんな人が……」

「知らない。気になるなら自分で訊いてみて」

「う……。やっぱりいいや」

彼は少し逡巡して、結局は断念した。

「それで迦唯ちゃん。本題は何？　あなたのことだから、他にあるんでしょ？」

「もしもの時は私の代わりが必要ですので後任をと……」

麻莉亜の問いかけに、感情を殺した声音で告げた。

「やけに弱気ね。あなたらしくもない」

「その理由は多分……」

迦唯は静かにシエオルを見やる。

「お察しってわけか……」

彼は、ばつが悪そうに頭を掻いた。

それで麻莉亜もだいたいわかったらしい。とても聞きたそうには見えない顔をしながらも彼女は促す。

「シエオル、報告して」

「……発矢が化け人となつて機関の手駒となつた。その上、有して

いた獲得者としての能力を残したままだ。ありやかなり厄介だぜ。ギルドのベスト10の内、手の空いていた10から5までの、合わせて6名と俺を同時に相手して無傷だ」

「その人たちは？」

迦唯は彼らが逃げられていないことを前提に問いを発した。

「化け人にする気もなかったのか、みんな殺されたよ。ひでえもんだったぜ？」

「まあいらないわよね。極めつきなのを手に入れたんだから。ここはこれ以上厄介な化け人が増えなかっただけでもよしとしましょう」
麻莉亜が疲れたように言った。

「あ、あの……発矢って？」

理乃はおずおずと訊ねた。

「私を育ててくれた人」

迦唯はたった一言、そう告げた。そしてそれきり口を閉ざした。

「迦唯ちゃん、話してもいいかしら？」

麻莉亜が優しく問いかける。

迦唯はそれに対して、

「好きにしてください。ただ、私からは言いたくありません」と答えた。

「……という訳だから私が代わりに話すわね。何か他に聞きたいこと、ある？」

理乃は少し逡巡した後、発矢という人物がどれほどの力を有していたのかを問うことにした。迦唯を育てたのだからさぞ強いのだろう。それは容易に想像できる。だが、迦唯がどうして自分がまるで死ぬかのように、死を前提としているような行動　後任を頼もうとする　を取ったのかがわからなかったのだ。

自分では倒すことのできない相手が敵にいて、それも近いうちに刃を交えることを悟っているかのように感じられた。

しかし理乃は、この自分の考えが飛躍し過ぎていることに気づいていなかった。

「発矢さんはどういった能力を有していたんですか？」

「いかな手段を用いようともせいぜい皮膚を浅く裂くことしかできないほど頑丈なものに体を作りかえることができるわ。発矢の武器はその金剛のような、いえ、金剛なんて目じゃないくらい肉体そのもの。その上衝撃にも強い。なにせほとんどの攻撃がまるで効果がないほどに固いものだから、そんな状態になった腕や足で殴られたり蹴られたりなんかしてしまうと、受けるダメージは計り知れない……」

「そんな……」

「そんなの、無敵じゃないか。」

理乃は愕然となり、思ったことを口にはできなかつた。

「もちろん欠点と弱点もあったわ。目と生殖器は硬化しない。そして移動速度も低下する。発矢は攻撃と防御の時だけ体を硬化させていたから、移動しているときに攻撃を当てられればよかつた。あと、発矢の防御力を貫ける武器が、私の知る限り二つあるわ。でも一つは矢われ、もう一つはあまりにも非現実的なもの……存在するかどうかさえ怪しいわ」

「弱点が過去形ということは……」

「化け人と化したということは、当然身体能力が向上している。そして、おそらくは硬化したままであっても移動速度は変わらないでしょうね。目なんて狙う余裕もないだろうし、化け人になった時点で普通の人だった頃の急所はもはや急所ではなくなっているわ」

理乃は言葉を失った。会話が途切れ、間が空いた。そこへ

「……そういえばだが」

黙って話を聞いていたシエオルが不意に口を挟んだ。

「どうしたの、シエオル君？」

「発矢はどうも他の化け人と違って、獣のようにはなっていないかつた。確かに速度も力も増していた。しかし、それらしい動きも少なく、あいつらが上げる叫び声がなかった」

『それって……』

麻莉亜、迦唯、そして理乃の声が重なった……。

室内に重い空気が漂った。

誰も言葉を発しようとはしない。

永遠とも思える時が過ぎてゆく……。

「……仕方ない、か」

しばらくの静寂を破ったのは迦唯だった。

「シエオル。あなたに私の後任を依頼するわ」

「……そうくるだろうと思ったださ」

「お願いします」

迦唯は深々と頭くぶを垂れる。

「……ま、いいだろう」

「ありがとう」

迦唯がその言葉を口にした途端、シエオルと、麻莉亜までもが面喰らった。

なぜ二人がそうなったのか、意味がわからない迦唯は思わずきよとんとした。

このとき、迦唯の表情にごく僅かながら生じた変化。麻莉亜もシエオルも気づかず、迦唯本人すら意識していなかった。

理乃だけが「あっ」と小さく呟いていた。

運がいいのか悪いのか、迦唯はおろか誰にもその声は聞き咎められることはなかった。

理乃は、もし迦唯の耳に入っていたら一体何を言われたのだろうか
かと少し気になった。

「あの……お二人ともどうしたんですか？」

迦唯は不思議な二人に問いかける。

「い、いや……だって、な……。お前が礼を、それも麻莉亜や発矢、
そして客でもない相手に言うなんて珍しいと思っただが……」

「ええ。特にシエオルに対しては特にきついあなたが……」

「シエオルというよりは男性に対してです」

迦唯は即刻訂正した。

「じゃ、じゃあ僕は……？」

聞かなければいいのに理乃はついっかかり口にしていた。

言ってから自分の愚かさに気がつく。ああ……これでは罵倒してくれといっているようなものであって、それを自ら望んでいるようなもの……。

理乃の心中は一瞬の内に悔恨と自責に満たされた。

すうと目を細めた迦唯は理乃を見て、何かを思案しているかのよう
に視線を斜め上に走らせて

「……そういえば理乃は男の子だった」

たった今思い出したとばかりに呟いた。

理乃はがっくりと肩を落としてうなだれた。

その肩をシエオルがポンと優しく叩いた。

麻莉亜は笑っていた。必死で両手で口を押さえ、声を漏らさない
ようにしていた。目じりには涙が浮かんでいる。

「冗談のつもりだったのだけれど……」

迦唯は一人、何がいけなかったのだらうかと首を傾げた。

第九話 彼女の家へと

「私が住んでる家に寄っていい？」

ギルドの出口で迦唯は傍らに立つ理乃に訊ねた。

「ああ。別に構わない」

「なら、ついて来て」

理乃は歩き出す迦唯に従う。

「三メートル以上離れないように気をつけて」

迦唯は後ろを振り返ることもなく告げる。

「どうして三メートルなんだ？」

「……そういえばまだ教えていなかった」

「何を？」

「銃弾が空中で止まった理由」

「……そういえば！」

後ろではっとする気配がした。

「理乃はあの時、気絶してしまったから」

迦唯の口調には責めるような響きは全くなく淡々としていた。

しかし理乃は負い目を感じているらしい。

「う。そりゃあんなに血が降りかかってくるなんて……」

言い訳がましいと思いつつもつい口に出してしまったといった感じだ。

「あなたの分まで私が浴びておいたわ」

理乃の内心にまるで気づかない迦唯も迦唯で、追い討ちをかけるような言葉をさらっと言っただけ。

「ご、ごめん……」

「なんで謝るの？」

「だってよ……」

そしていつかと同じようなパターンを繰り返していた。

「血に塗れることにはもう慣れたわ。十一歳の時には人も化け人も

殺してた。でも、もつと嫌なものがあるし、それについては塗れるどころか結構な量を飲んだ。そんな事に比べればよっぽどマシよ」

「え……？」

「話が逸れてしまったわね。戻すわ」

迦唯は理乃が何かを言う前に軌道修正を試みた。

それは何の感慨も込められていないような声音だった。

しかしそれ故に、理乃はなんだかこれ以上は踏み込んではいけないような気がして開きかけた口を閉ざす。

前を歩く彼女がどんな表情かおをしているのか見られないことに、理乃はもどかしさを覚えた。気になるのならば見ればいいし、一声かけて振り向いてもらってもいいのだが、彼女の背はそれを拒んでいのように感じられた。

「あれが私の獲得者としての能力。私を中心とした半径三メートル以上離れた地点からの現象や攻撃を、もしくは行動を起こした本人との接点が絶たれたものを防ぐことができる。普段は意識して使っているけど、条件を設定すれば自動にすることもできるわ」

迦唯は何の脈絡もなくそれらを一気に告げた。

当然、理乃は理解できない。あれ、とは銃弾が空中で停止したことでだろう。

「半径三メートル以上離れているものに関してはいいいわね？」

「……一応」

「ま、まあいいわ。行動を起こした本人との接点が絶たれたものについてだけど。例えば……そうね、銃口から放たれた後の銃弾とか、ボウガンや弓から放たれた後の矢といったものがこれに当たるわ。

これについてはたとえ零距离でも防ぐことができる。どうあがいたって隙間は生じてしまうもの。ちなみに条件の設定による自動防御は、銃弾を止めたあのとときで言うと、『理乃に危害が及ぶものを排除』というように、誰に、そして何に対して効力を発揮するのかを決めておけばいいの」

「……なんだかやけに強力じゃないか？」

「まずは説明を眠らずに聞いてくれてありがとう理乃。そうね。けれどそれはあくまで守りに関してよ。それに、接近戦が主体の相手にはまるで意味がないわ」

「確かにそうだけど……。でもそれって逆に言えば三メートル以下の間合いで行われる接近戦以外で、直接的に攻撃されない限り負けないってことだよな」

「……………発矢の能力を忘れたの？」

迦唯は呆れたのか、ため息をついた。

「っ！」

「私の刀なら逆に折れるし、貫手なら手が潰れる。居合なら効果は……かすり傷を負わせるくらいね。もし出会ったらすぐ逃げて。そしてギルドに保護を求めなさい」

「そんな……………」

「安心して。あなたが逃げる時間くらいは稼ぐ」

一旦立ち止まり、後ろをちらりと見やった彼女は、それ以上何も言わずにまた歩き出した。

理乃は何も言えなくなった。口は開きかけたままの中途半端な状態だった。歩き出す彼女の背に手を伸ばそうとして 止めた。

今見た彼女の横顔。その口元には笑みが浮かんでいた。

一体それがどういう意味なのか、理乃には見当もつかなかった。

かける言葉すら浮かばず、触れることすらできない自分を情けなく思った。

本当に、どうして自分なんかが狙われているのだろう……………。

疑問の答えは己が内に無く、彼はどうしてと心中で何度も問いかける他無かった。

それから迦唯は、道を大通りから、同じような風景が続く複雑に入り組んだ路地へと進み、右へ二回、左へ一回、三又に分かれた道を直進、そして最後に右へ一回曲がって、何かの組織の事務所だっ

たらしい建物の前にたどり着いたところで立ち止まった。

他に道はなく、あたりを見回しても建物の壁ばかりで、目の前の事務所跡地以外にその入口があるものは無い、そんな場所である。

ギルドからはさほど離れてはいないが、道順を知らなければ容易にここへはこれなんだろうなと理乃は思った。

「この中を通り抜けるけど、私の足跡以外を踏まないようにして。

誤差十二センチメートルまでなら大丈夫だけど。もし適当なところを踏んでしまったら、死ぬと思って」

振り返って、真剣な眼差しをこちらに向ける迦唯さんは物騒なことをおっしゃられました。

今……なんだった？ は？ 死ぬ？ 理乃は自分の耳がおかしくなったのではないかと不安になった。

何も言わずにぼかんとする彼の様子から、理乃がまさかと思っているらしいことを察した迦唯は、

「よく見ていなさい」

と、何かを探すかのように近くの床を見定めた後、見つけたその床の部分を踏んだ。

「へ?!」

その床の真上と部屋の四隅から鋭い矢が計五本、迦唯目がけて飛来した。それらの内二本は一メートルほど飛んだところで何かに阻まれて床に落下。迦唯から半径三メートル以内の地点から放たれた残りの矢は、彼女の体に吸い込まれるようにして突き刺さらずに、その肌に見た感じでは触れているとしか見えない地点でピタリと静止して、先の二本と同じ運命を辿った。

「この他、私の能力で防ぐことができない罫を多数設置しております」

愕然とする理乃に表情を変えることなく、そう言っただけだ。

「しゃ、しゃれにならねぞコラ！ 殺す気か！」

「そんなことしない。だから私が道を示す。それとも……」

「そ、それとも？」

「おんぶ？ それより、だっこの方がいい？」

「ぐっ……」

「嫌なの？」

迦唯は詰まる理乃に対して小首を傾げて見せる。それに伴い、二つに分けられて背中を流れる長い黒髪が尻尾のように揺れた。

「じ、自分で歩く！」

顔を赤くして理乃は言い放った。

「そう」

なぜか迦唯のその声は楽しそうだ。

「ゆっくり行くから安心して」

「お、おう……」

先に行く迦唯は危なげなく（当然だが）歩を進める。理乃は彼女の歩いた後を、恐怖で少し震えながらも慎重に、見えない足跡に自分のそれを重ねるようにして進む。

入口の対面の壁に到達すると迦唯は体の向きを変え、背中を壁に預けた。

「ここに着いたら真似して」

体を壁に密着させるようにした彼女は掌を、少し力を込めて背後の壁に打ちつけた。

すると壁の一部が回転し、彼女の体を外へ運び出した。

「ここはからくり屋敷かつ！」

一歩踏み出しながら思わず叫ぶと、その拍子でバランスを崩して倒れそうになる。

迦唯は道を歩いているかのように一歩一歩が自然な運びだったが、理乃は彼女と背はあまり変わらないはずなのに、足を精一杯伸ばさなければ誤差範囲内ぎりぎり危うかった。

「お、つとつとととおおあああ危ねえ！！」

何とか体勢を立て直し、足を無事に下ろした彼はほっと息をついた。

壁際に辿りつき、「こうか？」と迦唯の真似をして壁を叩く。

すると視界が一気に回転、そして目に映る黒い“何か”。それが去ったと思った次の瞬間。

赤い色をした鋭い物が正面から迫ってきた！

避けることも、声を上げることすらできない。理乃は思わず目を瞑りかけた。

その時、薄く開いた目に映ったのは、その色よりまなお赤い飛沫を撒き散らしながら宙を舞う、赤く鋭いものだった。

「ギャジュギョジャガバヴェイイイイイイイ？！」

大音量の奇声が響きわたる。それにともない、どこかに潜んでいたらしいカラスが多数、羽をばたつかせて空へ飛び立った。

奇声が聞こえた方向を見ると、巨大な蝙蝠の翼を持った人間が苦しみ呻いていた。

そいつには赤く鋭い刃が先端に生えた尻尾があり、その尾は二又だった。しかし、一方は半ばで断ち切られている。

そうしている内に、目先に赤く鋭いものが降ってきた。

さっきのはアレの尾だったのかと呑気に納得していると、長い黒髪を靡^{なび}かせて宙の相手に飛び込む少女の姿。迦唯は刀を鞘に納めたまま地上十メートルくらいのところを飛翔している。下から見上げているので彼女のスカートの中が見えた。何本ものナイフが内側に作られたホルダーに入れられている。そして、水色と白の縞模様の下着……。

鼻の下を少し伸ばしながらも、一体どうやったのだろうかと考える。周りは高い建物が何軒か向かい合っているだけだ。道幅も狭い。理乃は自分の置かれている状況がいまいち呑み込めていなかった。というよりは理解が追いついていない。つまり冷静に観察しているのではなく、ただ茫然と見ているというのが正しい。

迦唯は標的が間合いに入ったのか、素早く刃を抜き放った。

反射的に身を守ろうとしたのかそいつは鋼鉄の鱗で覆われた腕で体を庇う。

迦唯とソイツ　　化け人らしきもの　　が交錯する。

彼女は音もなく四肢を使って地に降り立つ。まるで猫のようだ。刀はすでに鞘の中に納められていた。立ちあがる彼女の背後に二つの物体が落下し、鈍い音を立てた。そしてそれは、地面に赤い水たまりを作り出した。

「処理完了。……待たせた？」

迦唯はこちらを見て何事もなかったかのように訊ねた。

「……いや」

「そう。ならいいの。さ、行きましょう。といってもすぐに着くけど」

そう告げると歩き始めた。

理乃は彼女の三メートル以内に追いついて入ると、一度だけ後ろを振り返った。

「……！！」

からくり部屋の回転扉の両脇に、先ほど迦唯によって真つ二つにされた化け人らしきものと同じ見た目の個体が二体、ナイフで縫いつけられていた。

理乃はつい彼らに同情してしまった。なんだか、あまりにも一方的過ぎるような気がしたのだった。いや、迦唯が怪我をしたらそれはそれで嫌なんだが……、と彼の心情は複雑だった。

第十話 彼女の家にて（前書き）

なんだかコメディみたいになりました……。ナゼデシヨウ（え

第十話 彼女の家にて

それから一分ほどでなかなか立派な屋敷についた。

「もしかしてここ……?」

理乃は戸惑い気味で訊ねる。

「ええ。ただいまー」

「ただいまって、誰かいるのか?」

迦唯による返答がなされる前に、二つの「おかえりなさい」が聞こえた。

しかし、家の中に人影は見当たらない。代わりに、白い猫と黒い鼻が現れた。

「迦唯、どうしたの?」

声は足下から。それも、白い猫が発したように思われた。

迦唯は白猫を抱きかかえるとその背中を優しく撫でる。

「うん。ちょっと必要な物を取りに来たの」

明らかに猫に話しかけている。

理乃は信じられない思いだった。でも、確かな現実として目の前で実演されている。

「そちらの方はどちら様ですか?」

彼女の肩に留まった黒い鼻びくが理乃の方を見ながら訊ねていた。

「お客様よ。彼の名前は理乃。今回の護衛依頼の守るべき人」

「なあんだ、彼氏じゃないのかー」

「そのようですな」

残念そうに猫と鼻。

「二人とも残念でした」

二人ということは、迦唯は猫と鼻のことを人として見ているのだろうか。

それにしても、彼女の纏う雰囲気がこれまでと一変している。冷たい感じから、温かい感じへ。表情の方にも変化がよく見られた。猫

を抱きながら、鼻に頬擦りしている彼女の表情は、可憐に咲く花のような笑顔だった。

理乃は初めて見た彼女の少女らしい表情に少し見とれた。

「どうしたの？」

じっと見つめてくる理乃の視線に気づいた迦唯は疑問に思っ
て訊ねた。

「な、なんでもない」

「変な理乃。とりあえず私の部屋に行きましょう」

案内された部屋は思っていたよりも殺風景だった。

ベッドと服かけ、そして机くらいしかない。家の中では思いのほ
か明るかったので、飾り気が少しはあると思っていたのだが、理乃
のその予想は外れた。

「何というか……らしいと言えばらしいんだが……」

「理乃殿。それは言わないで上げて欲しいのであります」

「そうだよ。迦唯だって気にしてるんだよ？ ただ、どうしていい
のかわからないだけなんだ」

「う、ごめん……」

猫と鼻に注意されてしまった。

「二人とも、人があまり言いたくないことをぼろぼろ言わないよう
にしてね」

迦唯は二人にやんわりと釘を刺している。

「理乃。なにか飲み物持ってくるから適当に腰かけて待ってて。ネ
ア。ファウ。失礼のないようにね」

そう言っ
て彼女はどこかへ消える。

猫と鼻とともに理乃は残された。

「……」

沈黙が辛い。しかし何を話せばいいのだろうか。相手は猫と鼻。
途方に暮れる理乃の足下に猫がやってきた。

視線が合う。

「……………」

なぜだかじつと見つめられている。理乃はなんだろうと疑問に思った。

「ふーん。女装したら似合いそうだね」

やがて口を開いた猫はそんなことを言い出した。

なんだって？

どう反応したものが、戸惑う。

「あ、僕はネアだよ。よろしくねー」

そして猫によりしくされてしまった。

「よ、よろしく……………」

理乃は先の発言はとりあえず置いておくことにした。

「そしてワタクシが……………」

「ねえ理乃ー。理乃は迦唯のことどう思う？」

ネアは何かを言おうとした鼻を遮って彼に詰め寄った。

「えーっと……………」

理乃はどう答えていいのか迷う。やっぱり当たり障りの無い方が

……………などと考える。

「ファウと申し……………」

「どうなの？ どうなの?!」

ネアは目を爛と輝かせて急かす。

理乃とネアにはファウの声は届いておらず、完全に無視されてしまっていた。

「いいんですよ……………どうせ……………」

気がつくとも鼻が扉の前でいじけて（？）いた。

「どうしたのー？」

ネアは自分のせいだと“知っていながら”聞いた。

ファウはぶつぶつと何かを呟くばかり。と、その時。

「お待たせ」

迦唯が戻ってきた。

ファウは丁度扉の前にいた訳で当然のことながら、

「ふおう?!」

弾かれた。

「……! ファ、ファウ?! ご、ごめんなさい」

そして迦唯に抱えられる。

「迦唯殿……ワタクシはもう駄目であります……。迦唯殿の腕の中で逝けるのなら本望……グフ」

「……ネア」

彼女に名前を呼ばれてネアはびくつと身を震わせた。

「もしかして……いじめた?」

先端が尖った氷柱アイスピラーのように冷たく鋭い声。

「す、っ少しだけ……」

「そう……。そういえば猫のお肉って美味しいのかしら?」

「ご、ごめんなさいごめんなさいファウ起きて起きてお願いお願いだから謝るからごめんなさいだから許して迦唯そして死なないでファウじゃないと僕殺されヒエエエ!」

ネアはひよいとつまみ上げられた。ばたばたもがくも猫掴みされて前足も後ろ足も虚しく空を切る。

ファウが起きる気配はない。

なんなんだこの光景は……。

理乃はすっかり置いてけぼりにされてしまっていた。

薄眼でファウはネアの様子を伺う。

(少しは懲りましたかなネア殿?)

そして目で語る。

なんとかメッセージに気づくネア。

(このやろぅー後で覚えておけ!)

(後があれば、ね……)

(っ。薄情者ー! 助けろー! うわああん。はっ、そっだ

!)

「り、理乃助けて。迦唯を止ーめーてー」

理乃が困惑しているところに、ネアが助けを求めてきた。
なんだかわいそうだなと理乃は思ったのだが……。

「理乃は黙ってて」

口調はきつくないのだが、やさしい声音がかえって怖い。逆らわない方がいいような気がした。

「いやあああ。逝くー、逝っちゃうー……!!」

その後。ファウが哀れに思っただけで死んだふりを止めて、迦唯が許すまでの間、ネアは喚き続けていた……。

第十話 彼女の家にて（後書き）

一話あたりの長さがばらばらでごめんなさい。m（　）（　）m
今回の話は事情により当初の予定を少し変更してお送りしました。

第十一話 敵、来りて

黒いコートを纏い、顔を片目だけ出して同じく黒色の布で覆った体格のいい何者かが、トラップゾーン罨地帯を何のためらいもなく歩く。

飛来する矢も、炸裂する爆薬も、飛び出る刃も、崩れる天井も、降り注ぐ無数の毛虫にも、エロ本にも、果ては豪雨のような銃弾やレーザーをもろともせずに進む。

迸る電流に関しては効果があつたらしく、動きが少し鈍るものそれだけで、大したダメージは与えられていないようだった

難なく入口と反対側の壁に到達すると、なぜかそいつは背を壁に預け、とんと叩いた。

まるで、そこに回転する扉があることを知っていたかのように迷いのない動きだった。

罨は強引に突破したくせに、なぜ壁を壊そうとしなかったのだろうか。

不自然なそいつは、悠然と歩いて行つた。

「……来たわね」

「んーみたいだねー」

「そのようでありますな」

四人（？）で少しばかり談笑していると、突然迦唯の表情が鋭いものとなり、雰囲気も冷たいそれへと変化した。

迦唯だけでなく、ネアとファウも彼女と時を同じくして警戒モードへ。

「どうかしたのか……？ もしかして、敵？」

「ネア、ファウ。理乃と一緒に武器庫へ。ファウ。これを預かつて」
理乃の問いに答えることはなく、迦唯は避難指示をし、特殊繊維を織り込んだ頑丈なケースをファウに持たせた。

中には一体何が入っているのだろうか。ファウが重そうにしている。

「理乃。いくよ」

ネアはくいとズボンの裾を引っ張る。

意外と強い力で引かれた理乃は、そのまま引きずられるようにして迦唯が開けた扉をくぐった。

迦唯もファウと共にその後を次ぐ。そして一人、刀を手に玄関へ向かおうとする。

「迦唯……すぐ戻って来てね」

「迦唯殿……ご武運を」

その背に、ネアとファウが心配そうに声をかけた。

「善処する」

振り返ることもなく、彼女は理乃たちとは逆方向に姿を消した。

「僕たちも行くよ」

ネアに先導され、理乃は屋敷の奥の部屋へ連れていかれた。

「これを横にずらして」

ネアは壁際の本棚を指して言った。

「え、えつと……」

理乃は言われるがまま、本棚を押す。

すると、案外あっさり動いた。想像以上に軽かったため、勢いあまって転んでしまった。

「……理乃殿。こけている場合ではないのであります」

「しっかりしてよねー」

「う、うるさいなあ。……あ」

本棚のあった、その後ろ側に下へと続く階段があった。

「この先だよ」

理乃たちは階段を下って行った……。

迦唯が屋敷を出て道の先を見ると、そう遠くない位置に黒ずくめ

の人影があった。

尋常ではないプレッシャー。ちりちりと皮膚を焼かれているかのようなのだ。

ゆっくりと、無造作にその人影は近づいてくる。

頬を汗が伝い落ちた。

こちらも少しずつ距離を縮める。

僅かだが近づくとつれ、そいつの身に纏う空気や、そいつの体格、足運びが、自分の知る誰かに似ていることに気がついた。

まさか　　と思うも、いや、とすぐに否定する。

それにしてもどこか中途半端な感じがするのだ。何かが違うと勘が告げている。動きのどこかにある。決定的に違う、その何かがある。

些細な違和感。けれど、そうだからと言って目の前の相手が弱いというわけでもない。

むしろ、それはそれで未知の相手となるわけで、それだけ厄介かもしれない。

“あの人”を相手にしている時のような感覚でいけば、数秒で負けるだろう。

はつきりしているのは、黒ずくめの方が自分よりも肉体的に強いということ。

迦唯にとってはいつものことだが、不利な点であることは否めない。

実力が高いもの同士であるほど、その差が勝敗を決する要因に十分になり得るのだ。

無傷は、無理。死ななければよしとします。

お互いに、立ち止まる。

彼我の距離は十メートル弱。迦唯なら普通にやれば三步目ですでに攻撃を繰り出している距離。本気で行けば……たった一步の間合

い。

柄に右手を添える。

感覚が限界まで研ぎ澄まされてゆく。

どちらも微動だにせず“その時”を待つ。

.....

.....

.....

迦唯の顎を、緊張によって出た汗が伝い、落ちる。

その雫が地面に到達した瞬間。

迦唯と黒ずくめは、同時に動いた

第十二話 彼の困惑（前書き）

誤字脱字発生率が今まで以上に高いかもしれません……orz

第十二話 彼の困惑

ネアはびよんとジャンプして明かりのスイッチを入れる。

地下室は武器庫と迦唯が言っていただけあって、色々と物騒な品々が多数陳列されていて、さながら武器の博物館のようだった。

「理乃殿、ここにある物にへたに手を触れることのないよう」

「ああ、わかった」

きよるきよると辺りを見渡していた理乃にファウが注意する。

「迦唯……大丈夫かな」

「んー死にはしないと思うよ」

「危険だと思つたら適当なところで退くと思われられます」

つい漏れてしまった呟きに、ネアとファウは微妙な返答をした。

「それより理乃にはやることがあるよ」

「え、何を？」

「どうしてあなたが狙われているのかを明らかにするのであります」
それがわかったところでどうにかなると思えないが、確かにそ
るそる理乃だつて知っておきたいものであつた。いかげん身に覚
えもないのに狙われるのはごめんということだ。

「ファウ、そのケースの中にアレ入つてると思つ？」

「迦唯殿のことですから、きつと」

ファウが床に下ろしたケースをネアに開けるように言われた理乃
は何が入っているのだろうか、こんなときに不謹慎だが少しわく
わくしながら開いた。

「……………」

理乃は目に飛び込んできた光景に言葉を失つた。

一番上に下着が納められていたのだ。

「え、えーっつと」

「にやけないの。まずは迦唯の着替えがワンセットつと。ほら、早
く次」

ネアは器用に前足でそれらを取り出してきれいにたたみながら理乃を促す。

次に出てきたものはナイフ。ふとふたの裏を見ると、そこにもずらりと並ぶ剣呑な光を放つナイフの群れ。合計すると……50本。これなら重いわけだ。つまり、これを運んだファウの力は思いのほか強いということだ。

「こ、これは……」

ナイフを一旦退けると、さらに理乃を動揺させるものが入っていた。

それは、黒いゴシックドレスだった。

「これって迦唯が着るのか？」

ネアは首を傾げ、思索するそぶりを見せる。そして自信無さげにこう告げた。

「うーん。たぶん僕と同じこと思ったのかも」

理乃はなんだか嫌な予感がした。

「ど、どんなことだ？」

「女装したら似合いそう」

「お、俺が着るのか?! これを?!」

「理乃殿が……確かに似合いそうですな」

「ファウ?!」

「今ファウ想像したでしょ。そう思うよね。それに、迦唯ってかわいもの好きだから有り得なくはないんだよね」

あの迦唯が、かわいいものを……。その割に部屋は殺風景だったけど。

「意外そうな顔してるね」

「え、いや、その……」

「凶星のようでありますな」

「そ、それより続きだ」

理乃はドレスを取り出して脇に置く。と、その下に赤いPOCHと桃色のPOCHが入っていた。その中に彼の予想の外にあったものが

納められていることなど露知らず、理乃は中を^{あらい}検めた。

それぞれの中に納められていたものを見て、最初は何なのかわからなかった理乃だったが……。

「……理乃のエッチ」

ネアのその一言でみるみる顔が紅潮した。

「まさかこれって……」

「うん。生理用品と避妊グッズ」

理乃は慌てて手を離れた。前者はわからないでもない。だが後者が入っているのは一体どういう……。

「もしかして迦唯から何も聞いてない？」

彼の混乱を表情から見てとったネアはそう訊ねた。

理乃は首を何度も縦に振る。

「迦唯はね、娼婦でもあるんだ」

「！」

驚愕の事実言葉に詰まる。

「そんなに驚くことじゃないよ。無^{カース}法地帯じゃよくあることだし」

「そうなのか？」

ついファウの方へ視線を送ってしまう。

「そうであります。このことを知らないということは、理乃殿はよっぽど恵まれた環境にいたのでしょうか」

「……それで納得いったよ。迦唯は理乃の常識を壊したくなかったんだ。理乃、君は今僕たちが言ったこと、本当だって信じられる？」

じつと見つめてくるネアの目は真剣なものだった。おそらくは事実なのだろう。しかし、そんな世界とは無縁だった理乃にとっては、それが事実であったとしても簡単には納得しかねる。

「信じるけど……。なんか、なあ……」

「迦唯が帰ってきたら聞いてごらん。それでも駄目だったら……」

ネアはそこで言葉を区切る。そして

「迦唯の体をよく見るんだ。服越しじゃなくて、直に。そして交わってみるといいよ。大丈夫。理乃が見たいって、迦唯としたいって

言えば応じてくれるから」

何か確信めいたものを秘めているのか、はつきりと一字一句に力が込められていた。

言葉が出ない。理乃は何をどう言い返すべきか、それすらわからなかった。どうにもわからないことだらけでもどかしい。

「理乃殿もネアも、肝心なことを忘れていてあります」

「あ、そうだった。理乃、続きよろしくー」

さっきまでの真面目ぶりが嘘のように、ネアはもとの軽いノリのネアに戻った。

気を取り直してケースの中を見ると、ペンダントがあった。

「それだ！」

ネアが嬉々として声を上げた。

「これは……？」

「理乃、それを首から下げてみて」

彼はとりあえず言われた通りにする。

すると

ペンダントの透明な宝石が内側から光を放った。

その色は内に近いほど黒く、光の端に近いほど白い。中間地点では灰色だった。

「……！ こんな光の色を放っているところなんて見たことないよ？！」

「これはまた随分と不思議な……」

ネアとファウがそれぞれに驚きと感嘆の入り混じった感想を漏らす。

「こ、これどうすれば?!」

「もう外していいよ」

ネアに言われるや否や理乃は急いでペンダントを床に置いた。彼もネアやファウとは違う意味でだが相当驚いていた。

ペンダントは徐々に放っていた光を弱くしていった。

「な、なんだっただ……」

茫然と呟く。

「理乃。落ち着いて聞いてね」

「あ、ああ……」

「まず、あれは獲得者の能力を判断するための道具なんだ。宝石の放つ光でそれを判断する。判断方法は光の色と形、そしてどう光るのかの三つ。これら三つの要因からある程度どんな能力かを判断できるんだ。とはいえ、獲得者自体がそんなにいないから、かなり大雑把なだけだね。麻莉亜まじあはもう知ってるよね？」

「ここに来る前に会ったけど」

「これを作ったのはあの人なんだ。あの人こそ獲得者の生みの親にして、最初の獲得者。獲得者のほとんどは彼女によってその力を得るんだけど……」

ネアがファウをちらりと見やる。

「構わないでしょう」

ファウの言葉に頷き返すとネアは再び理乃に向き直り、先を続けた。

「ある条件、例えば両親が獲得者だったりする……といったことを満たすと人工的というより、自然に能力を持って生まれるんだ。そしてその場合の能力は……他の能力に比べて強力だったり特殊な上に、段階がある。ここまでは大丈夫？」

ネアは話をそこで一度止めて確認する。

「なんとか」

「そっか。……迦唯はね、生まれたときから能力を持っていたんだ。まあ、覚醒したのは五年前らしいんだけど。そして理乃。君もまだ未覚醒だけど獲得者だよ。あのペンダントは獲得者にしか反応しない。そしてあの光の色……」

「灰色が、そんなに変わった色なのか？」

「ただ灰色というだけだったらそうでもないよ。問題は、色がグラデーションしていたこと。そして光の形状が球体だったこと。グラデーションは変化していく様子、その過程と結果。球状はその循

環……だったと思う」

「それで合っているであります」

ファウがネアの言った事を肯定する。

「つまり？」

ネアがそこから導いた答えは

「理乃の能力は予測か予知、あるいはそれに準ずるもの。ただ、光はそんなに広範囲じゃなかったから短期的なもの」

ふう、とそこまで言い終えたネアは深く息をついた。

理乃の体は小刻みに震えていた。それは、秘めた力に対する恐怖の表れなのだろうか。

「どうかしたのでありますか？」

ファウが問いかけるも、すぐには返事が返ってこなかった。

ネアも少し瞳を不安げに揺らしながら彼を見上げる。

「俺が、獲得者……。じゃ俺は……。？ そんな、嘘だろ……。？」

何かを頭の中で必死に否定しているのだろうか、彼は頭を僅かにだが何度も左右に振っている。何度も「嘘だ」とうわ言のように咳きながら。

ネアとファウは互いに顔を見合わせ、互いに困惑していることを確認すると、どうしたものかと思案を始めた。

第十三話 VS???

迦唯は相手の鋭い貫手を紙一重で見切って避けると同時に抜き放ち際の刃で斬りつける。

黒ずくめはそれをあろうことか素手で払い除ける。

驚く間もなく脇腹目がけて放たれる蹴りを身を地面ギリギリまで低くしてやり過ごす。

蹴りが頭上を通過すると、一拍遅れて風が悲鳴を上げていた。まともに食らっていたらひとたまりもなかっただろう。

低い姿勢のまま一旦距離を取るべく前方に走り抜け、後ろに殺気を感じた迦唯は飛び上り後ろ宙返りをする。

迦唯のいた位置に繰り出されていたのは刃のような蹴り。それは迦唯の背中を掠めて服を裂く。

黒ずくめの背後に降り立った迦唯は相手が振り向き終わる前にその首目がけて斬りかかる。

鳴り響いたのは甲高い金属音。

刃が弾かれたのだ。それも、相手の首に。

この能力はやはり

「っ！」

いつの間にか眼前に迫っていた掌呈を身を引きながら避け、その勢いに逆らわず後ろに転がる。起き上がりきる前に体を捻り横に転がると、そうする前にいた位置に穴が穿たれた。

そのまま回避のため転がり続けると背中が壁に当たり、そこに突きだされる岩をも貫く貫手。刃で軌道を何とか逸らし、僅かに相手の体勢が崩れた隙について起き上がり、壁を蹴り勢いをつけて距離を取る。

ゆっくりと余裕も露わにこちらに向き直る黒ずくめ。

迦唯は自分の刀の刃を見て顔を顰める。

貫手を逸らした刃の中程がボロボロになっていた。タイミングは

完璧に合わせたし、力も大方逃がした。それにもかかわらず、たった一回で折れなかったものの、使い物にならなくなっていた。切りつけた部分も刃こぼれしている。

彼女は無造作にそれを相手に向かって投げつけた。

それは相手の体に当たった瞬間、脆くも砕け散った。

これはちよつとまずいか。

相手はどうしてかこちらを見ている。攻めてくる様子はない。

と、そう思った刹那の間に黒い影が目の前にあった。

速い！

先ほどまでとは比べ物にならない速さで繰り出される貫手と掌呈蹴りのコンビネーション。

少しずつ少しずつ後ろに下がりながらどうにかこうにか直撃を免れることはできるものの、完全に避け切ることはできず、次々と体が刻まれていく。

頬、肩、腕、腹、太もも……その数は秒単位で増加していく。服はもはやぼろ雑巾のようになり果て、その役割をまるで果たしていない。

露わになっていく自分の白い肢体。そこに新たに赤が加えられていく。

「っ」

とうとう後数歩で壁際に追い詰められてしまふところまで後退させられてしまった。

徐々に奪われていくばかりの体力。増える一方の傷。刃は折れ、そもそも反撃の隙が見当たらない。精神的にも追い詰められ始めた。この状況をどうしたものか……。

ついに壁に背がついた。

迦唯は脇腹に放たれた蹴りを右手で受け、顔に向けて突き出された貫手を左手で強引にいなした。しかし残る一方の手で放たれた貫手が迦唯の右胸を突き刺した。

黒づくめの動きが止まる。

そして

「終わりよ……」

口の端から血の糸を垂らしながら、彼女は呟くように言った。言葉が終ると同時に、黒ずくめが頭だけを残してプレス機にかけられたかのように拉げ、潰れた。

大量の血液が迦唯に浴びせられる。

「……痛いわ……」

右手はだらりとして力を入れると酷く傷む。左手は掌が薄く裂けていたがそれで済んだ。右胸の傷は半ばまで達していて灼熱が収まる気配はない。ボロボロの衣類を捨てる。そして左手で傷口を押えてみる。

「あんまり意味ない……早く戻ろう」

裸身を血に染めた少女は、待ち人の元へと痛みを堪えながら帰って行った。その後、少なくとも血の跡を残して。

屋敷に戻ると迦唯は、すぐに理乃たちの元へは向かわず、左手と口と足で器用に応急的な処置を施す。施しながら、考える。

やはり現れたのは“あの人”ではなかった。しかし、その能力は酷似していた。あれはまるで、劣化コピーだ。

あの程度の強度なら、能力の第二段階を行使すれば対処できる……できるが……。

迦唯は憂鬱そうな溜息をつく。

これから自分がする行為を思うとさらに鬱々としてくる。でも仕方がないと無理にでも割り切る。第二段階の行使には条件がある。迦唯の場合、自分の苦手なこと行うという条件がある。

意を決した迦唯は動く左手を自分の秘所にあてがうと

こんにゃ、ものかしあ……

自慰を終えた直後で少し呂律が回りにくい。でもあれくらいやっ

ておけば五、六回は使っても大丈夫だろう。

できるだけ体を綺麗にしてから壁に手をつけて歩く。

怪我のせいで熱っぽい上に吐き気がする。とにかく理乃と合流して医者に行つてそれから……と、次のことを思案する。

ふらつく足取りでなんとか奥の部屋に行くと、地下への入り口が顔を覗かせていた。

階段を下つていると突然理乃の大きな声が聞こえてきたものだから、迦唯は何事かと体に鞭打つて急いで降りる。

光が見えた。それで大体の事情に見当がついた。少し気が緩む。それでつい座り込んでしまった。とりあえず上がってきた息を整える。

何やら彼らは取り込んでいるようなので、少し休むことにした。

それにしてもあの光……理乃、よね……

ネアの説明が迦唯の耳にも入る。

予測、予知……先天性……段階的進歩……もしかして機関の狙いは、理乃のその能力？ でも、なんで宿している能力が……。

確かに、能力が覚醒していなくても日頃の行動にその影響は少なからず現れることもあるけど……。

そこまで考えて、思い出す。理乃の部屋にあつた監視カメラ。

でも、どうして命を狙うような真似を？ 能力目当てなのは

別、それをされると困るのが機関だとすれば……。認識解除の能力

者はギルドにいる？ それは敵？ 味方？ それとも内通者か、も

しかして機関の内部分裂及びギルド内での裏切り？

次々と可能性を考えるも、結局それらは空想の域を出ることはない。

とりあえずストーリーカー説の可能性はこれでかなり低くなった、というかゼロかもしれない。

迦唯は少しかかりした。

つまるところ、ネアが言っていたように迦唯は理乃に女装させるつもりだったのだ。

ストーカーなら逆に魅了して誘い出せるかもしれないし、オルガン機関に
対する目くらましにもなるからだ。見てみたいというのも、もちろ
んあったが。

しかしずっと監視されていて、その情報がどこに伝えられていた
のか不明な以上、あまり効果はないだろう。もし、判別や索敵の能
力を保有する獲得者がいればどの道無意味だろうと結論づけた。

と、そこで小さな声で「嘘だ……」と何度も聞こえることに気が
ついた。他に言葉はない。

何かがあったのかもしれない。そう思った迦唯は再び立ち上がっ
て、彼らの元へできる限り急いで向かった。

第十三話 VS??? (後書き)

一話あたりの平均文字数を考え、結局二話に分けました。思ったより短くてきてしまいました……削りすぎたかも……。

第十四話 彼の秘め事、彼女の負傷

遠い。百歩にも満たない距離が果てしなく遠い。どれだけ急ごうにも、体は思うように動いてはくれない。迦唯はもどかしさを覚えながらも、一歩一歩冷静に確実に歩を進める。

ようやく理乃の姿を視界に納めることができた。

迦唯の帰還にいち早く気づいたファウが彼女の肩 には留まらず、その隣に降り立つと床を同じペースで気遣わしげに歩く。

急に飛び立ったファウを目で追ったネアは、その向かう先を見て喜んで駆け寄ろうとしたが、迦唯の姿に息を呑む。

「か、迦唯！ 大丈夫なの?!」

「……右腕は粉碎骨折、そして右胸を浅くもなく、深くもない？ 程度に刺されたくらい。あと、切り傷多数」

迦唯は息も絶え絶えに、けれど淡々と怪我の報告をわかる範囲でする。

「……つまり大丈夫じゃないんだね」

「そう、ね……。そうなる。早く医者に診てもらった方がいいのかもしれない……」

どこか他人ごとの様に迦唯は述べた。

「あんまり余裕ないみたいだね」

「……そのようでありますな」

ネアとファウは顔を見合わせて言い交わす。

「平気……痛いけど」

迦唯はそう言うが、とてもそのようには見えない。

「それより理乃よ」

言われて、ネアとファウは同時に嘆息した。

迦唯は理乃の前に座り込むと、

「ただいま」

と、それだけを言った。

しかし、理乃はそれに気づいた様子もなく、どころか彼女が目の前にいることにも気がついていないようだった。

「ただいま！」

もう一度、今度はさっきよりも強く言う。

「……………？ か……………い……………？」

「どうかした？」

ようやく反応を示した理乃に、迦唯は淡く笑って見せた。

それは痛みを押し隠した、強がりの笑み。迦唯は自分のことには構わずに、精神が不安定になっているらしい理乃を刺激しないように、優しく問いかけた。

「その、あの……………こつちの話で……………考え事を……………ん？」

我を取り戻した理乃は迦唯と目を合わせようとはせず視線を即座に離し、慌てて言い繕おうとした。そして徐々に視線を迦唯に戻し

その顔に朱色を浮かべた。それも束の間、朱が差した顔が一転して青ざめる。

「迦唯、その怪我……………！！！」

胸に少し雑に巻きつけられた包帯は真新しい血が染みており、右手は一応固定するための何かと一緒に巻いているがだらりと脇に下げられている。左手と比べると明らかに形が少しばかりだが歪で、倍近くに膨れ上がっていた。

「そんなに驚かないで。私だって怪我くらいする」

声音は依然優しいまま、狼狽する彼を窺^{たしな}める。

「じゃあ、早く医者に！」

「……………理乃は大丈夫なの？」

迦唯は何よりもまず自身の役割を果たすべく、無駄かもしれないと思いつつも訊ねた。

「別に……………特には何も……………」

「そう……………」

理乃は何かを隠している。彼の口ぶりや態度からそれは容易にわかったが、迦唯はそれ以上言及しないことにした。彼が隠したいの

ならば、他人である自分があまり踏み込んではいけないと判断したからである。

「迦唯……それくらいにして早くちゃんとした手当を受けた方がいいよ」

ネアが彼女の横に、中身を元通りに収納したケースを口で引っ張ってきた。

「理乃殿、迦唯殿のことをお願いするであります」

「お、おう……」

ファウは更に別のことを、今度は理乃にしか聞こえないよう彼の耳元で囁く。

理乃は顔を一瞬強張らせたが、すぐに元に戻る。

「とりあえず、ほら」

「ありがとう」

ネアは迦唯に着替えを渡す。受け取った彼女はしかし、その中からゆったりとしたローブのような上着だけを身に纏った。袖に動く左腕だけを通す。その上着は丈が少し長めで太ももの半ばまでであったおかげで、隠すべきところは隠れていた。

迦唯は理乃の目の前でそうしたため、彼はその時、彼女の太ももの付け根から上着で隠れた辺りまでがほかの部位（右腕と右胸は除く）に比べ酷い有様になっていることに気がついた。

そういえば、彼女はスカートの内側にナイフを忍ばせていたはず。一体それらはどうしたのだろうか。

「私の太ももが気になるの？」

理乃の視線に気がついた迦唯が不思議そうに訊ねた。

ネアとファウが彼に非難の眼差しを送る。

「その……ナイフのせいなんじゃ？」

「……！ 見ちゃったのね。ナイフごと刻まれたらこうなったのよ。ナイフは落としたか折られた。スカートも下着も切られてしまったから」

「もしかして……その……ほとんど裸同然の恰好で戦って、帰って

きた……?」

「ええ。……何が言いたいのか、いい加減予想はつくけど……」

「ご、ごめん」

「私の体、どこか変?」

やはり迦唯は少しずれていた。

「変じゃないと思うけど……」

理乃は内心で深く息をつく。一体どうして彼女はこんなにも無防備というか羞恥心が欠如しているのだろう。どうすればわかってもらえるのか、理乃は本気で考えなければと一人内心で頷いた。

「なら何も問題はないわね」

そして迦唯は立とうとした。

「……………立てない」

「え……?」

小さな呟きの内容をはつきりと聞き取れた理乃は困惑する。

「理乃……………」

「え、えーっと」

「やっぱり、いい」

「もしかして怪我の……………」

迦唯は何も言わずケースを左手で持つとゆっくり、どうにか立ち上がり、そのまま「こっちょ」とふらふらとした危なげな足取りで武器庫の奥へ向かう。

理乃もその後続く。肩くらい肩を貸すくらいはすべきと思い、彼女の左手をとって自分の首に回す。そしてケースも代わりに持つ。

「……………これくらいしか、今の俺にはできないから」

払い除ける元気がないだけなのかもしれないが、とにかく彼女は拒絶するようなそぶりを見せなかったので、ほっと胸を撫で下ろす。

「……………ありがとう」

迦唯は躊躇いがちに、彼に体重を預けた。

こんなに軽いなんて……

理乃は加えられた重みがあまりにも少なかったことに、なんとも

言えない気分になった。別に迦唯は遠慮しているわけではない。それはわかっていた。答えは簡単だ。そもそも体重が軽いのだ。

彼女の体は、腕は、肩は、思っていたよりもずっと細かった……。

「迦唯……」

「迦唯殿……」

ネアとファウはその背を心配げに見送った……。

理乃はその部屋から出る際、何か異様な気配を感じて後ろを盗み見た。

彼の視界に映ったもの、それは 氷の中に納められた一振りの刀。

刀を封じ込めるかのような氷は、しかし、柄の部分を封じていた分の氷が溶けたのか、床に水たまりを作っていた。

さらに、氷のケースとでも言うべきそれには無数の亀裂が、おそらくは内側から奔っていた。

まるで、自ら意思を持って眠りから目覚めようとしているかのよう……。

第十五話 崩壊の兆し

そういえば、と理乃は今更だが迦唯がこれでは戦えない、つまり襲われたらどうしようもないということに気がついた。武器らしいものはケースの中にあるナイフくらい。更に、彼女は戻ってきた時にはすでに刀を持ってはいなかった。

どうなるんだ、俺達……。

「大丈夫」

気配で察したのか、すぐ隣から小さな声がした。

理乃は何も言えなかった。

それから、迦唯に導かれるまま辿り着いたのは、ぼろ小屋だった。人が住んでいた痕跡はもはやほとんどない。もう放置されて久しいのだろう。

「こ、こんなところに何があるんだ？」

「ここに……正確にはこの下に知り合いの医者が住んでいるの。正式な免許はないけど、腕は確かよ。傷の深さにもよるけど、右胸の傷くらいならなんとかなるかもしれない」

迦唯の顔色は悪い。しかし彼女は痛がる素振りも見せないし、呻いたりもしていなかった。

「理乃……あの床をずらしてくれる？」

迦唯はたったそれだけの動作を頼むのだけなのにやや躊躇った。言われた通りずらすとその下に階段。

なんか、こんなの多いな……。

「狭いから二人並んで降りられない」

彼女の言葉は相変わらず淡々としている。

「どうする？ その……背負おうか？」

「何を……？」

理乃は勇気を出して言ってみたが、思いっきり首を傾げられてし

まい、こけそうになった。

それにしても、『何を』は酷いだろつと、彼は嘆いた。

「俺がお前をおんぶしてやるって言ってるんだよ!」

もう一度繰り返す。さっきよりも語気を強めて。もちろんその理由には照れ隠しだ。

「壁にもたれるようにしていくから、一人でも下りられる」

そしてそのまま先に下り始める。

「なんだよ。人がせつかく……」

理乃はぶつくさ言いながらもゆっくりと下りて行く彼女の後を、その背を心配そうに見つめていた。

理乃は耳を塞ぎたいという衝動を必死で堪えていた。別に、そうする必要はどこにもない。にもかかわらず、彼は受け止めようとしていた。

薄い、けれど頑丈な両開きの扉の向こうから聞こえてくる、苦痛を訴える少女の声。

それはそんなに大きなものではない。悲鳴を上げまいとする意志のもとに音量はかなり抑えられているが、薄い扉にはそれほど防音効果がないのか、それとも閉鎖されたそんなに広くない空間だからなのか、よく響いて聞こえた。

それは多分、気のせい。要するに意識しすぎて耳を澄ましているから。それも、扉にもたれかかって。

「情けないな……。たった一つしか変わらない女の子に守られて……。その子一人戦わせておいて自分は……。俺は、何もできないのか?」

「ああ、お前は何もできない。一生、永遠にな。迦唯君が殺されてしまう前に君はさっさとどこかへ消えてくれないか?」

頭の上から投げかけられた声は硬く、低い。そして、明らかな敵意を含んでいた。

慌てて立ち上がると壁に身を寄せる。

「ああ、退く必要はない。それに彼女はもう普通に歩ける」

「え……」

「感覚は鈍るけど、右腕に痛み止め打ってもらったから」

迦唯の知り合いの医者（と言えるのかは知らない） 白衣を着

た鋭い目つきの若い男性 佐祭糸サケイトの後ろに彼女はいた。

右腕はギブスに覆われ、白い布で首から下げられている。胸は真

新しい包帯が巻かれていた。そして左の掌にも。

迦唯は片腕が使えないとは思えないほどにテキパキと衣類を身につけていった。

今度はノースリーブのハイネックセーターに丈を短くしたサツシユ付きのタツクスカート。そしてその上からゆったりとしたローブのような上着を纏う。スカートの中にはもちろんナイフを忍ばせている。

「ふむ。場所を変えましょうか」

佐祭糸はついて来てくださいと、二人を誘導した。

理乃はその少しの間、さっき言われたことを反芻していた。

『お前は何もできない。一生、永遠にな。迦唯君が殺されてしまう前に君はさっさとどこかへ消えてくれないか？』

今の彼にとってその言葉は、彼の心に心臓を抉り出されるよりも壮絶な“痛み”を与えるものだった。

理乃は静かに打ちのめされていた。

「帰りましょう」

迦唯は顔を伏せたままの理乃の右肩に左手をポンと乗せた。

微かに首が上下した。反応はそれだけ。

なんとなく、そう、なんとなくだ。迦唯は彼と腕を組んで体を密着させてみた。だが理乃はされるがままで。いつものように照れたりすることすらできない状態らしい。

これはかなりの重症だ。まあそれもしかたないか、と彼女は先程別れた佐祭系との会話を思い出す。

『佐祭系、理乃の様子が変わりだけ、もしかしてあなた何か酷いこと言った？』

『酷いだなんてそんな。私はただ事実を述べただけですよ』

『なんて言ったの？』

『お前は何もできない。一生、永遠にな。迦唯君が殺されてしまう前に君はさつさとどこかへ消えてくれないか？ とね』

『……………。事実じゃないわね』

『それはどういう点で、ですか？』

『私たちは殺されない。殺させないから。理乃は何もできないんじゃない、私が何もさせないつもりでいるだけ。彼の気持ち次第で何だって……………とまでは言わないけれど、できることは多い……………はず、多分、きつと……………』

『その怪我で言われましても今一つ説得力に欠けますよ。それと、迦唯君にしては珍しく甘いですね。彼は男ですよ？』

『さあ、どうしてかしら……………？』

自分でも流石に、理乃と逆の立場であんなことを言われたりしたら……………いや、理乃程にはならないか、と微かすかに首を振る。

けれど、もう少し手伝わってもらった方がよかったか、と今更ながらに思った。

迦唯は、何もできないことが彼を悩ませているとは全く気付いて

いなかったのだ。

せめて、階段を降りるときにおんぶしてもらっていけば、少しは彼の気も楽になったのではないだろうか。そんな考えが泡のごとく浮かんで、消えた。

すぐ隣の彼の顔を見る。

暗い……。

理乃の周りだけ黒い霧が発生しているかのようだ。

見ているこつちまで気が滅入ってしまいそうだったので視線を前方に向ける。

「こんな、時に……」

少し離れた所にある三階建の建物の屋根。高さは十二メートルくらいで周囲のそれらよりも低い。その上に幽鬼がごとく佇む二つの人影から明らかかな害意が感じられた。機関オルガンからの敵か、それともこの界限かいわいの人間か、どちらにせよ現在の迦唯たちの見た目はどう考えても格好の標的にしか見えないだろう。

負傷した少女と、隣を歩くひ弱そうな上に鬱々とした空気を纏う少年。

ナイフは一部を衣類の中に忍ばせている。相手が人ならばこれに対処、化け人ならば能力の第二段階で対処する他ない。もしものときは相手が人であろうと使用を躊躇うわけにはいかないだろう。優先すべきは相手の命ではなく、自分の命でもない。他でもない、理乃の命だ。

その理乃をどうするかで迷う。ケースは意地なのか持つてくれている（すぐに放して中身を取り出させてくれるかどうかはわからない）。

この場を切り抜けてから考えるべきことだが、理乃を何とか元気にしなければ。

そう心に決めると迦唯は、あえて彼と腕を組ませたまま自然な足取りで行くことにした。

理乃を置いて行けば、もしどこからか狙撃でもされればどうしょ

うもないからだ。動きにくいだが、まだこちらの方が対処しやすいとの判断を下す。

傷口が開かなければいいんだけど。

一応今着ている服は素材が少し普通のそれとは異なっており、上着は刃物に強く、他は衝撃を少しだけ和らげてくれる。気休めだが無いよりはいい。

迦唯は人影に一步近づくと毎に感覚を研ぎ澄ましていった。

迦唯と理乃が丁度三階建の建物の前を通り抜ける直前、上にいた二つの人影は急に動き出した。

頭上に風を感じた迦唯は理乃を抱えて後ろに跳んだ。両足の腿の付け根が痛むが気にしてはいられない。右腕の感覚が鈍っていたせいで少しバランスを崩して倒れそうになったが、なんとか踏ん張る。二人がいた位置の地面は陥没していた。しかしそこには誰もいない。

素早く組んでいた手を解くと、後ろを振り返りもせずナイフを一本スカートの中から抜き出し、流れるような動作で投擲した。

甲高い金属音。音を確認しつつ理乃の手を引っ張ると、彼のいた場所の上から強い衝撃が加えられる。

舗装された地面が砕け、石片が飛び散る。

前方に彼の手を引いて走り抜けながら相手の姿を探すも見当たらない。

背後から風圧。長い髪の毛の本かが切断されて宙を舞った。

迦唯は背後に確かな敵の姿を見た。しかしすぐに見失う。ほとんど勘だけで、続けて繰り出される見えない攻撃をなんとかやり過ごしているのは運だ。

また姿が一瞬見えた。あまり相対距離は変わっていない。速いから見えないというわけではないのなら 迦唯はその可能性に思い当たる。

認識解除？！

このままではまずい。

最低でも二人。もしかすると三人かそれ以上を相手に、こちらは手負いである上に理乃を伴っているため身動きが制限されている状態にあるまま対しなければならぬ。それに今の理乃は言うことを聞いてくれそうにもない。

後ろからの攻撃が一瞬途絶えた。次の瞬間、頭上を何かが通過し目の前に着地した。

左右は建設物の壁面で、前後には姿の見えない敵によって塞がれている。

脳裏に浮かぶ死の一字。

迦唯は身動きせずただ立ち尽くす。

これから味わうであろう痛みを想像すると嫌になるがこうなっては仕方がない。

見えた！

チャンスは一度きり。タイミングを見計らい理乃を突き飛ばす。それから両手を前と後ろに突きだして

深紅の花が二輪、鮮やかに咲き誇った。

第十六話 傷の夜

迦唯と理乃が逸の元へ帰りついたのは夜も遅くだった。

両腕を肘のあたりまで朱に染め、右腕にはギブスをしている迦唯と、声をかけてもろくに反応を示さない理乃の様子に、逸は大いに驚かされた後、迦唯を店の奥に連れ込んで怪我を調べてできる範囲で処置をし、理乃をとりあえず部屋まで引っ張っていった。

そうして再び迦唯の元へとやって来た逸は「平気です」と言い張る彼女を無理やりその部屋にあるベッドに寝かせた。

しばらく抗議の声が上がったが、徐々にその勢いは衰えていき、いつしか安らかな寝息が聞こえ始めた。

よっぽど疲れてんな、こりゃあ。さて次は……。

眠り始めた彼女に一先ず安堵し、次は理乃の元へ向かう。

二階へと続く階段を上がりながら全く今度はどうしたんだと、内心軽く息をついた。

二、三回ノックしてから返事も待たずに扉を開けると、先程逸によってベットに腰かけさせられた姿勢のまま顔をうつむかせている理乃の姿があった。

これはまた重症だな……。

逸は骨が折れそうだと、嘆息せざるを得なかった。

それから幾時経っただろうか。まだ空は暗く、夜明けにはまだまだ時間がある。そんな時分に、迦唯は目覚めた。

私……寝てた……。

ハッ、と腹筋だけで勢いよく身を起こすと、振動で両腕に電流が流れたような痛みが走った。

「……………」

軽率な行動を反省しながら、痛みが治まるのを待つ。

足音をたてることなくベッドから降り立つと部屋を出ようとする。と、迦唯が痛むがどうにか動く左手をドアノブにかけたのと同じタイミングで、それが捻られた。

「あ……」

「お……」

迦唯と逸、二人の声が重なった。しばし硬直し、そのまま無言で見つめ合う。

「もう、動いても平気なのか？」

先に口を開くことができたのは逸だった。

「はい。ご心配をかけて申し訳ありません」

「それは仕方ない。だから気にするな。だが……無茶だけはしないでくれ。俺は、理乃だけじゃなく、迦唯さん、あんたのことも……」

「……ありがとうございます」

迦唯は少し頭を下げる。

「んでだ。一体どこへ行くこうとしていたんだ？」

少し開いた間を誤魔化すような問いかけた。

「理乃の部屋にいつて様子を見ようかと」

迦唯は表面上の目的を答えた。さすがにもう一つの目的……というよりその行為の内容を明かすのは躊躇われたからだ。

「ああ、そうか……。ところで、お腹すいてないか？ 何か作ってやるよ」

「え……？」

どうしてそんなことを、と迦唯は疑問に思った。確かに、空腹とまではいかないが何か欲しいところだった。けれど時間が時間だ。もしかしたら太るかもしれない。せっかくの申し出だが断ろうとした。だが

「安心しな。太る心配のないようにするからよ」

逸のその一言で迦唯は折れた。

「うんうん。やっぱりそういうところは女の子だな」

逸はどうしてか満足したように頷いた後、厨房へと姿を消した。

部屋にあった鏡に視線を移すと、顔を赤らめた自分の姿があった。そのことに少しばかり動揺した。

ついでだから体を見る。上着は脱がされ、ベッドの枕元に置いてあった。両腕に付いていた血は綺麗さっぱりなくなっていた。逸が落としてくれたのだらう。

「……痛い」

右腕の痛みが戻ってきていた。左腕も、掌に巻いた包帯に血が滲んでいる。

襲ってきた二人組　やはり化け人で、迦唯の家に現れたものと同タイプだった　を倒した際に強引に動かしたためだろうか。それとも薬の効き目がもうじき切れる頃合いか。

迦唯の能力の第二段階目は、掌から十センチくらいまでの範囲にその身の一部でも入った相手を、自らを覆う領域でもって押し潰す。その代償は彼女の嫌がる行為を自ら行うこと。一度の行為で使用できる回数には上限があり、最大で十二回分。能力を発動したその瞬間だけは普段防いでいる遠距離からの攻撃などが防げないなどの弊害もある。

今回もこの力のおかげで助かったのだが、もっと動きに速い相手には通用させられないだろう。

使い慣れた得物も折れてしまつて手元にはない。一応もう一振り用意しているが、重さや刃の長さが僅かに異なるのですぐには慣れない。刀自体は左手でも扱える、というよりもむしろ左手の方が扱えるのだが、右手が治らないことには離れたところにいる敵に対し、ナイフの投擲（とつてき）による攻撃ができない。しかし右手だと動かない的にもあまりあたらなかつたりするのだが。

迦唯はなぜか銃のような類の物の扱いだけは下手だった。その代りとして投げナイフを選んだのだが、右手だとどうにもうまく狙い通りに投げられないので、仕方なく利き腕である左手はナイフを投げるために空けておき、右手で刀を振るっていた。相手が一体だけの場合で投げる必要がない時は両手で構えている。

たとえ武器を持って意味はないでしょうけど……。

「飯、できたぞ」

どうしたものと頭を悩ませていると、逸が扉から顔だけ出して呼びかけてきた。

迦唯はとりあえず逸の元へ向かった。

迦唯は、食事ついでに理乃が“これでもか”というほど落ち込んでしまった経緯を訊ねられたので、順を追って説明した。

すると逸は「面目ない」と何故か頭を下げた。

こうなると迦唯は困ってしまう。理由に全く思い当たらないのだ。「顔を上げてください。どうして逸様が頭を下げるのですか？」

「理乃の奴があんなヘタレになっちまったのも俺の育て方が……」「待つてください。何もそこまで言わなくても……」

やっぱり親に似るのかな、などと失礼な事を考えながらなんとか逸を説得した迦唯はようやく解放され、彼が寝入ったのを確認してから理乃の部屋へと向かった。

もう寝てる……といいんだけれど。

迦唯は不安になりながらも理乃の部屋の前に辿り着くと、そつと中を覗いた。

「！」

理乃はベッドに座っていた。なんだか魂まで燃え尽きた人みみたいだった。正気が感じられない。

これはさすがに迦唯も驚きを隠せなかった。

入口で凍ったように固まったまま、しばし呆然とする。もはや声も出ない。

数秒固まった後、ゆっくりときこちない動作で理乃の前に両膝立ちになると、彼はまだ起きていた。といっても、寝ているのと大し

て変らなさそうだったが。

「……まだ起きてる？」

念のため聞いてみる。が、やはり反応はない。これはもう少し様子を見た方がいいのだろうか……？

迦唯は少し逡巡した後、左手で理乃の片方の手を取ると、あるうことが自身の胸にあてがわさせた。

それでも理乃は反応を示そうとしないので、今度は躊躇ためらいがちに服の下に潜り込ませて直に触らせた……。

迦唯の体に鳥肌が立った。彼女は深呼吸を一度して小波こさなみが立った心を静める。やがて体のそれは引いた。

「理乃……今あなたにできることを教えてあげる……」

そのままの姿勢でそう語りかけると、理乃の瞳が揺らめいた。今まで貝のように閉じられていた口が「できること……」と小さな声を紡ぎだした。

ようやく反応が得られたのだが、迦唯は複雑な心境だった。

なぜなら、これからする行為は少なからず彼を傷つけてしまうかもしれないからだ。それも、彼女によって。

「理乃……手伝って……」

理乃は、はつきりとしなない意識の中、訳もわからないまま迦唯の言う通りに、彼女のその“行為”を手伝った。

……
……
……

二人の行為は夜が明ける直前、理乃が体力の限界を迎えて眠るまで続けられた。

第十七話 夜は明けゆく

行為を終え、理乃をきちんと寝かせた迦唯は、込み上げてくる猛烈な吐き気に耐えかねてトイレに駆け込んだ。

胃の中の物を出しつくさんばかりの勢いで嘔吐する。

やがて、せり登って来るものは酸っぱく僅かに黄色い液体だけとなった。もはや胃液の他に吐き出すものがなくなったのだ。

「なんて、情けない……」

彼との行為の途中で何度も五年前のことを思い出した。

おもちゃのように玩ばれ、純潔を奪われた時の記憶を。娼婦なんかになってまで克服しようと足掻いたのに、克服はおるか慣れることもない。

壁にもたれかかり、乱れてしまった息を整える。

冷たくて痛かった手枷足枷の感触も、私を犯して悦ぶ男共に感じた恐怖も、能力に目覚めた私を、ゆっくりとじっくりと殺すために檻の中に閉じ込めて吊るされた苦しみも、全部鮮明に覚えているなんてね……。でも、忘れたくても忘れることなんて、できない。「……………」

不意に強い殺気を感じた。店の裏手だ。きっかり三秒で消え失せ、そして二秒の間をおいて再び放たれた。それは規則正しく繰り返されている。

迦唯はこの殺気に覚えがあつた。いつそ自らで己の首を切り裂いて楽になってしまいたくなるほどの、自殺衝動をすら催させる。これは　そう、あの男だ。

呼んでいるの………？

迦唯は理乃から離れることに不安を覚えたが、今はとにかく会いに行くことにした。

足音を忍ばせ、気配を消して殺気を感じた場所へ向かう。殺気は彼女が外に出た時点で放たれなくなった。

やがて、薄れつつある闇の中に人影を見つけた。彼の赤い髪色はやはり目立つ。

「よっ」

彼は片手を上げた。

「……こんばんわ、シエオル」

「ん、珍しいな。最初からまともに話を……」

何気なく会話を続けようとして、しかしそこで言葉は途切れた。

「お前……」

迦唯の普段とは違う対応に違和感を覚えたシエオルは、彼女が少し内股で立っているのに気づき、事情を知っているが故に沈痛な面持ちになった。

「……平気よ」

顔はいつもの表情の乏しいそれだった。ただ、声には常にあつた強い意志が感じられなかった。

「相手は理乃か？」

「ええ。彼、足手まといであることを気にしてたみたい。その上、佐祭系（しんさいけい）に酷いこと言われて塞ぎこんでしまったから。今の彼にしてもらえる事と言えば、ね」

単調なリズム。平坦な声。決められた台詞（せりふ）を棒読みしているとでも形容すればいいのだろうか。

「あの兄ちゃん容赦ねえからな……」

シエオルは苦い顔をした。

「それで、どうしたのよ？」

本題に入ろうとする彼女に、シエオルも切り替える。平気と言い張られてしまったこともあって、彼は迦唯にもう何も言及するつもりはないようだ。

「裏切り者を処分した。半月ほど前から姿を消していた、ギルドのナンバー4『森鏡』（もりかがみ）だ。お前が言っていた、見えているはずのもの

が見えていないと思ひ込まされる能力を保持していた。鬱陶うつとつしい能力だったが、これでもうその能力の使い手は死んだ」

裏切り者は、一人だけなのかしら。

浮かぶ疑問。だが、あえてそれは口にしない。

「……どうして理乃が狙われているかは聞き出せた？」

「いいや。だが、そつちもある程度わかった。向こうは未覚醒の獲得者とそいつの能力を調べることができるようだ。そのためにしばらくの間理乃を監視していたらしい。どうやら機関オルガンの硯すずりって奴が勝手に何かを企てているらしくてな。もし何かの拍子に理乃に予知の能力に目覚められて阻止する動きがあつては困るから念には念を付けてことなだろつな」

「つまりかなり大それたことをしようとしている訳ね」

顔色を変えぬまま、声音だけは疲れたようなものだった。

「ああ。それもとびきり面倒な。だが、それは機関オルガンにとつても不利益しか生まないのか、硯は現時点ですでに機関オルガンからも狙われている。森鏡を始末したのがおよそ六時間前だ。お前が言つてた……認識解除だっけか？ 硯は認識解除で今まで身を隠して少しずつ発矢の劣化コピーを作つては送り出していた。ようやく突き止めた隠れ家を調べさせたらもぬけの殻だ。何も残つちやいなかったよ。おそらくは向こうも焦つてきている頃合いだ」

「……なら、そろそろ本物が来るわね」

「俺は一旦ギルドに戻るが、昼過ぎにはお前のサポートにつく。麻ま莉亜りあはどうやら硯がやるうとしてしていることに何か心当たりがあるよ。うなんだが、確証が持てないから今は何も言えないんだと。とりあえず俺かお前のどちらかが倒されると状況はかなり厳しくなるから共闘しろつてことだろつ。オーナー直々の指示だ。我慢しろよな」

「やっぱり麻莉亜さんは私のことを一人前として扱つてくれないのね……」

迦唯は理由に心当たりがあるが故にはあ、と嘆息する。

その様子にシエオルは苦笑いした。

「そりゃあの人からしてみれば迦唯は娘みたいなもんだからな」

声には若干笑いが含まれている。そして真顔に戻り、もう一言
うべきことを伝える。

「とにかく、もし発矢が現れたら戦わずに逃げろ」

「……わかったわ」

迦唯の返事を聞いたシエオルはじゃあな、と踵きびすを返した。

彼の後姿を見送ると、左手を胸の前でぎゅっと握りしめ、目を瞑
った。

発矢……。

少女の胸中に渦巻く感情は果たして何だろうか。

彼女は一人、黎明の空を見上げて少しだけその場に立ち尽くした。

第十八話 真意は語られず

「……………」
目を覚ました理乃は身を起こし、不鮮明な昨夜の記憶を辿る。

俺、迦唯と……したんだよな……。

彼女が時折消え入りそうな音量で上げた、儂く切なげな、けれど甘い声 それだけははっきりと思い出せる。

しかしそんなことは覚えていても、どうして行為に至ったのかが思い出せない。

そういえば、いつの間に帰ってきていたのだろう。昨日、佐祭系と会った後からの記憶が曖昧だ。

と、ドアが控えめにノックされた。

「……理乃」

迦唯の声だった。

「迦唯……」

「入っても、いい？」

とても遠慮がちに訊ねられた。理乃は少し動揺を含ませた声で応じる。

「ああ、いい……けど」

すると、部屋に足を踏み入れると静かに彼女が近づいて来て隣に腰かけた。

隣に座られ、鼓動が跳ね上がった。昨日の夜のことがあったので、どうしても意識してしまうのだ。

「……ちよつとは元気になったみたいね」

「えっ……?!」

「昨日、佐祭系にきついことを言われて全然元気なかったのよ？」

「ああ……何を言われたかはなんとなく、覚えてる」

そこで理乃は下を向いてしまう。

だから迦唯は彼を押し倒した。仰向けに寝かせて、覆い被さる。

「迦唯！ な、なにを?!」

「ちゃんと私の目を見て。視線を逸らさないで」

強い口調で言い放つ。驚いた彼は口を閉ざした。

「……気持、よかった?」

最初、理乃は言葉の意味を理解しかねた。

「昨日の夜」

迦唯に言われ、思いあたる。だんだん昨夜の記憶がはっきりしてきていた。理乃はかっと顔が熱くなったのを自覚した。

見つめてくる目は真剣そのもので、瞳には僅かな不安が浮かんでいた。

理乃は口に出して答えるのがどうしても恥ずかしかったので、頷いて肯定して見せた。

その動作はあまりにもぎこちなかった。

しばらく見詰め合った後、迦唯はようやく本題を切り出した。

「……怒ってない?」

「……は?」

理乃は耳を疑った。聞き間違いだろうか? どうして自分が怒る必要があるのだろうか。

お互いの息使いすら感じ取れる近距離に、固唾をのんで返事を待つ少女の顔。

「……理乃……初めて、だったんでしょう?」

「あ、ああ……」

返答しつつ思考を働かせるが、尚も理乃はわからなかった。

「私が、自分勝手な理由で、理乃の初体験を、奪ったの」

迦唯はまだ理解に及んでいない彼に、自分のした“悪いコト”を自ら告白した。

ますます理乃は困惑した。むしろ安易に行為に及んだのは自身であって、責められるとすれば自分なのではないだろうか……。と、疑念を持った。

迦唯が理乃を責めるのなら、まだ理解できたのかもしれない。

しかし、迦唯にとって“初めてのその行為”というものは最重要項目の一つなのだ。なぜなら彼女は五年前、父親 染火せんかを目の前で殺された日に、自身の意志とは無関係に純潔を奪われたのだから。それ故に特別の思いがあるのだ。だが、今回は自分が奪ってしまった。

だから迦唯は理乃も己と同様に深く傷付いてしまったのではないか そんな思いに駆られていたのだ。

どちらかということだったことは男性よりも女性にとっての方が、その意味は圧倒的に重いと思われるが、彼女にとっては男も女も関係なかった。

そんなことを理乃は知っているはずもなく、どんな言葉をかけるべきか大いに悩んだ。

悩んだ末に浮かんだ答えは、そもそも悩む必要のないものだった。

「怒ってない」

ほら簡単だ。ただ単に否定しただけ。

「……ごめんなさい……」

だがしかし、理乃はなぜか謝られてしまった。

「や、だから怒ってないって」

もう一度念を押す意味も兼ねて言うと、彼女は呆けたような顔になって……。

「……ほんと？」

疑いの眼差し。だがよく見ると潤んでいる。

「本当だ」

心の中で、泣かれる?! と大いに慌てながら表情は努めて平静を装いはつきりと肯定する。

「……よかった」

「え」

迦唯は呟くと元の体勢へ戻った。

「あの。じゃあ私……下、行くから」

迦唯はすつと立ち上がると足早に部屋を出て行った。

何だったんだ？

理乃はその背中を呆気にとられながら見送った。

「逸様にお渡ししておきたいものがあります」

一階、店のカウンター内で作業中だった逸は手を止めた。

「急にどうした？」

「こちらです」

迦唯は分厚い封筒を差し出した。

「これは……！」

逸の顔に驚愕の色が浮かぶ。

無理もない。その中には自分がギルドに支払った金額、いや、それを上回る額の紙幣の束が入っていたのだから。

「どういうことだった？」

射抜くような目を向けられたが、迦唯は平然と答える。

「依頼料をお返しいたします。額が多いのは、私の食事代と宿泊代だと思ってお納めください」

そして奇麗に一礼する。

「……説明してもらえらるだろうか？」

「ただの偽善です。以前金銭的に余裕がないという話を……」
何食わぬ顔で言う彼女を逸は遮る。

「ふざけないでくれないか？」

しかし、その声音に怒気は孕まれていなかった。何かに勘づいたのだろうか。

「……残念ながら依頼を達成できないので、規則に従ったのです。ただ、最後の時までこの仕事は続けます。それに、料金の有無にかかわらずこの依頼はギルドによって達成されるでしょう。だから安心してください。ギルドも状況が状況なので今回は動きます。詳しく

くはギルドから説明があるかと思われず」
静寂が舞い降りた。

「……すまない」

やがて、何かに耐えるように目を瞑っていた逸は絞り出すように一言だけ漏らした。

迦唯は「謝らないでください」と、穏やかに声をかけると店の奥へ、自分の荷物を取りに向かった。

「……親父？」

入り違いに理乃が顔を出した。

「……ああ、理乃か」

「理乃かじゃねえよ。どうしたんだ？　なんか暗いぞ？」

「その様子だとある程度回復したみてえだな。なに、お前が気にすることじゃない」

明らかにいつもと違う雰囲気だった。そして店内を見回すと、そこには探していた姿がない。

「迦唯は？」

「迦唯さんなら奥だ」

そう言つて奥にある扉を指さす。

「そっか」

理乃が扉の向こうに消えると、逸は封筒に入れられていたもう一つの物を握りしめて天を仰いだ……。

第十九話 迦唯VS発矢（前書き）

二話に分けなかったのでもより一話が長いです。（――…）

第十九話 迦唯VS発矢

部屋の中心で、迦唯は組み終えた刀を左手で軽く一閃した。銀に閃く刃は無音。

重さと刀身の長さの誤差を実際に振って確認してみたのだが、これなら問題なさそうだ。

この刀の特徴である柄の部分の窪みにケースの中から取り出したペンダントの宝石をはめ込む。

発矢の能力にどの程度対抗できるかは分らないが、これで一応の準備は整った。

そうしていると扉がゆっくりと開かれ、理乃が顔を出した。

「理乃、どうしたの？」

「迦唯に相談したいことがあって……」

真剣な表情だったが、迦唯は不吉な予感がした。けれど拒む理由もないので話を聞いてみることにした。

「なに？」

「能力のことなんだ。どうすれば覚醒するんだ？」

「質問に質問で返したくはないけど……そんなことを聞いてあなたはどうするつもり？」

「……恐いからさ。もし勝手に覚醒してしまったらって思うと……」

「嘘でもないけど本当の理由は別にあるんでしょう？」

理乃は黙した。それはつまり、迦唯の指摘が正しいという証明に他ならない。

「……かう」

「……え？」

今、彼はなんと言ったのだろうか。

「……俺も戦う。自分の身は自分で守りたいんだ!!」

理乃の目は真剣だった。まっすぐに向けられる視線には揺らぎがなかった。

良い目だと思う。自分の身は自分で守る　かつては迦唯も同じようなことを発矢に言って困らせた。想いはわからないでもないけれど

「たとえ……たとえ能力に目覚めても、いきなり強い人なんていない。そういう能力なら別だけど」

「それは……そうだけど、でもっ！」

理乃はどこか焦っているようにも見える剣幕で詰め寄る。

「でも、なに？」

あえて冷めた目を向けて問いかけつつ、どうして理乃が急にこんなことを言い出したのかを考える。

「……なにもしなかったら、ずっと変わらないまま、変わらないままじゃないか！」

迦唯はどうやら佐祭系に何もできないと言われたことがきっかけのようだ判断を下した。

「別にそれが、能力を得て戦えるようになる、である必要は特にないわよ？」

あくまでも迦唯は理乃に力を与えないつもりだった。無理やり引き出してあげることにはできる。しかし、できれば『こちら側』に足を踏み入れるような真似はして欲しくないというのが　彼女の本音だ。特に獲得者は、そうでない人からしてみれば化け物と大差ない無^{カース}法地帯においてもしばしば卑下されたり恐れられたりと、精神的に辛いことが多い。彼がそれに耐えられるとは到底思えなかった。それに、もし理乃が自分の命を狙ってきた相手を追い詰めたとして、命乞いなんてされれば逆に殺されてしまいそうである。

お願いだから、これだけは諦めて……。

気がついたら随分勝手な事を願う自分がいた。どうしてだろう。

「確かに……確かに迦唯の言う通りだよ」

今の理乃の内では幾つもの感情が濁流と化して暴れているはずだ。

自分の想いと、目の前の現実と、願う未来とがまるで噛み合わないのだから。

どうして。なぜ。そういった問いかけが彼の中で、幾度も繰り返されてきたのだろう。

でも声にはそれらを抱え背負いそれでも先へ進みたいという意志が込められているように感じた。

我知らず迦唯は己の中から自分の思考に向けていた意識を引き上げられていた。

「俺は……」

理乃が何かを言おうとしたその時だった。

「な、なんだあんたはっ！！」

逸の声だ。

次いで、テーブルや椅子が薙ぎ倒される音が聞こえた。

「部屋の隅へ」

迦唯は鋭く言い放つと刀を手にまず扉を僅かに開き、そこから店内の様子を窺う。

「……！！」
店の中央、逸には目もくれず佇む人物を視界に止めた迦唯の目が見開かれる。

「は……っ、や……！！」

無精髭を生やしたスーツ姿の男。五年前、迦唯を助け出したときと殆ど変わらぬ姿で発矢は現れた。がっしりとした体つき。背は約百九十センチ。ただそこにいるだけで壁のような威圧感を与える。

間違いようがなかった。

発矢は動かない。待っているのだ。

ただ、様子が少しおかしい。発矢は身構えたまま動かない。

標的が理乃ならそんな事をする必要はない。たとえ迦唯がいても、今の彼の力ならば理乃を狙い続けているだけで十分である可能性が高い。

不審な点はまだある。なぜ今になって乗り込んでくるのだ。それも、わざわざ真正面から。

拳句、迦唯に接近を悟らせることなくここまで来ておいてその存在を見せつけるというのは……。

畏、なのだろうか。

発矢は視線を迦唯達のいる部屋の扉に固定している。

「理乃……。もし狙われたらとにかく逃げることを考えて」

「迦唯は……？」

理乃に答えることもなく部屋を飛び出す。

途端、発矢が動いた。

「っ！！」

迦唯に向かって。

瞬間的に迫った巨大な影が暴風を纏った蹴りを放つ。

速い！

自分が知る発矢の蹴りの速さを遙かに上回るそれを、飛び出した勢いのまま強く床を蹴り飛翔して回避すると空中で体を捻り、天井に着地。すぐさま店の入り口の方向へと飛ぶと、その直後に天井に穴が穿たれる。発矢の鋭い貫手がいともたやすく天井を突き破った。そのまま天井を裂きながら速度を損なうことなく落下の勢いとともに手刀が迦唯の背中へと振り下ろされる。

それを前方に転がりつつ避けると店の外へ。後ろに向かって飛翔すると足元に発矢が飛び出してくる。

靴底が発矢の髪を掠めた。

迦唯は店の壁を蹴りさらに店から距離を取る。発矢の追撃をかわ

しながら立ち並ぶ建造物の間をムササビのように飛び回り大通りへ出るとそこでようやく対峙する。幸い人影は見られない。ここなら大丈夫だろう。

速度的にはそれほど差がない。発矢の力は予想していたほどには強化されていないようだ。そのことに少し安堵を覚えた。後は攻撃さえ通用すれば倒せない相手ではない。攻撃さえ通用すれば。

しかし片腕は使えず、胸の傷だつてある。仕方がないとはいえ、逸と理乃も置いて来てしまった以上、戦闘を長引かせるわけにはいかない。

私に……できるの………？

脳裏に浮かぶのは、過去の記憶。幼い迦唯の前で一度だけ染火が見せてくれた技。迦唯の……刀を手に取った理由。もし可能で、更に攻撃が通じるようなら発矢を倒すこともできうる、とっておき。シエオルに逃げると言われているが……十全ではない今の迦唯ではその方が難しいだろう。

移動速度は負けてはいないが勝つてもない、つまり何か隙がでない限り振り切り切ること也不可能だ。逃走するにせよ、隙を作らなければならぬ。

ならば、彼女が取る行動は一つだ。

迦唯は刃を構える　　ことはせずに手足を弛緩させた。目も閉じている。

それを見た発矢が地面を陥没させるほどに強く地を蹴って踏み込む。

二歩で間合いを詰めると一直線に心臓を狙って突き出される貫手。迦唯は目を開いた。

貫手を、下方から急速に跳ね上がった刀が刃こぼれすることなく受け止めていた。

発矢は無表情にしかし、その場から一旦飛び退って距離をとった。

警戒しているようだ。能力によって硬化した腕による貫手が完全に止められるなど、予想していなかったのだろう。

次の攻撃がなされる前に迦唯は動いた。流れるように発矢の懐に飛び込むと刀を横薙ぎに一閃。発矢はそれを腕で防ごうとするが「！！！」

彼の驚愕が迦唯にも伝わったような気がした。

刀を受け止めた発矢の腕に亀裂が走り、血が滲んでいる。

だが、迦唯自身も驚いている。実際に期待通りの効果を發揮してくれるとは思ってもいなかった。しかし、これで傷を負わせられることがわかった。

発矢の目が、迦唯の持つ刀の柄に向けられた。

刀の柄の窪みに取り付けた宝石が淡く虹色の光を灯していた。

よく見ると刀身は半透明の何かを纏っている。

その何かとは、第一段階時には彼女の半径三メートルの範囲に広がって外からの干渉や遠距離からの攻撃を防ぎ、第二段階時には相手を不可視の圧力となって押し潰す、彼女の能力そのものだ。

そして能力を武器に付与することを可能としているのが、大まかな能力の判別などを行えるペンダントの宝石だった。宝石には判別の他に、こうやって物に能力を与えるという効果もある。

その能力を纏わせた刃が発矢の能力で硬化された体による攻撃を防ぎ、傷を負わせたのだ。

発矢が迦唯のことを危険と認識したのか、再び間合いを取ると

先ほどまでとは比べ物にならない速さと力強さ、正確さで鋭い突きが彼女の背後から繰り返り出された。

「はっ！」

鋭い呼気とともに迦唯は後ろを見もせず刃を背後に突き出す。

腕が勢いに負けて押し戻され、突きが背中に吸い込まれる。こ

とはなく、虚しく空を切った。迦唯は勢いを利用して身を翻し、その最中に刃を上段に構える。発矢の首筋に上段からの斬撃が叩き込まれ、表面に亀裂が奔る。

迦唯は襲いくる突きを、拳を、蹴りをたくら尽くかわし、僅かな隙がでる度に刃を打ち据える。

一回、二回、三回……。

今ので六回分。……後六回……。

発矢の速度が上がっているにもかかわらず、迦唯はまるで風に舞う花弁がそれを掴もうとする指を避けるかのようにひらひらと、触れられないことが当然とばかりに回避している。左手に握られた刀はもはや彼女の一部分となって自然と動きの中に組み込まれており、時に弧を描き、時に半月を描きながら振るわれるそれは、次第に発矢から反撃の余裕を奪ってゆく。

発矢は刃を受け止めるのは危険と判断しているのか、斬撃を腕などで防御せずに回避している。

迦唯は刹那の停滞もなく体を動かし続ける。少女と刀が織りなすそれはまさしく舞踏、いや、舞刀と呼ぶべきか。よもや幼少の頃の記憶を頼りに体の動かし方を再現しているなどは到底思えないだろう。

十回！

迦唯の能力を纏わせた刃が発矢に累計十回目の接触を果たす。

二回目の腕以降、迦唯は常に同じ個所に攻撃を加えていた。そう、発矢の首だ。

一回や二回では落とせなかった。ならばと、迦唯は残る能力の回数全てをその一点に集中させることにしたのだ。

今、発矢の片腕は彼の首にあてがわれている。さすがに放置できない状態なのだろう。

もしかしたら……勝てるかもしれない。けれどそれはつまり

……。

迦唯の中に生まれた迷い。いや、発矢が化け人になったと聞かされた時から抱いていたそれは、一度は振り払われながらも、この土壇場で少女の心を掻き乱した。

彼女は、刃が発矢の首に十一回目の接触を果たそうとしたその瞬間、舞を止めてしまった。

その隙を発矢が見逃すはずはなかった。彼の腕が突き出され

「う、あ？」

迦唯の体を、貫いた。

第二十話　そして……

彼女の舞う姿は、彼の眼を釘づけにした。息をするのも忘れ、舞に見入る。

理乃は何も考えず、つい湧き上がった言いようのない衝動に身を任せて店を飛び出し、発矢が残っていた建造物の壁面などにあった傷跡を辿って大通りにまで来てしまっていた。

来たままではよかったものの、見つかったりすれば迦唯の足を引張るだけだし、今更引き返そうたつてどこに伏兵が潜んでいるかわからない上、すでにこれ以上ないほどに軽率で迂闊な行動を取ってしまったので、さすがに更なる迂闊な行動は避けようと手近な空家に中を確認してから身を隠している。

しかし、見える範囲に彼女がいるためについ気になって様子を窺わずにはいられなくなってしまう、隙間からどうにか自分の姿を隠しつつ二人の戦いを覗き見しているのだった。

傍から見ても、状況は迦唯が圧倒的だった。

相手の　発矢の攻撃が全く通用していない。確か迦唯は、『私じゃ発矢に勝てない』というようなことを言っただけであつただろうか。

なんだ。話と全然違うじゃないか。

よく見ると発矢の体に傷も付いているようだった。

迦唯は確か……攻撃が効かないって言うていた気がする。麻莉亜さんも『この世で能力によって強化された発矢の体を傷つけることができるのは二つだけ』と言っていたし、それらを迦唯は所持していないはずだ。なのに、なぜ傷を負わせることが出来ているのだろうか。

それらの疑問が浮かんだのだが、今の彼にはそんなことに構う余裕などなかった。

彼女の流水のような動きは停滞というものを知らず、彼女の後に

は尾を引くように、長い黒髪が広がってできた小さな夜空が追隨する。

刹那だけ煌めく銀色の川が流れる方向を自在に変えながらその夜空を照らし、時折その中に赤い星を散りばめる。

彼女は 迦唯は優雅に舞う。表情はどこか安らかとも、半分眠っているようにも見える。

迦唯は命懸けで戦っているというのに、理乃は刀とともに舞う少女を美しいと思った。

このままいけば、おそらく最も厄介な相手が片付くのだろう。

……異変が起こったのは、迦唯は怪我をしているからせめてこの戦いが終わったら自分が介抱しよう、などと理乃が考え始めたその時だった。

迦唯？ どうし……た……っ！

迦唯の動きが停止し、次の瞬間。

彼女の背中から腕が生えていた。

理乃の位置からは、迦唯の動きが止まった体勢も、発矢が腕を突き出した光景も、そして……彼女の体に向かって差し出された発矢の腕が吸い込まれ 彼女の体を貫くその様子を、ありありと見て取ることができた。

「……………っ。う……………うそ……………だろ？ ……こんなの、って……………」

腕がゆっくりと引き抜かれ、鮮血が吹き出した。

地面に倒れこみ、ピクピクと何度か痙攣けいれんしてから動かなくなる。発矢は動かなくなった迦唯を担ぎあげると、歩き始めた。

理乃の隠れている空家に向かって。

気づかれていた?!

慌てて彼は発矢がいる方とは反対の窓から飛び出て

「な……っ!」

彼の眼前にはすでに発矢がいた。まだ力は有り余っているというのか。

驚愕に目を見開き、動くことのできない理乃の脳天に向かって腕が振り下ろされる。

理乃は何も理解できないまま殺されるはずだった。

しかし、発矢はなぜか大きく飛び退く。

その直前、理乃の目の前が黒い影で覆われたかと思つや否や真っ赤に染まった。

「やな予感つてのは当たり過ぎて困るな、ほんと」

理乃の視界を埋めたのは燃えるような赤い髪だった。

その髪の持ち主 シエオルはその手にこれもまた赤い、まるで血のような赤色をした刀を携えていた。

理乃には急に表れたかのようにしか思えなかったが、実際のところ上から降ってきた。

屋根伝いに飛び回って痕跡を辿ってきたのだ。

「さて、と。どうすっかな……」

理乃を庇うように立つシエオルは軽い口調とは裏腹に、その眼は鋭く研ぎ澄まされた狩人のそれだった。

シエオルの肩に担ぐように持ち直された血色の刀の刃先から、赤い水滴がポタリ、ポタリと地面に落ちて染みを作り、その染みからは煙が上がった。滴り落ちた赤い滴がその場を僅かばかりだが溶解させているようだ。

明らかに普通の刀ではない。とういうことはこれが、この血色の刀がシエオルの能力なのだろうか。

理乃はまだ動揺から抜けきれない思考の中で、そう考えた。

「理乃。勝手に出てきたことについては今は忘れてやる。だから少し下がってろ」

そしてシエオルは一步で最大速度まで加速して瞬時に発矢に肉薄する。

最早人間の脚力とは思えない。初めからそこに立っていたと言われたら信じてしまいそうだ。

だが。

刃は発矢を掠めただけに終わった。

迦唯と戦っていた時に比べて、その動きは雲泥の差だ。ずっと速い。

理乃は信じられない思いだった。

目で何とか姿の端くらいなら見ることはできていたのに、残像すら見えない。

さっきのアレは一体何だったのだ。夢だったとでも言うのだろうか。今の発矢の動きは理乃にそう思わせるのに十分過ぎた。

にもかかわらず平然とその動きについていているシエオルもシエオルだ。

全くもって次元が違った。

理乃は無力感と虚しさに支配されることすらなく、完全に二人の動きに迦唯の舞刀とはまた違った意味で心を奪われた。

だが理乃は知らない。迦唯が十全であつたなら十分なし得ることだということ。

幾度目かの衝突で、宙を腕が舞った。

シエオルは無傷。腕は発矢のものだった。

迦唯の能力でも傷つけることしかできなかった発矢の体。それをあつさりと切断してしまうとは何という切れ味なのだろう。

発矢に傷を付けることができる二つの物の内の一つ、確実に現存する物つて、シエオルの刀のことだったのか？！

「っち……………」

シエオルの舌打ちが聞こえて、理乃ははつとなる。

「あれ…………？」

辺りを見回してもその姿……………発矢の姿がなかった。迦唯も見当たらない。

「どうやらあいつはお前じゃなくて迦唯の体が目的だったらしいな。あの野郎、片腕捨てて逃げやがった」

苛立ちを吐き捨てるような物言いで表しながらシエオルはこちらに戻ってきた。

「それじゃあ迦唯は?!」

たまらず理乃は詰め寄る。今にも掴みかからんばかりの勢いだ。

「なんとも言えねえな。一先ず帰るぞ。迦唯はまだ殺されたとは言
い切れないからな。もし、仮に生存していたとしてもどこにいるの
かすらわからないのなら助けようがないだろう?」

そう言われると、理乃は何も言えなかった。

「ま、助けたりなんかしたらアイツ、ブチ切れて暴れそうだけどな
勝手なことするなって」

ほれ、とシエオルはあえて陽気に振舞いながら理乃と無理やり肩
を組んで帰路へついた。

理乃は結局、黙って従うしかないのであった。

第二十話　そして……（後書き）

これを書いていたら頭に頭痛だったので多少荒くなっております。（

投稿時現在進行中）

比喩表現ってムズカシイ……（-|-;-）

第二十一話 彼女の受難（前書き）

警告。以下の文章はあなたに不快感を与える可能性があります。残酷なモノが苦手な方はご遠慮ください。この二十一話を読んでいなくても大丈夫なように続きを書きますのでご安心を。一応……かなり加減しています。大したことないじゃん、お思いになられるかもしれません。しかし念のため、警告しておきます。

第二十一話 彼女の受難

痛い。吐きそう。

まず抱いたのはこんな感想だった。

痛みを感じられるということは、おそらく生きているようだ。

重たい脛をなんとか持ち上げてみると、見慣れない風景が飛び込んできた。

天井には細いケーブルや太いケーブルが沢山。それらの行き着く先は目の前、およそ八メートル先の扉脇に設置された何らかの機械だ。床には一定間隔ごとに溝があり、部屋の四隅には排水溝らしきものがある。どうやら床は真中に近いほど少し盛り上がっているようだ。

視線を巡らせると、どうやらここは八メートル四方の部屋だった。その中央。天井と床から伸びた鎖に迦唯は繋がっていた。

これではまるで五年前の再現だ。

自分の体の状態を調べてみると、特に酷いところが二点。後は服を剥がれている。

まず右腕は、ギブスを外され本来ありえない方向に折れ曲がっていて絶え間なく激痛をプレゼントしてくれている。胸はなぜか貫かれたはずなのにそんな痕跡はまるでなく、元あった傷もどこかへと消え去っていた。それにもかかわらず、絶えず苦痛を訴えているのだから不思議なものだ。こちらもなかなか耐え難い。

ああそれか、と納得する。

気がついた時にはもう、目じりには涙が浮かんでいたのだ。止めようと思っても勝手に流れてきてしまうので気にしないことにしたが。

他はさほど気にならないから大した損傷はないと判断する。

というよりも、右腕と胸の二か所が強烈過ぎて他を気にする余裕がない。

迦唯が失禁してしまったところで、電流による凌辱は一旦止められた。

「う……あ……」

「ふん。ボクのかわいい作品を殺した報い、その身に存分に刻んでくれる……」

口元に浮かべられたのは陰鬱な笑み。今しがたまで眠そうだった目つきはギラリとしたものに変わり、目は血走っていた。

さらに男は機械を操作する。天井が開き、迦唯に水が被せられた。迦唯は途切れたり戻ったりして朦朧もつろうとしていた意識をほぼ完全に覚醒させられた。

情けない、な……。でも、この様子だとすぐには殺されない……。命拾いしたわね。まあもつとも、いつそ殺してもらった方が楽だと思つような目にこれからあわされるでしょうけど……。

「今の電流で分かったと思うけど、君の能力は封じさせてもらったよ。ふふっ。どうやら獲得者には共通して効果があるのかな？ 君たちの体に生み出される『世界の法則の一部を知覚し、操る器官』とでも言えるものはねえ……。おおっといけない。こうやって相手に説明するようなことをした奴が生き残つたためしはないからね……。冥土への土産はあいにく持たせてやれないからそのつもりで。ははっ」

何がおかしいのか、彼は笑う。

それで防げるはずの電流をまともに受けたのね……。困つたわ。どうやって逃げようかしら。

「さて次は……そうだなあ」

彼の様子はまるでおもちゃを前にした子供のようだ。実際、彼にとつて迦唯はおもちゃ以外の何物でもないのだろう。

迦唯はそんな彼をただ無表情に見据えるのみ。

屈伏する気などさらさらないといつた風情だ。

「発矢よ。あいつの股の穴にその腕を肘まで突っ込め。いいか、殺すなよ？ ゆっくりと入れるんだ」

そんなことをされたらどうなるのか。

その状況を想像した迦唯は表情を引き攣らせた。

命じられた発矢が無言で迦唯の元へ歩み寄る。

喉元まで出そうになった「ひっ」という悲鳴をなんとか押し留める。

そして、そこに握り拳があてがわれ……強引に押し込められてゆく。

「……………」

拳の半分が侵入を果たす。

迦唯に表面上の変化は見られない。

「……………ぐう」

拳が完全にそこに飲み込まれ、迦唯は僅かに呻いた。

少し苦しそうな表情をしている。

「……………うあ。ひっ……………あ、あぐ……………」

肘まで、後半分。

焦らすように侵入する腕により中を無理やり押し広げられてゆく。内側から焼かれるような痛みに、迦唯は徐々に苦痛の色を隠せなくなってきた。

「くうううう……つああ!!」

発矢の腕が肘まで完全に入りきった。

息が苦しい。おなかが苦しい。

腕を入れられただけで体は大量に発汗し、肺は酸素を求めてやまず、目には涙が溢れて 零れた。

迦唯の表情は苦しげに歪められ、息も荒い。それでも彼女は叫ぶまいと歯を食いしばる。

そんな迦唯を見た彼はわざとらしい拍手を送った。

「へえ……泣き叫ぶと思っただけ。意外と我慢強いんだね、君。僕はてつきり、いつも能力に守られている上に怪我を負うことも少ないから痛みに弱いと思っていたのに」

「……………」
迦唯は答えず、ただ射殺さんばかりに睨む。

「ふふつ。そうこなくつちゃ面白い。発矢。その状態で腕を硬化させる。もちろん手加減するなよ？ ちゃんと化け人の腕として変化させるのを忘れるな」

化け人の……腕？ つ！ まさか？！

迦唯が自分の身に何が起ころうとしているかを悟ったのと、今までに味わったことのない、想像を絶する圧倒的な痛みが襲いかかってきたのは同時だった。

「……!!」
もはや絶叫は声にならない。

目を限界まで広げ、とめどなく涙が溢れ始めた。

開いた口からは声にならない絶叫が発信され続け、よだれが垂れ

る。

股からは大量の血が流れ出て床に放射状に広がって四隅へと流れていく。

迦唯は小刻みに体を震わせながら、壮絶な痛み^にに気を失い、そしてその痛みで再び意識を取り戻し、短い時間の中にそれを何度も繰り返す。

あまりの痛み^にに身を擦^{よじ}ってしまい、右腕も更なる痛みを訴える。どちらかの痛み^ががうまい具合に必ず彼女の意識を呼び戻していた。

「まだこれからだよ。発矢、腕を動かせ」

もはや彼の言葉など耳に入らない。

発矢が中で腕を乱暴に、かき回すように動かしながら出し入れする。

「がああああああああああぐううぎいいいいががぎやいいああ」

その度に迦唯の口からは獣の叫びのような悲鳴が大音量で発せられた。

迦唯は頭の中の大部分を痛みで埋め尽くされていた。

時折哀願の言葉や殺してなどといったことを浮かべて言いそうになるのを、皮肉にも上げまいとしていた悲鳴によってかき消されながら。

ぎい、うが、つく、あぎい?! 死ぬ! 死んじやう!!

死、んじや、う、よう……?! やめ、あぐ、て、うぎい?!

.....

「へえ、結構頑張ったじゃん」

気を失い、水をかけたりして見ても全く目を覚ます気配のなくなつてしまった迦唯を前にして彼は感心した風に言った。

「何か……ただ痛ぶつて殺すのも、惜しいな。いろいろ試せそうだな。ふふっ、はははっ。……行くぞ。発矢」

無言で頷くと、発矢は彼に随行していった。

第二十一話 彼女の受難（後書き）

えー、ドン退きされてそれで怖いです。（……）
ん？ ならこんな話を書くな？ ……ゴメンナサイ

第二十二話 どうしたい？（前書き）

……見事に体調崩しましたOTZ なんかもうグダグダです。（T
OT）

第二十二話 どうしたい？

シエオルとともに家に戻った理乃は、逸にこっ酷く叱られるはずだった。

怒声を浴びせ始めた逸を、シエオルがすぐ止めたにそれは即刻収まることになったのだが、それでも理乃には効いたようだ。

しばらく流れた沈黙。気まずい空気にシエオルは「どーしたもんかねえ」と内心溜息をついた。

「……ほれ」

そんな中。不意に逸はカウンターに向かっていき、そこから持ち出した一通の封筒を理乃に手渡した。

「……これは？」

神妙な顔でこちらを見つめる瞳は、とにかく中を見ると言っているようだった。

何だろうと想い、理乃は中身を取りだす。

出てきたのは手紙だった。

理乃はやけに丸っこい、けれど丁寧なかわいらしい字で綴られた文章に目を通した。

「……………」

手紙には、迦唯が死んだ場合又は行方不明になった場合、代行としてシエオルが来ること。おそらく自分はもうすぐ発矢と戦うことになるだろうこと。そしてその戦いに敗れるであろうこと。ギルドに対する支払はする必要のないこと。同封した金は以前逸が支払ったものとの他経費であり、返還するということ。そして、余計なことはしないようにと一言。

およその内容はこんなところだった。最後に謝罪の言葉があったのを見なかったことにしておく。

なるほど……それですか……。

逸はこの場に迦唯がいないことに別段驚いた様子もなく、更にはシエオルのことも事前に知っていたようだった。ということは事前にこれを読んでいたということなのだろう。

「……んで、どーするんだ？」

シエオルは理乃に問いかける。

「ど、どうって……」

「迦唯は余計な事をして欲しくないと思っている。けれどあいつの意見なんて考えなくていいとする。ここで、だ。さて、お前は今どうしたい？」

逸は口を挟まない。ただ静かに二人を見守る。

「俺は……」

問われた彼は考え込んでしまう。

そんな彼を見かねた逸は、

「いちいち考えんじゃねえ！ 思っていることをそのまま口にすればいいんだからよ」

と、叱咤しつたした。

それが効いたのか、理乃は思っていたことを意外とあっさり口にする事ができた。

「俺は……迦唯を助けたい」

………

そして現在、理乃はシエオルに連れられてギルドにやってきていた。

迦唯が発矢に連れ去られてから、およそ二時間と少し経過している。

理乃は不思議と落ち着いている自分に少し驚いたが、今はそんなことすらどうでもいいと切り捨てる。

理乃は、一人で麻莉亜まりあと対峙していた。

「……それで、理乃ちゃんも本当にそれでいいのかしら？」

「……構いません」

「今までのように過ごすことはもう二度とできないし、いつ死ぬかもわからない世界に身を置くことになるのよ？　そこらへん、ちゃんとわかって……いるみたいね……」

見かけは少女とも思える少年の瞳は揺るがない。

麻莉亜は、迦唯と初めて出会った日を思い出す。そう……あの子の目も、あんな感じだったかしら、と。

「能力を強制的に目覚めさせて、あなたの体がそれに適應するのに一日。能力を生かせるかどうかはあなた次第よ。それと条件はちゃんと守ってもらおうよ」

……一日か。

最低でも迦唯を助けにいけるのは明後日になるだろう。

もしかしたら迦唯はもう生きてはいないかもしれない。

発矢のように傀儡かいらいにされているということも有り得る。その場合は迦唯と戦わなければならないだろう。

それら悪い可能性を認識していながら、理乃は焦りを感じてはいなかった。

簡単な話だ。

迦唯はそうやすやすと殺されはしないし、移動中シエオルから聞いた話からすると、おそらくすぐには殺されない。

発矢のようになっていたら自分がどうにか元に戻してやればいい。

理乃はそう考えていた。

ならば、確実に助け出さなければならぬ。そのために、ここに来たのだ。

「はい」

揺るがないのは、声も同じだった。

「ところで武器だけど、あなたに扱えるようなものといえば……あまりにも心もとないものばかりね」

麻莉亜は話題を次に移した。むしろこちらの方が解決し難い話だったので先に言及しないでおいたのだ。

「それは……」

さすがに、理乃もこの問題をどうにかすべきと思っていたのだが、解決策は浮かんでいなかった。

「そうねえ、後で迦唯ちゃんの家に行つてごらん下さい。いろんな物があるから、幾つか拝借しちゃいましょう」

それは……いいのだろうか？

さらつと何気なく言つてのける麻莉亜は、どう返していいか迷っている様子の理乃を見てクスクスと笑う。

まあ……どうせファウ達に会いに行くつもりだったし、いっか。

理乃はとりあえず迦唯の家で何か使えそうな物を探してみることにした。

第二十二話 どうしたい？（後書き）

この話に限り誤字脱字は仕様です（マテ 嗚呼……投稿時現在、かなり頭痛いとです…… か

第二十三話 彼の能力 目覚め

理乃は見知らぬ部屋で目が覚めた。

なんだよ、コレ。

目に入るもの全てが二重に見えて気持ち悪かった。

白いカーテン。白い壁。理乃が身を横たえるベッドのシーツも白。ベッドの脇に置いてある棚も、その上の水差しも、みんな白。そしてそれぞれが二重に見えるのだ。

扉の方に視線を向けると、こちらも二重に見える。

ただし、他の物の時とは異なり、閉ざされた状態の扉と開かれた状態の扉、二つの異なる風景が重なっていた。しかも、それぞれがはっきりと見える。

数十秒後のことだった。何の前触れもなく、扉が開いたのは。

「あら、もう気がついたのね。お目覚めの気分はどう、理乃ちゃん？」

姿を現したのは、麻莉亜だった。

「……最悪だよ。頭が痛い」

あと、ちゃん付けも止めて欲しい。

「別にいいじゃない、ちゃん付けでも」

心の声を読まれた?! もしかしてそういう能力なのか?!

「違うわよ。心の中なんて、私には覗けないわ」

「……だったらなんでわかるんだよ?」

理乃はジト目で麻莉亜を見る。

「うーん。勘?」

「疑問形?! しかもなんだよ勘って?!」

なんて迷惑な勘だ。

「それにしても、たった一時間で目を覚ますなんて……。まさか、

ね」

突然真剣な表情になった彼女はなにやらよくわからないことを一人小声で呟く。

「……………」

その様子を訝いぶかしげに見つめる理乃に気づいた麻莉亜は「なんでもないわ」と取り繕うように微笑み、

「頭痛がするのはあなたの体がまだ呼び覚まされた能力になれていないためよ。そう長くは続かないと思うわ。だから治まるまではじっとしていなさい」

と、すぐにでも動くこうとしていた彼に釘を刺した。

「でもっ……………」

「どんな能力なのか、教えてもらいましょうか。元気そうだし」

そう、麻莉亜は理乃が獲得者らしいということは聞いていたが、その事実が発覚した迦唯邸（というより発矢邸）での事件を当然知らないのだ。

理乃は渋々、しかし一応話しておくことにした。こういうのはあまりぺらぺら話すようなものではないのだろう。だが、今の段階では話したところで、デメリットはあまりないと判断したのだ。

「物が二重に見えるんだ。殆どのものはただ二重に見えるだけ。麻莉亜さんが来る前に出入口の扉を見た時は、閉まっている風景と開いている風景とが重なっていた。それから何十秒か経って……………」

「そこで私がああ扉を開いたってこと？」

「そうだよ」

「なるほどねえ……………。物に関しては二重に見える。なら、私はどうなのかしら？」

「……………時々重なる。ただ、話しているうちにそうなってきたみたいだ」

「数十秒先の未来が現在に重なって見えているのかしらね」

「ずっと、このままなんだろうか……………」

ボソツと口を衝いて出る不安。

「コントロール次第よ。さて、どうやら能力は数十秒先までの未来視のようだけど、これじゃあ火力がないわね」

「……だから俺も行くんだよ」

二人して突然投げかけられた声に扉の方へ振り向く。

そこには赤い髪が印象的な男性　シエオルがいつの間にか扉にもたれかかるようにしていた。

「なんでシエオルが……？」

「なんでって、お前なあ。……ただの様子見……のつもりだったんだがな」

理乃の発した問いかけにシエオルは髪をかきあげながら答えた。

「様子見、ねえ……？」

シエオルの態度に意味ありげな笑みを麻莉亜は浮かべる。

「な、何だ……」

「ふふつ。別に、何も」

僅かにシエオルがたじろいだのはどうしてなのだろう。

「でもちようどいいわ。今の話、聞いていたかしら？」

「今来たばかりだよ。こっちの用事を終えたばかりだ」

「そう……。なら理乃ちゃん、もう一度……」

「理乃の能力についてなら必要ないぜ。……それならどんなものか、大体わかってるさ」

「あら……そう、なの」

口ではそう言うものの、麻莉亜に対して驚いているような素振りは見られなかった。

それどころか、一瞬、本当に瞬間のことだったのだが、彼女の表情が研ぎ澄まされた刃のように鋭利なそれへと変化していた。

驚いている時、人は果たしてこんな表情をするものだろうか。
どうにもかけ離れ過ぎている。

そう……。まるで、咎めるような雰囲気を持つ目つきだ。

理乃がその理由について思考し、それに埋没している間にも二人の会話は進みその結果、理乃の頭痛が治まり次第、次の行動に移るといふことになった。

これ以降、迦唯救出と理乃に、いや、無^{カース}法地帯全域に対する脅威が去るまでの間、理乃はシエオルと組むことになった。

それは、当初予定していた守るものと守られるものの関係としてではなく、互いに同じ目的を果たそうとする者同士という関係。

少し早いが、確かにこの瞬間から、理乃は守られるだけの存在ではなくなったのだった。

「……大丈夫なのか？」

「ああ……。なんか、二重に見えていたものが今は見えなくなってる。これって……」

「……体に能力が馴染んだんだろう。試しに動きのある何かを予知しようと思いつきながら見てみる」

「何かないかな……」

偶然目に留まった、路地裏でゴミ袋を漁っていたカラスを言われた通り見てみる。

すると、視界には見たものが二重に映るといった変化はなく、代わりに頭の中に今見ているもん音は異なるもう一つの光景　漁っていたゴミ袋が一気に破れて中身が雪崩のようになってカラスに襲いかかり、びくんと驚きを露わにしながらもそれに埋もれまいと瞬時に羽ばたき一つして後ろに下がるカラス　が浮かび上がった。

今認識しているものとその光景は重複せずに、それぞれ別のものとして同時に。自然に認識することが出来ていた。

更には、何秒後にそれが起こるかがいつの間にか記憶されている。

足を止めた理乃の視線の先を意識しながらシエオルは静かに待つ。
「後二十三秒……ゴミ袋から中のゴミが溢れ出してカラスに向かい、それをカラスは羽ばたき一つで後ろに逃れる」

確認するような口調で理乃は唐突に告げた。

シエオルが二十三秒数えてみると、二十三数えたのと僅かな誤差（理乃のペースとの違いによるもの）があつたものの、彼の言う通りの事象が起こつた。

「どうやらちゃんとなつてるみたいだな」

「……これって便利なのかそうでないのか微妙な気がす、るっ?!」

理乃は突然脳裏に浮かんだ光景に一度ぼかんとし、

「シエオル! 下だ!!!」

我に返るとともに即座に警告を発して自身は慌てて後ろに跳んだ。

警告を受け、シエオルが地面に意識を集中させたその時、

理乃が立っていた位置と自分の今いる足下にめきめきと亀裂が入つて 勢いよく、盛り上がった。

「ちっ!!!」

シエオルは跳び上がり空中に身を躍らせ、そして見た。

盛り上がった地面の中から姿を現したそいつの姿を。

第二十四話 時間奪取

「あれも化け人……なのか？」

理乃はそいつの姿に目を見開いた。

体は普通の人間大のサイズだが、腕は丸太のように太く、岩を軽く捻り潰すであろう大きな鋼鉄の手と鍵爪。足は不明。地上に表出しているのは腰の辺りまでだからだ。

しかしまあ、とてもじゃないが足が普通に人間のものとは思えない。

段々人の原型を留めなくなってきた気がする。その内化け人ではなく単なる化け物が現れそうだ。

……訂正。既に化け物だ。

などと理乃が余計な事を考えている間に目の前にその姿を現した化け人はすぐにまた地下へと潜っていつてしまった。

四秒後に真後ろ！

予知能力で攻撃がいつどこから来るのかを知ることができない理乃はそれを利用してひたすら避け続ける。

先に分かっているからこそ、理乃の運動能力でも回避が間に合っている訳だが、それをいつまでも続けることは体力的に不可能だ。

獲得者には総じて身体能力の向上が見受けられるもののだが、強制的に呼び覚ましたせいかわ、まだ彼にはそれが起こっていない。そのため、彼が逃げ回っていられる時間もそれほど長くはないだろう。

とはいえ、彼は今現在武器を所有していない。あんな相手に素手で殴りかかったところで効き目があるようにはどうしても思えない上、そもそも腕をかくぐって本体にまで辿り着くことはできない。倒せない以上、シエオルの方が片付くまで理乃の持久戦は続く。

一方、シエオルは足音も立てずに着地すると懐からナイフを取り

出し、それを右の掌に突き立てた。

振るわれる化け人の腕を見もせずに後ろに軽くステップしてかわし、ナイフを引き抜く。

即座に下に向けられた掌から血が真っ直ぐに流れ落ち、一振りの刃を形成してゆく。

シエオルはできあがった武器　血の刀を正眼に構える。

もしこの時、理乃に彼の方を見る余裕があつたのなら驚いていただろう。

刃を構えるその姿が、構えたときの雰囲気が、敵に向ける鋭い目が、呼吸のタイミングが、間合いの測り方が、どこか彼女に　迦唯に似ているのだから。

シエオルの姿が消える。

瞬時に彼我の距離を零にし、地中に潜ろうとした化け人の本体に血刀を振り下ろす。

が。

刃は本体を頭から両断することなく虚しく空を切る。

「こつちの予想以上に速い、か……」

本体を追って両腕が地中へと引き込まれていくのを、あえて見送りながら彼は呟いた。

この化け人はどうやら、腕の射程範囲からこちらが離脱するとその場から地上を進んで近づこうとはせず一度地中に潜ろうとするようだ。

だからといって地上での移動手段がないといのは早計だろうが。

「さて、どうすつかね」

本体を真っ先に沈めたところから見るに、腕を攻撃したところでトカゲの尻尾切りみたいなものなのかもしれない。

シエオルの常道は化け人の頭を潰すか解体すバラというものだ。

だが、今回現れた化け人の本体を地中に沈める速度たるやシエオルの最速に等しい。

地中からの初撃を避け振り回される腕の間隙を縫って走り抜けたとして、果たして間に合うだろうか……。

腕を斬り落とせば攻撃手段を、そして、もし腕で地中を掘り進んでいるのならば移動手段さえも奪うことができるのではないか。いいやとシエオルはその考えを否定する。

どうにも嫌な予感がしたからだ。

あの腕は本体にとってはむしろ邪魔のようにすら思える。

攻撃手段に用いているといっても要は振り回しているというお粗末なものだし、本体はすぐに引っ込むくせに腕はそれに比べれば遙かに遅い速度で穴に引き入れている。

シエオルにはそれが何かしらの誘いに見えてならなかった。

最近の傾向としては、化け人にはこういう単純そうな奴ほど狡猾である場合が多い。

だからシエオルがそう考えたのはもつともであった。

理乃は　と視線を向けてみると、なかなか頑張っているようだ。ん？

予知して攻撃される前に相手の間合いから脱している理乃の様子に何か違和感を抱いたシエオルは目を細めた。

気のせいかな？

真横から姿を現した化け人の腕を、一瞥することすらせずにそれを避け、射程範囲から逃れる。視線は理乃ともう一体の化け人に向けられたままだ。

また地に潜るこちらの化け人には目もくれず、違和感の正体を確かめんと注視する。

地面を突き破って現れる化け人。攻撃を予知して走る理乃。振られる腕。理乃はまだ射程内。理乃の身に迫る鉤爪。

まずい。間に合わない！

シエオルが慌てて助けに向かおうと身構え

「　っ！　な、に……！！」

理乃の姿が数メートル先に一瞬で転移し、化け人はというとその

動きを凍ったように停止させていた。

ちょうど理乃が振り返って化け人に向き直ると同時に、そいつは何事もなかったかのように活動を再開し始める。

なんだ、今のは……？　　転移した？　それとも、時間を止めた？

正確には、化け人の時間を数秒奪って、更にはその奪った時間の分だけ理乃が行動していた。そして、時間を奪われた相手はその時間分の間、動くことができないのだ。

仮に相手から三秒奪ったとすれば、本来の三秒と奪った三秒、計六秒分行動したことになる。その六秒分の行動が現実では実質三秒で行われるので、三秒分の誤差が生じてしまう。その誤差によって理乃の姿は瞬間的に、まるでワープでもしたかのように他者の目には映るのだ。

理乃が転移している　とシエオルが思ったのはこのためだ。

「まあいい。とりあえず試してみるか」

肉食獣のような表情を浮かべた彼はそのタイミングを待つ。襲い来るこちらの化け人の攻撃を当たり前のようにかわしながら。

様子を窺^{うかが}っていると、地に潜んだ相手の猛威から懸命に走って逃れようとしている理乃の動きは明らかに鈍り始めていて、安全圏まで間に合わなくなっていた。

にもかかわらず、時には相手が止まり、時には自身が転移し、どちらかだけで無理ならその両方でやり過ごしていた。

見たところ理乃が意図してやっているわけではなさそうだが、では敵か？　いや、それは不自然だろう。それならばシエオルが引き付けている方も使っているだろうし、だとすれば余所見^{よそみ}しながらではかわせまい。

おそらく理乃が無意識で発動させている、彼の能力によるものだろう。

今度は停止と転移を行わなければ直撃は免れない。そんな状態をシエオルは待っていた。

やがて。

今だ。

シエオルは理乃を襲う化け人に駆け出した。

俺も停止するか……？

抱いていた心配はその一つ。化け人の真後ろに到達できた地点でそれは杞憂であったことが判明。

赤い刃が孤を描き、化け人の本体を頭から二つに斬断する。

その切断面は滑らかで綺麗なものだった。

一泊おいて、血が流出する。

「次はどこからだ？」

突然化け人の身に起きた異変に理乃が啞然としている。

そんな彼の隣にいつの間にか移動していたシエオルは、状況をまだ飲み込めずに困惑しているのを承知で、けれどそれには構わず問う。

理乃は混乱しつつも次の出現位置を正確に告げ、それを受けたシエオルは彼に下がるよう指示しておいて自身は気配を悟られぬよう注意しつつ出現位置へ。

地面に亀裂が入ったのを確認すると真上に高く跳躍する。

そして、上空で待ち構えられているとは知らずに地上に姿を現して獲物を探す化け人目掛け、直上から刃をぶん投げる。

解き放たれた血刀は雷のよう^{いかずち}。

雷はその狙いを違うことなく化け人の脳天から体を一直線に貫いた。

刃を手放すと同時に右の手の平から、血刀の生成を終えてから今まで流れを止めていた血が思い出したかのように流れ始め、シエオルは地に向かって滴り落ちてゆく血を足場にして次から次へと飛び

移り、最後に宙返りを決めて理乃の傍に華麗な着地を決めた。

「終わったな」

「え？ あ、ああ……」

かけられた言葉に対する反応が鈍い。理乃はまだ少しばかり茫然としているようだった。

「行こうぜ」

理乃は前を歩き始めた彼の背を慌てて追いかけた。

第二十四話 時間奪取（後書き）

説明下手ですね……私。

第二十五話 封印された物騒なもの

「この足音……」

闇の中、ぴくりと反応したのは小さな影。

「間違いなく理乃殿ですな。それにあのお方の気配も感じるであります……」

発せられた声に、もう一つの影が応じる。

「ということは……」

「……発矢殿がいなくなってから、いつかはこうなるのではと覚悟はしていたはずでは？」

「そうだけど……」

「我等は我等の役目を果たさなければ。あのお方と発矢殿のために」

……なにより、迦唯……我等のかわいい妹のために」

「……うん」

人ならざる身の“二人”は来訪者を静かに待つ……。

「俺はここで待ってる」

例の罫だらけの建物を抜けて迦唯の家の前まで着くと、シエオルは突然そんなことを言い出した。

理乃はなぜと問うが、シエオルは見張りだと言い張るので仕方なく一人で玄関の扉を開いた。

しん、と静まり返った屋内。

「待ってたよ、理乃。ファウの言ったことを守ってくれたのかな？」
不意に足元から声が聞こえて、理乃は思わずぎよっとなる。

「……そんなに驚かなくてもいいのに。もしかして僕がいること自体忘れてたの？」

と、いつの間にか足元にいた猫　　ネアは落ち込んだ。

「い、いや……なんというか」

うなだれる猫になんといいか理乃は迷う。

「ネア殿。暗い中足元に忍び寄りついていきなり声をかければ驚くのも無理はないであります」

ファウがネアの隣に降り立った。

「えー。迦唯は違ったよー？」

「理乃殿は迦唯殿のように夜目が効くわけでも気配が読めるわけでもないのです。そしてそれよりも本題でありますよ。大体察しはついているのでありますが」

その代わりに予知できるんだけど、と言おうとして、先程気を抜いて予知を働かせようとまるでいいなかったことを思い出し、喉元まで出かかった言葉を呑み込んだ。

こちらへ、とファウはいつかのように理乃を先導する。

「あれっ？　確かこっちは……」

「うん。地下の武器部屋だよ。言ったでしょ。察しはついてるって」

「まず理乃殿にこれを……」

地下室に着くとファウが腕輪を持ってきた。

それは透き通った青色をしていた。

「これは……」

「見ての通りブレスレットだよ。迦唯のペンダントは持ってきた？」

「あ、うん……」

実はしっかりとあの時帰る前に回収していたのだ。ファウに事前に言い含められていたわけだが。

「じゃあブレスレットに宝石を取り付けて」

指示された通り、一箇所だけ何かをはめ込むためにあるような凹みに宝石を取り付けた。

「それを腕に填めたらこっちきて」

ネアは前回来たときに使った裏口の方へと歩き始めた。

そして裏口の対面へと歩を進め“それ”を前足で指し示した。

「あれを理乃殿に預けるであります」

三対の視線の先、

「あれは……」

そこにあつたのは刀。前に見たのとおそらく同一の物。

ただ、前回見たときより刀を覆う氷の量が明らかに少なくなっており、刀身を半径三センチくらい覆っている形になっていた。確か前は、もっと大きな長方形型のケースみたいだったはずだ。

それが今や無駄に太い鞘のようになってる。

あまりにも不自然な氷。

理乃は、これって本当に氷なのだろうかと首を捻った。

「刀のようなもの」だよ。本来は迦唯専用だから取扱には注意してね」

「あれを使えば理乃殿でも“そこそこ”の相手ならどうにかできるでありますよ。迦唯殿を助け出せたのなら、あれを迦唯殿に渡して欲しいのであります……」

「……わかった」

理乃は慎重に氷を纏う刃に歩み寄り、緊張の面持ちで柄に手をかけようとして

「あ、迂闊^{うかつ}に触ると氷像にされてしまうのであります」

反射的に腕を引っ込めた。

「さ、先に言ってくれ……」

「まあ、まだ封印は解けきっていないから、そのブレスレットをした方の手なら大丈夫だと思うよ。たぶんだけど」

「たぶん……？　じゃあそれ以外の部分がこの刀に触れたら……？」

理乃は不安になったので、できるかわからないが自分の仮定未来ブレスレットをしないまま触れた場合　を見ようと試みた。

「っ！」

……指先が触れた瞬間だった。灼熱の炎にあぶられたかのような

熱さが指先に、どころか掌全体に伝わった。

しかし掌は火傷というよりも、長い間氷水やら雪の中に手を突き入れたままにしていたかのような有様だった。

圧倒的な冷気が火傷に似た痛みとなつて理乃の手を襲ったのだ。じんじんと痺れて全く感覚はない。幸い動作には支障をきたしてはいないようだ……

理乃はその後も予知できないかと思つたが、無理だった。

これ、このまま触つたら手が……。一瞬でああたとすると……
…氷像にされるだけで済むのか？

「どうしたの？ 顔が真っ青だよ」

「嫌なものを見たからな……」

そして理乃はブレスレット有りの場合もやってみた。するとどうやらなんともなさそうだったので そつと、刀を手にした。

想像していたほど、この刀は重くなかった。

というより、自分の筋力でも片手で振るえてしまえるほど軽い。

理乃は「あれ？」と、意外そうな顔をした。

確かにこの刀は通常のものより遙かに軽いのだが、本来ならば理乃が片手で扱えるようなものでもない。徐々にだが、理乃の身体能力が向上し始めているのだ。

「……大丈夫みたい……だな」

「だからまだ封印は解けきつてないって言ったでしょ」

つまり封印が完全に解けると腕輪があつてもやばいってことか。

「封印ってこの氷か？」

「見た目も質感も性質もだいたい酷似しておりますが、正確に言えば氷ではないのであります」

「でも氷でしかないんだよね、このままじゃ。迦唯が使っているところを見ればどういふことかわかるかも」

「……？　ところで、これってどうやって扱うんだ？　普通の刀と同じなのか？」

「んー。とにかく一度振ってみて。絶対に僕たちの方に向けないでね」

言われた通りにすると、刃の軌跡上に青白い小さな粒が大量に出現した。

霧のように浮かぶそれはよく見ると、一粒一粒が金平糖のような形をした結晶であるのがわかる。光を反射し、きらきらと輝いて見えて綺麗だ。

「それを斬り飛ばすのであります」

ファウに指示され、理乃は刀をさつきと同じように振る。青白い粒の集合した空間を斬り裂くと、澄んだ音色がした。

思わず効き惚れてしまいそんな清涼感ある静かな響き。昔聞いた、穏やかな潮騒を連想させた。

だがそんな音色とは裏腹に、実際起きた現象はというと弾き飛ばされた粒が当たったところに極小の、けれど深い穴ができあがっていた。さらに、その小さな穴の周囲数センチは凍りついていた。

壁に穿たれた、無数の小さい穴。

穴の回りそれぞれにできた氷同士は結合し、凸凹した一枚の氷板を作り上げていた。

「ちなみに振った後にできる粒に当たっただけでも相手はあの壁みたいになるから。もちろん、その刀を相手に触れさせられれば氷像にできるよ」

「……………」

少々物騒だが、使えそうなのでその点はあまり気にしないことにした。

第二十六話 入口

屋敷から出ると、シエオルは瞼をきつく閉じていた。
なにかを堪えているかのように。

「シエオル……？」

「……ん。武器の調達は済んだようだな」

理乃の顔を見るやいなやシエオルは歩き出す。

理乃が持ち出してきた刀身氷漬けの刀についてシエオルは何も訪ねなかった。

「とにかく一度ギルドに戻るぞ。硯の居所を調べているはずだ。奴の居所がわかるまで時間があるだろうから、少し訓練しておけ」
結局刀について何かを問うどころか、一瞥することすらなかった。

屋敷から戻って四日後。

ギルドの裏手で理乃たちはシエオルの個人的依頼による協力者を待っていた。

その協力者は単独でギルドと機関双方よりも早く硯の居所を見つけたらしい。

シエオル曰く、万が一先に機関が発見した場合、迦唯いわが生きていたとしても放置あるいは殺される可能性が高いそうだ。

ギルドが発見した場合、迦唯に劣等感や後ろ暗い感情を持つ者が何をしてくすかわかったものではないとのこと。

「……来た」

シエオルの視線の先を追うも、理乃の視力では黒い影にしか見えない。

理乃は能力を使うことにした。

こちらに歩んでくる人影の未来を見る。すると

「な？！ あ、あいつ……！」

脳裏に浮かび上がった映像、そして人物。その人物の姿は理乃の知っている人物だった。

白衣を着た鋭い目つきの若い男性　　佐祭系は理乃の姿を目に留めるなり、

「……………もう一人、とはあなたのことでしたか。……………シエオル、彼は使いものになるのですか？」

と、冷めた目を理乃に向けた。

理乃は彼自身でも不思議に思うくらいなんとも思わなかった。

「佐祭系……相変わらず厳しいな。確かに戦闘要員としてはまだまだ問題有りだ。だが重要なのはそこじゃない。違うか？」

シエオルは余裕を持って問いかける。

「……………む。……………しかし少々荷が勝ち過ぎています。さすがのあなたでも一人では無理でしょう」

何かを思案すること数秒、佐祭系はどこか納得したような表情になったと思いきや、すぐにそれは渋面が変わった。

「だからお前を呼んだんだ」

「……………私の仕事は子守ですか」

佐祭系は億劫そうに、だが子守のところだけは強調して理乃を挑発する。

理乃は何か言いたそうな顔をしたものの、何も言わないでいた。

「迦唯が動ける状態とは限らないだろ。いくらあいつが軽いからって、背負ったまま戦う気か？　あんたは露払い。捕われのお姫様を連れ出すのは王子様じゃねえとな」

「少しはマシになったようですが……………その王子様とやらは随分と頼りない」

これにはさすがにむっときたのか、理乃は「頼りなくて悪かったな」と小さく呟き、佐祭系を睨みつけた。

「そうだな……………いつそお前が理乃を背負ってやれば、白衣に乗ったおうわっ！」

白衣に乗った王子様とでも言おうとしたのだろう。それに気付い

た二人は言い切られる前に行動に出た。

『ふざけるな!!』

理乃と佐祭系、二人の怒声が重なり、同時にシエオルの両側からそれぞれの獲物が襲いかかっていた。

背後の壁に突き刺さった氷の弾丸と黒い針を見て今のは本気で殺すつもりだったことを思い知ったシエオルは顔を引きつらせている。「まてまて、ちよつとした冗談だ」

慌てて弁解しようとするシエオルに追撃をかけようとお互いに同じタイミングで一步踏み出し 両者とも無言でお互い顔を見合わせ、刹那の内にそれぞれ逸らした。

「ちつたあ仲良くしろよ」

シエオルは先行きが不安になったのか、ため息をついた。

「ここが入口です」

佐祭系に案内されたのは、蜘蛛の巣のような構造をした無法地帯の街並みの南端、最外周にある地下区画への入口だった。

「ここは……？」

ギルドに近い、比較的安全とされる内周すら滅多に出歩かせてもらえなかった理乃は、その存在を知らなかった。

「ここから先、地下には無法地帯カースでも特にやばい奴らが潜んでいる場所だ。しかも道は複雑に入り組んでいて、上下にも分岐している。何も知らずに入ると自分の位置がわからなくなって抜け出せない迷宮さ。……それにここには化け物が巣くっている」

「化け人じゃないのか？」

「化け人はまだ、探せば人らしいところが残っている。しかしここにいる化け物は……」

「オルガン機関の廃棄物です」

佐祭系が後に続く言葉を口にする。

「廃棄物？」

「向こうには頭のネジが何本もぶっ飛んだ狂った野郎が何人かいる。そいつらは獲得者以上の力を持った、意のままに操ることのできる生きた兵器を作ろうとしてるのさ。合法地帯の権力者に依頼されてな」

つまらなさそうに告げたシエオルだったがしかし、その目つきが一瞬ぎらついたものに変わったのを理乃は見過ごさなかった。

シエオルが、怒ってる……？

「な、なんでそんなことを……」

「元々、無法地帯カースや合法地帯ロウズという区別はありませんでした。ある一つの巨大な組織によって後から区別されたのです。無法地帯というのは組織の干渉を拒んだ者たちが住む領域のことでした。合法地帯は組織に従属することにした者たちの領域でした。しかし時を経るにつれて二つの領域の在り方は変化し、無法地帯は今のような姿に、そして合法地帯では組織を従えようと目論む者が現れ始めたのです」

今度は佐祭系の言葉をシエオルが引き継ぎ、

「んでだ。そいつらは機関に兵器製造を依頼したつてわけさ。こつちなら何をしても勝手だからな。……ここは無法地帯カースにおける巨大なゴミ捨て場みたいなもんだよ。機関で行われた研究の失敗作やらなんやらも多数捨てられている。元々の製造目的にもよるが、今さっき言ったような生物兵器が目的で作られたものの失敗作は、処理が面倒だった場合は生きてまま地下区画の奥深くに捨てられることがよくある」

「そいつらの一部は繁殖能力を持っています。あるいは後から、何かのきっかけで変異して繁殖能力を得たものもいますね。化け物とは、そういった兵器の失敗作などのことですよ」

さらにまた佐祭系が後を引き継いだ。

佐祭系はどうやら、質問には真面目に答えてくれるようだった。

「理乃……万が一そいつらが現れたら躊躇うなよ。むしろ殺してやった方が……」

むしろ、からは声があまりにも小さくて理乃は全く聞き取れなかった。

「私からも忠告しておきましょう。硯も頭のネジがぶっ飛んだ連中の一人です。よって、迦唯君が生きていたとしても、人としての原形を留めているかはわかりません。もし、もしも迦唯君が化け物にされていた場合は……」

「……佐祭系。そつから先は俺が言うべきだ」

言葉と視線で佐祭系を制したシェオルは、理乃にとって信じられないことを口にした。

「その時は、迦唯を殺せ」

第二十七話 潜入

地下に降りてすぐ、充滿しているあまりに酷い悪臭に理乃は顔をしかめるだけではなく、開いている方の手で鼻を塞いだ。

地下は非常に暗く、所々に誰かが設置した電灯が申し訳程度に周囲を照らしていた。

そんな中、シエオルと佐祭系は見えているのか、その足取りに迷いはなく、ある場所を目指してひたすらに突き進んでいる。

理乃はそんな彼らの後を、能力を使つてなるべく正確に辿つていった。

そうしていると時々、どこからか不気味な唸り声が聞こえる。

どこか悲しげに、どこか苦しげに。

化け物のものだろうか。

さらに、地下に降りてからというものの、常に誰かに見張られているような気がするのは気のせいではないのだろう。

薄く照らされた中、躓きそうになりながらもなんとか早足の二人を追う。

躓きそうになったりするのは足下になるべく視線を向けられないようにしているからなのだが、理乃としては足下を見た方がよっぽどまづいことになるので、多少歩き辛くともそうするほかない。

どんなまづいことになるかというところ、地下に入つて最初の内は足を確かめながら歩いてきた理乃だったが、そこに転がっていたもののバラバラにされたらしい人体の一部、何かの動物の死骸、黒い水溜まりに湧く見たこともない異様な虫 などは刺激が強すぎたらしく、激しく嘔吐した後気を失つてその傍にダイブすることになつてしまつたのだ。

シエオルが気付いていなければ今頃は……。

時折それを想像するのか、理乃は度々背筋を震わせていた。

というわけで、理乃は極力見ないようにしている。

やがて、

「この先だ」

蟻の巣のような地下をどれくらい進んだのかわからなくなってきた頃、佐祭系が立ち止り、そう告げた。

佐祭系が指示した場所は一見するとただの壁のようだったが、

だが。

壁に背を預けた佐祭系は少し強めに背にした壁を叩く。

すると、壁だったものの一部が回転し佐祭系の姿を向こう側へと運び去った。

「……誰かさんの家の手前にあるものを思い出すな」

「………こういうのって、流行ってるのか？」

二人して同じようになんともいえない表情になり、佐祭系に倣って壁を叩く。

そして、三人は無事潜入した。

壁一枚隔てた向こうは別世界のようだった。

清潔な乳白色の通路。先ほどまで鼻を麻痺させていた悪臭は全くない。

そして何よりも、明るい。どうやら天井が一面照明器具らしい。

一体どこからエネルギーを得ているのだろうか。

理乃は眩しさに目を閉じ、腕で覆った。

その直前視線を走らせると、シエオルと佐祭系は即座に反応して目を庇ったのか、腕が目元にあった。

入口に番人でもいるのかと思いきや身構えたが、何かが襲い来る気配はなく、未来を見てもそんな様子はまるでない。

だがそのおかげでゆっくりと目を慣らすことができた。

通路の先は一本道なのか、分岐しているようには見えない。

目に見える範囲には監視カメラといった類はなく、生物の気配も

なかった。

「見た感じは何もなさそうなんだが……。理乃どうだ？」

シエオルに問われるまでもなく、未来視して罨などを探っていた理乃は静かに首を振った。

「さっぱり。仮に歩いたとしても何も起こらなかったよ。と言つてもこの先の扉の所までだけだね。この位置からそれ以上先を確かめるのは、今の俺の力じゃ無理」

「そうか……。なら、とりあえずその扉まで進むしかないな。だが油断するなよ？ 万が一つてこともあるからな」

「わかった」

「……シエオル、どういうことですか？ 彼は何を言つて……」

二人の会話を黙って聞いていた佐祭系がいぶかしげな視線を向けた。

「あー。そついやまだ話してなかったな。佐祭系。こいつは……理乃は獲得者だ」

「そんなことは予想がついています。私が知りたいのは……」

「第一段階の短期未来予知に仮定未来予知。第二段階に至つては相手の時間を数秒だが奪うことができ、もしくは自分を数秒分余計に行動させ、やろうと思えばその両方を同時に実行する。今のところそついう能力だ」

「……！！！」

佐祭系はその内容に絶句した。

「まさか……彼は……」

佐祭系がシエオルに耳打ちした。

「ああ……多分な。どうしてこんなところにいるのかはさっぱりだが。なあ佐祭系、これは偶然だと思うか？」

同じくシエオルも、どうしたのかと首を傾げている理乃を余所に、肝心な部分を言葉にせず佐祭系にだけ聞こえるように話す。

「……そつ願いたいですね。しかし、そうですか。どうして彼が狙われるのかと疑問に思っていましたか、それならば……。ならば尚

更、彼をこんなところに連れてきたのは余計にまづかったのでは？」
「そうでもない。硯すずしは迦唯が**だと知らない様子だしな」

「……彼の持つているものを、本当にあの子に渡す気なのですか？」
「ああ。二人一緒なら問題ないだろう。元々、あの刃の封印が解かれれば互いに惹き合うようにできているが、そんなことは関係なしに二人は互いを意識し合っているようだからな」

「そうですか……」

「……後のことは、お前と麻莉亜に託す」

そう最後に、一方的に告げて会話を打ち切ったシエオルは奥へと進み始めた。

「理乃君……行きますよ」

溜息を一つした佐祭系も、その後を追う。

二人の様子がどこか変だと思いつつも、理乃は通路の奥へと歩み始めた。

扉の前にはすぐに到達した。

理乃はその先を能力で見ようとしたが

「……あれ？」

「どうしました？」

「……未来視できない」

「なるほど。能力の無効化か」

シエオルは納得したように頷いた。

「どうする？」

「どーするもこうするも、行くっきゃないだろう」

「ですね。それに、今の硯にとっては発矢が最高戦力でしょうし、この扉の中まで力を無効にするようなことをすれば、何かの拍子に化け物が入り込んだときに処理に手間取る恐れがある以上、扉にだけ無効化できるような仕掛けを施していると思われます。もっとも、硯が使い捨てる駒を失った今だからこそ言える話ですが」

「……そんなの、初めから問題じゃないだろ」

「そうだな」

「そうですね」

理乃の言葉に二人は頷いた。

扉を潜ると、そこは広い空間だった。

正面と左側にはそれぞれ通路が伸びている。どっちに行けばいいのだろう。

いや、それよりも

部屋の中央。待ち構えていたかのように佇む人影に三対の視線が集まる。

「発矢……!!」

理乃の顔が強張った。そして手にした刃の柄を強く握りしめる。

あの時切り落とされたはずの片腕は修復され、元通り何事もなかったかのように存在していた。

シエオルは身構える理乃と佐祭系を手で制し、静かに問う。

「理乃……どっちだ？」

「多分、正面の方」

「そうか」

じつと発矢を見つめながら、ナイフを懐から取り出したシエオルは、それを自らの右手の掌に突きたてる。下に向けられた手から滴る血が、一振りの刀を形成してゆく。

「迦唯が無事か、二人で先に確かめて来い」

「……わかった」

正面、発矢の背後にある扉へ向かって二人は駆け出す。

発矢は二人を迎え撃たんとし

「待てよ」

発矢は静かに投げかけられた声をなぜか無視できずに動きを止め、それを発した相手へと向き直る。

シエオルは通路の奥へと消えてゆく二人の背を見送りつつ告げる。

「お前の相手は この俺だ！」

宣言とともにシエオルの姿が霞み、赤い軌跡が幾筋も発矢を襲った。

第二十八話 発見

理乃たちは背後を顧みること無く正面の通路に到達した。

能力を使用し、この先に罠などが無いことを確かめながらそのまま走る。シエオルの方は一度発矢と戦っているところを見ているので、あまり心配はしなくていいだろうと理乃は考えていた。

問題はあの左側の通路だ。“左側の通路に自分が進んだ”という仮定未来では、あの先には一つしか部屋がなく、その中では何者が一人、端末に向かい作業をしていた。

仮定未来で見ることができるということは、それほど離れていない距離にあるのだろう。

理乃はその何者かを気にしていた。いや、“何をしているのか”が気になっているのだ。

予感はいいつを今すぐどうにかしろと告げている。しかし、理乃は迦唯を優先した。

理乃のそもそもの目的はあくまで迦唯の救出だからだ。

やがて正面に扉が現れた。

来る途中にあったのと同様に、能力が無力化されるようだ。この先の様子を窺うことはできない。

ただ、今回の扉はロックされていた。

扉の脇に0から9までの番号が書かれたパネルが取り付けられている。

これにも無効化の仕掛けが施されていた。

どうやら扉を開くには予め決められた番号を打ち込まなければならぬらしい。

だが、そんな番号など知るはずも

「正解の番号には心当たりがありません」

佐祭系がパネルの数字を幾つか押すと電子音が短く鳴って、扉のロックが解除された。

「あ、開いた……」

理乃はどうして心当たりがあったのかを聞こうと思ったが、扉のロックが解除されるなり、「行きますよ」

と、佐祭系はさっさと先に進み始めた。

そのせいでタイミングを逃してしまい結局聞きそびれる。

しかし今は迦唯だと自分に言い聞かせて先に進むことにした。

扉の先は少しだけ通路が続いていて通路の奥は小部屋のような。

そして、その部屋の中央。天井と床から伸びた鎖に繋がれ、宙吊りにされた少女の裸身があった。

「迦唯！」

姿を目に留めるなり名前を呼び、走り寄る。

迦唯を拘束する鎖に氷片を飛ばし、凍った直後に後方から飛来した黒い針が貫き砕く。

束縛から解き放たれた迦唯の体が床に落ちる。

その寸前、迦唯の元へ到達していた理乃はその体を正面から受け止めた。

「う……あ……？」

「迦唯！」

よかった。生きていた。と、理乃は安心しかけた。

だが。

「まだ安心はできません」

佐祭系は迦唯をとりあえず通路まで運び、横たえる。

かなり衰弱しているが、外見的にはどこにもおかしいところはない。

そう、折れていたはずの右腕も、胸にあった傷もなぜか治っている。

とりあえず、一応持ってきておいた彼女の上着をかけてやる。

「迦唯……」

「ん……」

呼びかけると、僅かに反応する。辛うじて意識を保っているといったところか。

「……意識はあるようですが、これは……」

「これは、って何だよ？」

「表面上は以上がありません。ですが、体の内側は見た目に反して酷い状態です。そして心も……このままでは壊れてしまつかも知れませんが。彼女がここまで弱った姿を見たことはありません」

「そんな……」

「急いの方がいいでしょう」

これを今の迦唯には渡せないな。

手にした刃に目を落とすこと数秒、佐祭系に手伝ってもらい、迦唯の軽い体を背負う。

さすがに抱いたまま（いわゆるお姫様抱っこというやつだろうか）で動くのは動きづらい。

そして来た道を引き返そうとした。

「なに……を、しに……き……たの？」

一歩踏み出すと同時に、弱々しくも刺々しい声が理乃の耳みみをうつた。

「助けにきた。助けられてばかりだったから」

急に恥ずかしくなって愛想なく答えると、耳元で小さく「そう……」「という啖たんきが聞こえた。

「わたし、はい……から……見つからない内に、早く、帰りな……さい」

迦唯は途切れ途切れに、やっとのことで告げる。

しかし、理乃には聞き入れるつもりなど全くない。

命を賭けて守ってくれたこの少女を、今度は自分が守る。そう決めたから。

「……くっ、うっ、あ、あああっ!!」

突然、迦唯が先程までとは違ってかわった大声を上げた。

「か、迦唯?!」

驚いた理乃は思わず足を止める。

「ああっ……く、り……の。わた、しからっ……はなれ、て……」

「どうした……?」

「おね、がい……はや……く」

隣の佐祭系が何かに気付いた。

「いけません。はやく彼女を床に!」

慌てて指示に従うと、どこにそんな元気があったのか迦唯は、お腹を抑えてのたうち回った。

そして

「ああああああああっ!!」

彼女は絶叫した。

絶叫と同時に彼女の身に起きた異変。

その結果が十数個の氷の塊だ。その中にはバラバラにされた何かの死骸が見える。

そう、生物の死骸だ。生物と言っても、普通のそれではない。それは、化け物の子供だった。

「……おそらくもうあのようなことにはならないでしょう。………
…?」

迦唯の体を念入りに調べ終えた佐祭系は、硬い表情でそう告げた。全く彼の予想していない、いや、考えないようにしていた事態が起こったためだ。

少しだけ悔いる。こういう可能性をわかっていた以上、なぜさつき調べなかったのかと。

一方理乃は何も言わず、気を失いどこか安らいだような表情でいる迦唯の頬を優しく撫でた。

佐祭系は、おそらく意識があっても嫌がらない、むしろ内心では照れて無表情を装っているだろう迦唯の姿が想像できたので、あえ

て止めなかった。

さすがに五年も付き合いがあれば、少くらしい迦唯という少女のことはわかる。

シエオルから聞いた話によると、迦唯は自分から理乃と行為に及んだというのだから相当気に入っているのだろう。

迦唯にとって行為というのは、自分のトラウマと向き合うことだ。彼女は娼婦だが、常に受け身であり続けている理由がそれだ。確かに求められれば、仕事だからと無理矢理割り切るだろう。だが、何も言われなければ決して自分からはしない。

迦唯はそれを行う程度には理乃のことを好んでいるだろう。本人の自覚は別として。

といつても、迦唯にしてみればそれは何かをプレゼントしたりするような意味合いで行ったのだろうか。

理乃は男……男が喜びそうなこと……行為、とでも考えたはずだ。迦唯は他の方法を知らないだろうから。

果たして理乃はそのことに気付いているのだろうか。

今はそんなことを考えている場合ではありませんでしたね…

…。

佐祭系は我知らずしていた思考を切り上げる。

「今は急ぐべきときです。行きますよ」

佐祭系が促すと、理乃は静かに頷いて迦唯を再び背負う。

そして二人は、シエオルの元へと急いだ。

第二十九話 二人の死

シエオルの戦う姿を見るのは二度目だが、一度目とは何かが違う。た。

どこかで見たことがあるような……。

理乃はどうしてか既視感を覚えたのだ。

けれどそれを深く考えていられるような様子ではなかった。

なぜなら理乃の目から見ても、シエオルは明らかに押されていたからだ。

シエオルの刃がいくら発矢の身を切り裂き、手足を断ち切ったとしても即座に修復がなされ始める。

どれだけ傷を負わせてもすぐに回復してしまうのだ。

発矢の第二段階能力なのだろうか。それとも化け人としての作用か。あるいは、その両方。

硯が何かをしたということも考えられる。能力を無効にできるのだし、その可能性もありだ。

理乃はここでようやくあることを疑問に思った。

どうして能力を無効化できるのか。いや、そもそもどうして能力が使えるのか。

獲得者とは、どういう存在ものなのだろうか。

しかし今はそんな場合ではないと言いつ聞かせて、思考を切り替える。

ただ、それでも一つだけどうしても引つかかることがあった。

扉に能力を無効化する仕掛けを施しているのに、発矢に対しては施されている様子がないのだ。単に発矢の能力まで封じられてしまふというだけのことなのかもしれないが。

そんな発矢に対してシエオルといえは徐々に攻撃を避けきれなくなっていた。生傷の数が交錯する度に増えている。

なぜだかシエオルの動きが前見た時に比べて遅く感じられた。

自分はほとんどあの時と変わっていないつもりなのだが、少しはマシになったと考えるもいいのだろうか。

シエオルをよく観察してみると、肩で息をしていた。明らかに消耗している。

なんだ……。そりゃ動きも鈍るよな……。

そう納得しかけた理乃だったが、

しかし本当にそれが理由だろうか？

どうにも腑に落ちなかった。

これではいずれシエオルの体力が尽きてしまう。けれど、下手に手出しをするわけにもいかない。未熟な自分がそんなことをすれば、状況を悪化させかねない。

それにしても。

あの時は圧倒的に見えたのに。それがどういうわけか、二人の立場はまるで逆だった。

「まずいですね……」

天井、床、壁。部屋全体を素早く移動し続けながら互いに隙を探しているシエオルと発矢。

黙って見守っていた佐祭糸が呻く。

ただ、彼が見ていたのはシエオルの手だった。

有利不利についてじゃない？

不審に思った理乃は、どうにかシエオルの手を見ることに成功した。

え？

見間違いなのだろうか。

シエオルの手は骨が浮き出て、しかもしわだらけだった。一気に年老いたかのように。

どういうことだ……？

わけがわからず首を捻る。

同時に、頬を風圧が掠めた。

「！！！」

理乃のすぐ横を何かが高速で通り過ぎたのだ。
それを認識する前に、部屋全体が震えたような錯覚に襲われた。
岩を崖下に叩き落としたかのような音が響きわたる。
背後をはつと振り返ると、シエオルが壁に叩きつけられていた。
理乃は壁が人型に陥没している光景に戦慄した。

マジかよ……！

「シエオル！！」

床に倒れこんだシエオルに慌てて駆け寄ろうとする佐祭糸を、
「手を出すな！！」

怒鳴りつけるように言いながら、ゆつくりと立ち上がる。

そんな隙を発矢が見逃すはずはない。

追ってきていた発矢が理乃たちを無視して駆け抜け、シエオルの
腹に硬化した拳を打ち込んだ。

「ぐおおおお……！！」

目は見開かれ、口から吐き出される大量の血液。

「シエオル！！」

理乃は悲鳴のように叫んでいた。

思わず一歩踏み出そうとして、

「……っ、だか、ら……手え出すな……っつてんだろっが！」

腹の底から絞り出すような声の迫力に押されて踏みとどまる。

血刀が発矢の背中から出現する。

殴られながらも突き出されていた刃が発矢の体を刺し貫いていた。
しかしシエオルのささやかな反撃はすぐさま修復されて、その痕

跡すら残らない。

よるめくシエオルの頭蓋に、止めとばかりに振り下ろされる凶悪
な鈍器と化した発矢の腕。

これは！

そのとき理乃が見た未来は。

辛うじて発矢の心臓に刃を突き立てたのは、同時だった。

「やっぱ……こう、なるよ……な……」

シエオルは最後に、能力を解放した。

能力によって発矢に突き立てられた血刀はもとの血液に戻り、発矢の体内を内側から完膚なきまでに崩壊させてゆく。

発矢は今度こそ、その生命活動を停止させた。

心臓を貫かれたシエオルは、その姿を青年のそれから、発矢とさほど年齢の変わらない男性のそれへと変え始めた。

その姿は、幼き日の記憶にあるものと重なってゆき。

「……………！！」

迦唯は、運悪くその瞬間の全てを目の当たりにしてしまったのだ。彼女にとって、悪夢でしかないその光景を。

第二十九話 二人の死（後書き）

筆力があまり上がっていない（というよりむしろ下がってる？）の
は気のせいではありません（あ OTZ

第三十話 明かされたこと

「……降ろして」

「……え？」

「おねがい……降ろして」

理乃はやや躊躇った。しかし、今にも消え入りそうなほどにか細い声が震えていたことと、顧みた彼女の顔が泣きそうなそれだったこともあり、そつと床に降ろした。

すると迦唯は這って死した二人のもとへ向かった。

シエオルと発矢の遺体を並べた佐祭系は理乃に批難の視線を送る。それは、どうしてもつと二人の近くに降ろさなかったのか、と言っている気がした。

そこで理乃はようやく迦唯がどうしたかったのかに気付いた。

理乃の背から降ろしてもらった迦唯は、立ち上がるだけの力も残っていないので、床を這って二人のところへ向かった。全身を犯す痛みという痛みを堪えながら。力の入らない四肢でゆっくりと。

彼等の元に辿り着いた迦唯は、シエオルの顔を見て茫然となった。

「おとうさ、ん……？」

覗き込んだシエオルの顔は、シエオルとして見知った顔ではなく、父 染火せんかのものだったから。

「ええ。その通りですよ、迦唯君。あなたの父親、染火です。もうおわかりでしょうが、シエオルなる人物はそもそも存在していません。染火の能力と私の技術、麻莉亜の能力によって染火は姿を変え、声を変え、シエオルとして活動していました。あなたの目の前で殺された、その翌日から」

迦唯は「どういうこと？」と、蚊の泣くような声でたずねた。

「確かに迦唯君の目の前で染火は殺害されました。知っての通り、

“あなたを庇って”。我々が染火の遺体を回収したのはあなたが連れ去られてしまった後のことです。そして、“前もって染火に頼まれていた”通り、彼の身に様々な処置を施し、どうにか期限つきで蘇らせたのです。危うくはなりましたが、この結末はシエオル……いえ、染火の予想通りです”

「最初から、佐祭系も発矢も麻莉亜も……みんな知ってて黙ってたのね……」

ようやくわかった。どうして彼が明らかな偽名を、シエオル……黄泉を意味する言葉を名乗っていたのかを。

とつくの昔に一度死んでいたのだ。

「彼に黙っているよう、言われていましたから」

「娘のくせに気付けないなんて、だめな子よね。だから捕まったりしたんだわ」

ほんとうに……なんて、ばか。でも、気付いたとしても、どの道……。

「そう思うのなら、そうなのでしょう……」

佐祭系は慰めようとせず、普段と同じような調子だった。

まるで、自分は何も感じていないかのように。

迦唯は、彼が私情を挟むことなく自分の役目を果たそうとしているのを知っていた。

そのくらいには佐祭系の性格を把握している。

だから彼女も私情を挟むまいとしていたが……ふと、あることに思い至った。

私……知らない人とは何度もやったけど、この二人とは一度もしてない……。

そして迦唯は体に鞭打って、二人の遺体相手に行為を始めた。

せめて……せめてこれくらいは……、しても、いいよね……？

成り行きを見守っていた理乃だった。

が、何を思ったのか、迦唯は急に力を振り絞るようにして動きだ

し、そして何を始めようとしているのか察してしまった理乃は慌てて体ごと向きを変え、耳を塞ぐ。

佐祭糸といえば、止めるでもなく、やれやれと肩をすくめただけだった。

……しばしの間、あたりには淫隈な音が響いていた。

理乃は迦唯が心配だった。けれど、今は好きにさせてやりたかった。

佐祭糸もそうなのだろうか。口出しする気も止めるつもりもないようだ。

耳を塞いで、そちらを見ないようにしていると、どうしても想像してしまつので、理乃は意識をもう一つある通路先の部屋に向けた。能力で探ると、作業をしていた人影はなくなっており、見知らぬ男が通路を悠然と歩いている光景が浮かんだ。それが現実のものとなるのは……2分36秒後。

見てくれは強そうにない。むしろ貧弱だ。

発矢に加勢することがなかった点を考えると、戦闘には向いていないのか。

それとも特殊な何かがある。例えば獲得者。あるとしか考えられない。もしくは、まだ何か他の戦力を有していると見るべきか。

今理乃が見ている対象は通路であつて男ではない。故に、男が何をしでかすかまでは見えない。

思考する存在ものでなかったのなら、もう少しわかることもあるだろう。

しかし相手は人。自分で考えることを放棄した人形のごとき相手でないかぎり、それを対象としない未来視ではせいぜい、いるかないかくらいしか判明しない。

やはり正確な未来視には対象となるものを視界に入れる必要がある。

残り時間、1分17秒。

男が通路から姿を見せたその時が運命の分かれ道になるだろう。理乃は行為に没頭する迦唯を見ないようにしながら佐祭系のもとへ。

現れるであろう男の存在を告げる。

「おそらく硯すずりでしょう。彼自体にたいした戦闘能力はないはずですが……発矢が倒され、手駒を全て失ったでしょうに。今更一体何を

……」
二人して眉間にシワを寄せる。

残り時間32秒。

「っ！」
理乃の頭を突如として刃物で刺し貫かれたような激しい痛みが襲った。

「どうしました?!」

頭を抑えて苦悶する彼の急な異変に佐祭系は焦る。

「っ……なんだ、これ……。すごく、嫌な感じが……」

そして、

嫌な感じ? と佐祭系がたずねようとすると、部屋が、地下全体が揺れに襲われ始めたのは同時だった。

「地震?」

「違う……これは……!」

残り時間、0。

ある程度頭痛が治まったらしい理乃がその先を告げる前に、もう一つの通路から男が姿を表した。

第三十話 明かされたこと（後書き）

サブタイトルを考えるのに一番悩んでいるような気がしてきました……。話の区切りをずらしているせいなんですけどね。はい、自滅です。

第三十一話 男の意図（前書き）

今回もいろいろとミスが多いかもしれません……orz

第三十一話 男の意図

白衣を着たそいつは、床まで届くやけに長い髪が印象的だった。揺れの中、理乃は男を対象に未来視を試みた。だが、視界には現在^ましかない。

まさか。

「ふん。あいにくと僕の体には能力を無効化する仕掛けを施しているんでね。君の予知は無効だよ」

男はこちらの行動を見越していたようで、こちらがその可能性を口に出すよりも先に告げた。

「作るのにえらく時間がかかったよ？ 獲得者に共通して現れる変化を調べるのも、それがどうして特殊な能力を発揮させるのかを解き明かすのも、そしてそれをどうすれば無力化できるのかも、全てを見つける研究は本当に大変だったよ」

彼はそこで言葉を区切る。そしてふと思い出したかのように、「ああそういえば、そこで忙しそうなお前はすごいね。散々痛め付けたあと化け物達に輪姦^{まわ}させて子孫を作ってもらったのに、まだそんなことする元気があるんだ？ まあ確かに、外見からわかる怪我は全て治したんだけどね。痛みだけ残して。でも胎内は知らないよ。ほっといたから」

そう付け加え、禍々しい笑みを形作った。

安い挑発だった。

それにあえて乗った佐祭系は黒い針を三本、男に向かって真っ直ぐ投擲する。

両目と首を狙ったそれらはしかし、

「?!」

男の少し手前で何も無い空間に突き刺さり、一瞬その場で止まっ
てから床に落ちた。

「はい、残念」

あれは、迦唯の！！

今起こった現象は、現れた男の存在を完全に無視して己が行為に集中している少女のものと、いささか範囲が狭いようだがまるで同じものだった。

驚愕し目を見開く理乃を尻眼に、佐祭系はさして驚いた様子もな

く、

「硯……やはり貴方は……」

初めから、この結果を予想して攻撃したかのような口ぶりだった。

「そういうことさ。佐祭系」

そういうこと、とはどういうことだろうか。

男 硯と呼ばれたそいつは、まるで旧友の名前を呼ぶかのような親しみを込めた声音で、佐祭系の名前を呼んだ。

「こいつが……硯。佐祭系。あいつと……硯と、知り合いなのか？」
理乃は信じられないという面持ちで彼を顧みる。

すると、

「ああ、そうだ。昔の仲間だ。もっとも……」

「?!」

佐祭系の話方が、あの時 迦唯と共に彼のもとを訪れた際、理乃に対してされたものと突然同じになった。

雰囲気も、どちらかというと伶俐なそれから、獯猛な獣といえるようなそれへと切り替わっている。

そこに理乃は、激しい憎悪の色を見た。

そして、さらに気になるのは、昔の仲間ということ。しかし佐祭系の様子からみると、とてもじゃないが友好的な関係にあるようには見えない。一体どうということなのだろうか。

「……も、もっとも？」

「所詮過去のこと。今となっては敵……そう、敵だ」

佐祭系は憎々しげに吐き捨てた。

「敵、ねえ。君だって僕とさして変わらないじゃないか。彼女に麻莉亜に君は何をしたのか、忘れたとでも言うのかい？」

それをまるで意に介した風もなく告げ、口の端を吊り上げる。嫌な笑みだ。

「だまれっ!!」

怒気も露わに叫んだ佐祭系に対して、硯は軽く肩をすくめただけだった。

「おー怖い怖い。自分の愛する女性を己の実験の材料に使った男はほんと怖いね。君も　理乃君そう思うだろ？」

「え？」

交わされた話の内容を整理できず混乱していた上、突然話を振られた理乃は一瞬呆けた。

「ふむ。まだ把握できないようだね。ならば本人に聞いてみるといい。自分が昔何をしたのか」

同類……じっけん、だい……麻莉亜さん、を？　愛する………だつて？

「どういう、ことだ……？」

佐祭系は黙したまま答えない。

そしていつの間にか、先ほどの揺れは収まっていた。

「はつ。……話せるわけないよねえ。まあそんなことはどうでもいいんだ。僕は君に一つだけ聞きたいことがあったからわざわざ出向いたんだよ。なあ、佐祭系。君はどうしてここにいるのかな？　今更そこにいる知り合いの小娘一人くらい、どんな目に会おうが関係ないだろう？　それともなんだい、償いのつもりかい？」

「確かにただの顔見知りさ。だが、あの娘は……迦唯は「知っているさ。麻莉亜のお気に入りの人形だろう？」

「人形……っ！」

理乃は硯の酷い言いように憤る。

「硯、貴様！」

どうやら佐祭系にとっても聞き捨てならなかったらしい。

「君があの子に肩入れする理由なんて、麻莉亜がらみくらいなも

んさ」

「くっ……」

だが、佐祭系は凶星を突かれていたので押し黙らざるを得なかった。

「さて、僕はもう一つの目的を果たしてさつさと場所を移すですよ。君に見つけられたからには、ギルドや機関オルガンの連中が来るのは時間の問題だからね」

「もう一つの目的……?」

理乃が気になってつい口にする、

「ああそうさ」

硯は満面の笑みを浮かべた。

ぞくりとした。とてつもなく嫌な予感がする。

「姿を見せる。ヴェイルデール（喰らい取り込むもの）」

そんな理乃を嘲笑うかのように硯は名前らしきものを声高に告げた。

その声に呼応するかのように低い唸り声が硯の背後から重く響いてきた。

「な……!」

「これは……!」

硯の背後の風景が歪曲する。

そこに、まるで風景に溶け込むようにしてある巨大な存在の姿を理乃たちは目にした。

「開発コード、S46573D」

硯のその言葉に、過剰とも思える反応を示した人物がいた。もちろん佐祭系だ。

「馬鹿なっ！ それは機関オルガンの長が開発を取り止めさせたはず」
驚愕と畏れがないまぜになったようだった。

佐祭系をこれほどまでに動揺させるそれは一体何か。

輪郭くらいしかはつきりしていないその姿が色づき始める。
はつきりとするその姿、その形……。

「……嘘だろ？」

今こうして目の前にいる存在は、理乃も知っているものだった。だがそれ故に我が目を疑う。

鱗を纏ったごつごつした表皮を持ち、頭には二本の捻じれた角、口には鋭く大きな牙を持った生物。背中には、翼。尾は太く長い。胴周りは大男が四人くらい集まったような大きさで、背は部屋の天井より高いらしく少し屈んでいる。

硯の背後に控えていたらしいそいつは　まさしく龍の姿をしていた。

少しイメージより小さいが、迫力はあった。

「こいつの最後の仕上げさ」

「え？」

硯が突然そんなことを言ったものだから、理乃は間抜けな声を出した。

「君が訊いたんじゃないか。僕のもう一つの目的さ。さて、ショータイムといこうか」

硯の哄笑が響き渡った。

第三十一話 男の意図（後書き）

なぜ龍なのか。それは私が、龍に対してどうしても強いというイメージを抱いてしまったためです。

まともに描写できていないわけですが。

嗚呼、予定していたところまで進んでない……。

第三十二話 解かれた封印

どうする……？ いや、それにしても……。なぜ、どうしてあんなものの存在に気付けなかったんだ？

「……………」

龍の存在がもたらす重圧感からか、佐祭系さまつけいが半歩下がる。

「ふふふつ。流星の君でもこれには畏れを抱くみたいだね」
硯すずりが佐祭系を嘲笑した。

「なら、そのまま黙って見ているといい」

そう言つと硯は龍に「やれ」と短く命令した。

なにを「やれ」というのがすぐにはわかつた理乃りのは手に持つ、刀身が氷にしか見えないもので覆われた刃を一振り二振り。

視界を埋めつくさんばかりに金平糖型の粒子を散布させ、それらをまとめてなぎ払い打ち出した。

命令と共に低く唸りながらゆつくりと移動を開始し始めた龍に向けて放たれた弾幕はしかし、その全てが見えない何かに拒絶され地に落ちた。

地に落ちた粒子はその場を氷結させその範囲を広げるも、龍のいる側には広がらない。

「無駄だよ。こいつにもその娘の能力を持たせてあるからね」

やっぱりダメか。なら……と今度は刃を龍に向けて鋭く突き出した。

圧縮された粒子が矢の如く飛んで行き 見えない何かに激突してバラバラに碎け散る。

その間にも龍はまるで焦らすかのように緩慢にその場所へと歩む。床にできた凍りを踏み砕き、一步一步確実に。

「くそっ！」

理乃は無謀と知りつつ龍に近づいて直接斬りかかるうとした。

「うっ！」

理乃が見えない何かの守備範囲外にまで踏み込んだ途端、龍の尾が腹部に打ち込まれ体をくの字に折るようにして吹き飛ばされる。

理乃の体は迦唯の頭上を通過し、壁に叩きつけられた。

「か……は……っ」

息の詰まるような衝撃と全身がばらばらに砕け散ってしまいそうな錯覚を覚える。

「……ちく……しょう」

龍の尾に打たれる直前に第二段階の能力で相手の時間を奪い、さらにはその奪った時間分を使用して回避しようとしたが避けきれなかったのだ。

床に倒れ付した理乃は立ち上がろうとするも体が動かない。

動け！ 動けよ！

何度もそう願いながら努力してみるも、四肢には床を這い擦る力さえ入らない。

理乃は肝心な時にままならない自分の体に苛立ちを覚えた。

「君も大人しく見ているといい」

硯はつまらなさそうな視線を理乃に向けた。

とうとう龍はその場所 染火と発矢の亡骸の元へと到達した。

「にげ……！」

理乃が警告を言い終える前に、

「邪魔だよ」

迦唯かいの身体が宙を舞った。

ちょうど理乃の近くの壁に飛ばされてきた迦唯は倒れたままぴくりとも動かない。

ただ、その表情は苦しげに歪められていた。

龍の方に視線を戻すと、そいつは大きく口を開いていた。

「なにを……」

口をついて出た言葉は、理乃が予知した光景を認められなかったからだろうか。

慌てて迦唯の様子を窺うと、ある程度衝撃から立ち直っていたら

しい彼女はあろうことが二人を凝視していた。

「迦唯、見るな！」

理乃の叫びも虚しく、迦唯はその光景の一部始終を見届けてしまった。

二人の屍が、龍にあつというまに食らい尽くされてゆく、その全てを。

「い……嫌あああああああああああああ……！」

少女の悲痛な叫びが響き渡った。

それは、絶頂を迎えた瞬間に襲いかかってきた。

もはや他のことに構う余裕のなかった迦唯にしてみれば、そいつはどこからともなく湧いてきたようなものだった。

体も動かず、意識も不鮮明だった迦唯はその身に迫る大きな物体をもろに受けた。

迦唯はもはや痛みを感じなかった。

壁に打ち付けられたのか、衝撃が体を貫いた。一瞬、呼吸が止まり、息苦しさに迦唯は顔を顰めた。

それが治まった頃。

迦唯はようやく何に打たれたのか、その存在を認識した。

龍？

姿形はそれによく似ていた。しかしあれは空想上の生物だったはず……。

迦唯がぼんやりとした頭でそんなことを考えているうちに、龍は大きく口を開き、その中にある口腔を、牙をさらけ出す。

そして

龍はまず、発矢の体に齧りついた。一気に胴体が食い千切られる。

強靱な顎によって骨は噛み砕かれ肉は裂け内臓は破裂し骨粉と肉塊と大量の血になって嚙下かれる。

床に残ったのは両足の膝から下と左腕、そして頭蓋。

次いで、染火の遺体もその後を追った。

こちらに残った部位は両手と両足のみ。

それらを腕で一か所に集め、まとめて口の中へ。

二人の遺体が龍の腹に収まるのはあつという間だった。

迦唯はただそれを茫然と、目を逸らすことすらできずに全てを見届けた。

二人の体があつた場所には、龍の口から滴る血のみが存在している。

「あ……」

そこに、彼らの姿はもう存在しない。

「ああ……」

この世のどこにも、存在しない。

墓に収まるべきものは、地上から消失してしまった。

「い……嫌あああああああああああああああああ！！」

迦唯は慟哭した。

彼女の悲痛な叫びに歓喜するかのように、龍が咆哮した。

「ふ、ふふふ……。やった、やったぞ……。ついに。ひひっ。ふふっ」

その龍の背後で、硯は喜びのあまり狂ったように笑い始めた。

「あ……？」

ふと、迦唯はある物が目に映っていることに気づいた。

虚ろになった心は、なんとなくそれを欲した。

おもむろにそれへと這い寄る。たった二、三步の距離が、今の迦唯にはとても遠かった。

「迦唯……？」

誰かに名前を呼ばれた。

しかし、今はそんなことを気にしている場合ではない。早くアレを手に入れなければ。

迦唯は脅迫でもされているかのように、必死にただそれを求めた。それは、温もりをくれるもの。

それは、安心をくれるもの。

それは、心の支えの一つ。

ついに迦唯はそれを手にした。

それ 理乃の手から離れ、彼の近くに転がっていた氷のようなものに刀身が覆われた刀。

本来、彼女が持つべきもの。

真の主を得た刃は目覚めの時を迎えた。

木々の梢を思わせる涼やかな音を立てて、刀身を覆っていた氷は砕け散った。

この場にそぐわぬ音に何事かと硯が辺りを見回し、それを目に留めた。

砕けた氷が床に落ちることなく刃の主の周囲を花びらの様にはらはらと舞い、漂う。

その中で、佇む一人の少女。

ひんやりとした風が吹いた。風など起こるはずのない空間にもかかわらず。

発生源は少女 迦唯の手にする刀である。

「……………」
迦唯は黙したままじつと二人の血を眺め、次いで龍に視線を移した。

龍はその視線を真つ向から受け止め 後ずさった。

龍が、脅えている？

理乃の目には、そう映った。

一際大きな咆哮を上げると、龍は迦唯に向かって突進した。

迦唯はそれを無感動に眺めて、静かに、冷やかな声音で告げた。

「
いきます」

第三十三話 硯の逃走／彼らの帰宅（前書き）

今回はいつもより短いです。

第三十三話 硯の逃走／彼らの帰宅

何も考えられなかった。いいや、違う。何も考えたくなかった。だから。

だから迦唯は、手にした刃に身を任せる。

それは、まどろみの中にいるような気分だった。

どこかぼんやりとしていて、はっきりしない意識。

心地いい。ずっと身を委ねたい……つい、そう思ってしまうような感覚だった。

迦唯へと迫り来る龍。

タン、と軽く床を蹴る。

体が軽い。

あつというまに龍に肉薄する。

迦唯以外の何もかもが遅かった。

止まっているとしか思えないほどに。

……ところが、この時この場所にいたものが実際に止まってしまっていることを、彼女は知らない。

龍との交錯は一瞬。

迦唯の刃が振るわれることなく、勝敗は決した。

龍は凍りついたかのようにその動きを完全に停止させていた。

理乃には、迦唯が瞬間移動したかのように見えた。

床を蹴ったところは見た。

だが、次に彼女の姿を見つけたときには、龍を通り過ぎた先の床にトンと軽く着地していた。

何が起こったのかまるで分らない。

龍はその動きを完全に停止させ、まるで動く気配がない。

龍に予知を働かせてみるも、この先三分は動かないようだ。

彼女は 迦唯は一体、龍に何をしたというのだろうか。

そして、彼女はどうなってしまったのだろうか。

理乃が気になるのはむしろこちらの方だ。

迦唯は伏し目がちにうつすらと開いた目つきで、どこか寝ぼけているような、眠っているような、曖昧な表情をしていた。

「な……何が起きたんだ!!」

硯が目を見開き、悲鳴のように叫んだ。

そんなもの、こっちが知りたい。

声に反応したのか、硯の方に向き直る迦唯。

「くっ……」

思わず二、三步後ろに下がる。

「退きなさい、硯。今の彼女に勝てるものは、この場にいません」
その時だった。

どこからともなく、女性のものと思しき声が聞こえてきたのは。

「誰だ!!」

ようやく立ち直つたらしい佐祭糸が周囲を見回す。

しかし、どこにも人影は見当たらない。それどころか、生物の影もない。

「……」

突然、理乃の視界が闇色に染まった。

硯の隠れ家の照明が落ちたのだ。

「……」

すぐに視界が真っ白に染まり、照明の光が復活したことを悟った。光に目が慣れた頃、辺りを見回すとそこには硯や龍の姿はなく、いつの間にかできあがっているぽっかりと開いた大きな穴と、静かに佇む迦唯の姿があるのみだった。

「逃げた……?」

あまりにも急な展開に、ぽかんとしてしまった理乃はそう呟いた。
「……………そのようですね」

佐祭系が口調を元に戻して言った。

迦唯はというと、ぼうつと突っ立っているようだった。

理乃が歩み寄ってもまるで反応を示さず、不安になって顔を覗き込んでみれば……………なんと、立っただまま眠っている。

理乃は苦笑するしかなかった。

迦唯の家に戻り、とりあえず彼女をベッドに寝かせて一段落ついたところで猫のネアが口を開いた。

「理乃。ありがとね、迦唯を助けてくれて。それと、おつかれさま」

「あ、ああ……………」

理乃の表情はあまり明るくない。

その様子を、ネアはさして疑問に思わずに告げた。

「理乃が喜びきれないのは、迦唯のお父さんが二人とも死んだから？ それとも、迦唯のことが怖くなったから？」

「……………正直に言うと、どっちも」

「素直なのはいいけど、後の方は否定して欲しかったかな。まあでも、変に強がられたらかえって迦唯を傷つけることになるから、それでいいけどね」

「ごめん……………」

「謝る必要なんてないよ。それに、僕に謝ってどうするのか」

「……………」

「理乃殿……………。勝手なお願いをして申し訳ないのでありますが、できれば迦唯殿の傍にいてあげて欲しいのであります」

静かに迦唯の寝顔を眺めていたファウが言った。

「……………初めからそのつもりだ」

そう言って、理乃はすうすうと静かな寝息を立てて眠る迦唯を見

やった。

……それから二日間。迦唯は死んだように眠り続けた。

第三十三話 硯の逃走／彼らの帰宅（後書き）

予定していたところまでいきませんでした……OTZ

第三十四話 目が覚めて（前書き）

今までで一番短いです……たぶん。

第三十四話 目が覚めて

「ん……。ここ、は……？」

目を覚ました迦唯は自分がどこにいるのかを把握するのに少々時間を要した。

「私の……部屋？」

見慣れた天井を見つめながらそう呟く。

腫れぼったい感じのする頬に手をやると、そこはやはり湿り気を帯びていた。

そういえば。

夢を見ていた気がする。

とても悲しい夢を。

私……泣いていたの？ ……最低。

静かに身を起こす。

痛むこともなく、体は思うように動いた。

「……？」

最後の記憶では身に付けていた覚えはないのになぜか下着姿だった。

まあいいかと体を確かめる。

どこにも怪我はない。傷跡らしいものも、やはりなかった。

「どうして……？」

訳もなく周囲を見回す。

そこで知った顔の少年が視界に入った。

彼はベッドの脇の椅子に腰掛け、ベッドに突っ伏すように眠っていた。

すぐ傍にその姿があったのにもかかわらず、迦唯は今まで気付いていなかった。

どうやら眠っている間、傍にいてくれたらしい。

しばらくその少女のような顔を眺めてみた。

男の子だつてわかっているんだけど……。どっちでもいけるわね。ほんとに。

「……………あ」

ふと、あることに思い至る。

もしかして……………泣き顔を見られてしまったかも。私、寝言で何か変なことを言わなかったでしょうね……………？

言わなかったと断言する自信がないだけに、不安だった。

内容はもう思い出せない。それでも、夢は見えていたはずだ。寝言を言っているもおかしくはない。

もし言つてたらどうしよう……………？

常にないくらい動揺する。

落ち着いて。落ち着きなさい迦唯。何を動揺しているの？

泣き顔を見られた？ 寝言を聞かれた？ それが、何？ あなたは裸身すらこの男の子に見られて……………見せて……………あんなことをして……………。

迦唯は体温が一気に上がっていくのを感じた。特に顔の辺りだ。

かあつと、耳の先まで赤くなっているような気がした。

なぜだか急に理乃の顔を直視できなくなって視線をさ迷わせる。それなのになぜかちらちらと見てしまう。

迦唯はよくわからない行動をする自分に混乱し始めた。

な、何？ なんなの？ なんでこんなに恥ずかしいの？！

五年前のあの日なんて比べものにならないくらい恥ずかしい……………。

傍らで眠る少年に対し、急に芽生えた恥ずかしさに酷く困惑する。

理乃が目覚めの兆候を見せるまで、迦唯は彼の寝顔を見ては熟したトマトみたく顔を真っ赤にして、あうあうと意味を成さない謎の言葉を蚊の鳴くような声で発していた。

第三十四話 目が覚めて（後書き）

一応復活したはいいものの……なぜでしょう。熱を出して以来、なかなか続きを書けなくなっていました。

しばらくは一話あたりの長さが安定しないような予感がします。

……OTZ

第三十五話 彼女の様子

目が覚め、顔を上げた理乃は眠っていたはずの少女と目があつた。

「あ……」

驚いたように声を上げて視線を逸らしたのは迦唯だ。

どうしたんだ？

迦唯は頬をほんのりと赤らめ、どこかそわそわしているような感じがする。

何というか、その。迦唯らしくないというか。

「ちよつとごめん」

理乃は熱でもあるのかな、と迦唯の額に手で触れた。

「……！」

触れられるなり迦唯は息を飲んで固まってしまった。

そんな彼女の様子に気づくことなく理乃は問いかける。

「別に熱もないみたいだし……。迦唯……。俺のが誰かわかるか？」

「理乃のこと……？ ごめんなさい、まだよくわからない」

迦唯は目を合わすことなく告げた。

「いや、そういう意味じゃなくて……」

意味を取り違えられたのか？ と、理乃は訂正すべく口を開いた。
すると、

「……本気にしないで。冗談だから」

迦唯は理乃が言い終える前にそう言った。

どこか恥ずかしそうにしているような気がするのは気のせいだろうか。

「そ、そう……。なんだ」

真剣に言っているようにしか思えなかった理乃は、とりあえずそういうことにしておくことにした。

目が覚めるなり迦唯はこんな調子だ。

いままでとは少し違った感じのする彼女を前に、理乃はどうにも

困惑を隠せなかった。

会話が途切れ、つかの間静寂が訪れた。

「ありがとう……助けにきてくれて」

唐突に告げられた。

「え？」

理乃は一瞬呆けて、お礼を言われたんだと理解した。

ようやく目を合わせてきた迦唯の瞳に、吸い込まれるような錯覚を覚える。

「あのままだったら私、壊し尽くされて死んだ。だから、ありがとう。でも……」

「でも？」

「……私のせい、よね」

迦唯が何かを呟いた。

それはあまりにも小さな呟きで、理乃には聞き取ることができなかった。

「でも、何んだよ？」

「やっぱりいいわ。気にしないで」

「どうしたんだよ……」

迦唯はベッドから出て速足で扉の方に向かう。

やっぱり様子がおかしいような……。

「理乃……お腹は空いてる？」

「あ、ああ」

そういえば、地下から戻ってきてからというもの、迦唯が心配でろくに食べていなかったために空腹だ。

彼女が一応は元気そうなのをこの目で見て、安心したところに言われたら余計にそう感じる。

「何か用意するから、待ってて」

「え、あ、ちよ、それなら俺が……」

理乃が引きとめる間もなく迦唯は扉の向こうに姿を消した。

扉を閉め、廊下に出た迦唯は自分の胸を押さえていた。

ま、まだ心音が速い……。一体何なのよ……。

二、三度深呼吸をして頭の中を真っ白にする。

「……よし」

ある程度落ち着いたところで、迦唯はさつさと身支度を済ませてキッチンへ向かい、食糧などをあらためると走って玄関へ向かい、外に鉄砲玉の如く飛び出して行く。

そんな迦唯を、後ろから二対の視線がひそひそと会話しながら見守っていたことにも気づかず……。

いつになく急いでいる様子の迦唯の背を見送りながら、ネアはため息をついた。

「あれ……絶対僕たちのこと忘れてるよね」

「そのようでありますなあ……」

同じく溜息をついたファウはもの悲しそうな目をしていた。

「まあ、元気みたいだからいいけどさ」

すっかり二人（二匹）は落ち込んでいた。

第三十六話 刃への不安

理乃はなんとなく迦唯の顔をちらと見た。

迦唯は「何？」とでも言いたげな視線を向けた。

「な、なんでもない」

理乃は、まさか目が合うとは思っておらず、狼狽ろっはいした。

「……？」

時刻的に言えば遅い昼食を終えた四人（二人と二匹）は、ある物について話すことになった。

ある物とは、あの刀身が氷のようなものに覆われていた刃のことだ。

今やその刃は一見すると何の変哲もない、刀となって部屋の隅にある。刀と表現したのは、見た目が最も似ていると思われたためである。

刃が触れた場所は凍りつく筈だが、そのような様子はまるでなかった。

迦唯が振るう以前は、理乃の腕にある宝石からある程度離れると凍りついていたのだ。

けれど、今は違う。迦唯が眠っている間に試したところ、一定以上離れても凍らないようになった。

よくよく目を凝らして見てみると、微かに浮いていたのだ。

謎だらけの刃。

この刃は一体どういうものなのか。

理乃としては、今は迦唯にただ体を休めることに専念してほしいかった。

しかし、起きて早々外に飛び出してあっという間に買い物済ませて料理を作ってしまった迦唯を気遣った、理乃のもう少し休んできからにしたらという提案は却下されてしまった。

その代り明日の朝まではできるだけ安静にしているととりあえず

約束させた。

「本当にもう大丈夫なのに……」

ベッドに再び横になった迦唯はちよつと不服そうだ。

「まあ、いいわ……。それで、あれはなんなの？」

問いかけられたのは、ネアとファウだ。

「あれは……後からやってきて、本来一つだった都市を合法地帯と無^{カース}法地帯とに分断した組織が狙っているものの一つで」

「まだギルドができあがる前、機^{オルガン}関にて解析されていたものの一つであります」

「そんなことはどうでもいいの。あれ……刀みたいな感じだけど、なにか変なのよ。それに、よくわからない機能まであるみたいだし……」

迦唯は不安を隠し切れていない様子だった。声の弱さからにそれが察せられた。

「迦唯は大丈夫だよ……。迦唯が持っている限り。僕たちが知っているのは、あの刃が昔からこの地に存在していたことと、あれが迦唯専用のものであるらしいことくらい」

「申し訳ないのであります……」

二人（二匹）は申し訳なさそうだ。

「じゃあ、麻莉亜さんに聞いてみるか？」

「……そうね。麻莉亜なら何か知っているかもしれない。顔を出すついでに、聞いてみるわ」

とりあえずの予定だけがはっきりとしたところで、理乃を猛烈な睡魔が襲った。

「ん……ねむい……」

そのまま、理乃の意識は遠のいていった……。

第三十六話 刃への不安（後書き）

間があいたせいで話を忘れてしまった……OTZ

もともとかなり下手なのがさらに駄目になってしまっている……（

TOT）

第三十七話 珍しいこと

「これでよし……」

一仕事 自分が眠っていたベッドのシーツなどを取り替え、いきなり眠り始めてしまった理乃をそこに寝かせた を終えた迦唯は一つ頷いた。

「多分、ほとんど寝てなかったんだよ。理乃は」

心の底から安心したような、穏やかな表情を浮かべて眠る理乃の顔を見たネアが言った。

「……心配かけたわね、たくさん……。ネアにもファウにも」

「ホントだよ、もう。無事に戻ってきたからいいものの、どれだけ心配したか」

「全くその通りであります」

ネアもファウも、呆れたような、ほっとしたような複雑な声音だった。

「ごめんなさい……」

「それはいいけど……どうしたのさ、ずっと扉見てるけど？」

「う、うん。あの……シャワー、浴びてきてもいい、かな？」

迦唯は連れ去られてから目が覚めるまでロクに髪も体を洗っていないことを気にしていた。

別段臭うわけでもないし、そう汚れているような感じもしていない。だから先ほどでも気にせず外へ買い出しに行った。しかしながら時間が経つにつれて、どうにも気になってきてしまったのだ。

「迦唯、お風呂とか好きだもんね。いいんじゃない？」

ドアノブに手をかけたところで、迦唯の動きがピタリと止まった。体……理乃が拭いたりしてくれたのよね……？

迦唯は確認するように、訊く。

「そうですね……迦唯殿？」

「その……何か言っただけ？」

迦唯の瞳が不安げに揺れる。

「うーん。特に何も言ってなかったけど……。ただね……。迦唯に触れるとき理乃は、砂でできたお城の、その一粒たりとも崩れ落ちることがないようにしてるみたいなき感じでしたよ」

「……私って、そんなに脆そうなの？」

「そうじゃないってば」

「理乃殿にとつて、迦唯殿はそれだけ大切だということでもありますよ」

「……………っ！」

それを聞いた迦唯の顔がみるみる紅潮してゆく。それを隠そうとするかのように、迦唯は素早く外に出て扉を閉めた。

遠ざかってゆく足音が聞こえなくなった頃。

「……珍しいよね。迦唯があんなに動揺するのって」

「つまり、そういうことなのでしょう」

「ファウ？ それってどういう……………あっ」

二人（二匹）は顔を見合わせた。

翌朝。

理乃の意識は半ばまで、まどろみの中にあつた。

その日の朝は、いつもよりも少々肌寒かつた。

だから理乃は、すぐ傍にあつた温かいものを抱きしめた。

「……………っ！」

何かが聞こえた気がしたが、気のせいだということにしておく。ただ、不思議に思うこともあつた。

いま自分が抱きついているそれが人肌位の温度で、石鹸のような香りがして、柔らかい感じで、時々さらさらとしたものに鼻をくすぐられているのだ。

そういえば、抱き枕なんてなかったよな……。何か変だけども、まあいいか。

理乃は深く考えず、それに顔すらも密着させるようにして、睡魔に身を委ねた。

自分が抱きしめているものがなんなのか、その正体に彼が気付くのはもう少し先のことである。

第三十八話 麻莉亜のもとへ

迦唯は身動きがとれず、困っていた。

肩に手を回され、右足と左足の間にはもう一つ別の足があり、彼女の肩に回された手と挟みこまれた足の持ち主は背を丸めて未だ夢の中にいる。

抱きつくような恰好で眠っているのは、理乃だ。

理乃は一度目を覚ましかけたかと思うと、ぎゅっと彼女の体にくっついてきた。

胸に埋めるように頬を押し付け、肩に回された手は背中に達してすうっと背筋を撫で上げた。挟み込まれた足が、太ももの辺りにまで移動し危うい位置で止まった……というよりも、止められた。

「っ！！」

上げそうになった悲鳴をすんでのところで堪える。

理乃といえば、起きるところか再び夢の中に落ちてしまった。

自業自得　昨夜、シャワーを浴びて戻ってきた迦唯は、理乃の眠るベッドに自分も横になった　なので、迦唯には理乃を無理やり起こすつもりはない。

そう、たとえ理乃のもう片方の手が色々といけないところまでもを弄っていたとしても……。

ばか……私のばかぁ。

理乃が目を覚ますまで、迦唯はただただ自分を呪っていた。

理乃が重い瞼を開くと、涙目になっている迦唯の顔があった。

「おはよう」

あれ……？　どうして迦唯が隣で寝て、るん……だ？！

意識が急速に覚醒してゆくのを実感した。

「おはようって うわっ!」

状況を理解した理乃は驚いてベッドから転げ落ちた。

「きゃっ!」

……迦唯と一緒に。

まるで理乃が迦唯を組み敷いているかのような体勢になる。

どこか怯えたような彼女と視線が絡み合う。

こ、これってどこかで……。

妙な既視感が理乃を襲った。

それもそのはず。初めて彼女と出会った日の夜、部屋から飛び出した理乃と、様子を見にやってきた迦唯は廊下ではちあわせして、ちよつど今のような体勢になったのだから。

「い、ごめん……」

彼女の機嫌を損ねないよう、急いで退いて謝った。

床に仰向けに倒れた迦唯はというと、

「あなたのせいじゃない。……悪いのは、私だから」

そう告げながら立ち上がった。

「え……それってどういう……?」

「理由はわからない。けど、理乃の隣で寝てみたくなった。まさかあんなに驚くとは思っていなかったから……ごめんなさい」

迦唯は眠っている理乃にされたことは全て伏せたまま、それをおくびにも出さず頭を下げた。

ということとは、俺が抱いていたのはまさか?!

「そ、そうなのか……」

理乃は今朝のことを思い出してしまい、それ以上なんて言えばいかわからなかった。

下手なことを言つと、命にかかわる……。

「朝ごはんできたら呼ぶわ……」

なぜか疲れたように言い、迦唯はよろよろと部屋を後にした。

「なんだか久しぶりな気がするわ」

朝と昼の間くらいに時刻。

雑然とした、統一性の欠片もない町並みの中にあつてなお、明らかに周囲から浮いている過剰なまでに装飾された巨大な塔の前に、迦唯はそう呟いた。

「行きましょう」

傍らの理乃に声をかけ、中に入る。

目指すは地下。この塔、ギルドのオーナーたる麻莉亜の部屋だ。

一階のフロアを歩いているうちに、以前訪れたときより人の気配が少ないことに迦唯は気付いた。

「まだまだ忙しいみたいね。」

どこか他人事のように、そう思った。

やがて、見慣れた扉の前に辿り着く。

「入ってらっしゃい」

ノックをしようとしたところで、内側から聞きなれた声に招かれる。

「相変わらずだな」

「……そうね」

迦唯と理乃は互いに肩をすくめた。

「迦唯と理乃です。入ります」

扉の先、部屋の中にはもちろん麻莉亜まりあが女王のごとく玉座に座していた。

さらにもう一人、見慣れた男性が麻莉亜の隣に立っていた。

その男性が、口を開く。

「迦唯君。寝坊にも限度がありますよ」

迦唯のことを君付けして呼ぶのは一人しかいない。

「佐祭糸ささい……」

「思ったよりも元気そうで何よりです」

「おかげさまで、ね。今度改めてお礼させてもらつわ」

「ふふ。その時を楽しみにしておきましょう。では、用が済んだのでこれにて失礼……」

佐祭系はそれだけ言つと麻莉亜に別れを告げ、さっさと帰つてしまつた。

「どうしてあいつが……？」

理乃が不思議そうに首を傾げた。

「硯すずりの隠れ家でのことを話してもらつていたのよ」
麻莉亜からすぐに答えは告げられた。

「それより……よかつたわ、あなたが無事で……」

麻莉亜は玉座から立ち上がると迦唯の元へ歩み寄り、その体を抱きしめた。

「あ」

声にならない声が迦唯の口から零れる。

「おかえりなさい、迦唯ちゃん……」

「ただいま……」

迦唯はほんの少しだけ、甘えさせてもらつたことにした。

第三十九話 地震？！

突然の脇腹への刺激に、抱きしめられた格好のままの迦唯は身を
擦った。

「…………あの、オーナ…………麻莉亜？」

「あら、久しぶりに人前で私を名前で呼んでくれたわね」

迦唯が身を擦った原因たる彼女　麻莉亜は全く別のところに反
応した。

もちろんわざとだ。

「そうじゃなくて、あの…………」

「どうしたの迦唯ちゃん。はっきり言っくらんなさい？」

そう言いつつ、迦唯に更なる刺激を与える。

「あの、だから、か、体…………っあん」

「ふふふ。体が…………何かしら？」

麻莉亜は意地の悪い笑みを浮かべて、それをエスカレートさせて
続ける。

刺激は脇腹、背中、腰、太もも、と移動していき、また戻る。

そして今度は腹、胸、首筋と続き、また戻り始め、ついには一番
敏感なところにも与えられた。

「だから、あつ、体をつ、そんなにっ、撫でっあ、回さっ、ない、
で…………」

「どうして？」

先ほどから、迦唯の体を自由気ままに弄り回している片手はその
ままに麻莉亜は訊く。

「理、乃う、が、み、見て…………んぐう?!」

ちらと二、三步後ろでぎよつとしたような顔をして動けなくなっ
てしまっている理乃を顧みたところで、麻莉亜に顔の向きを無理や
り変更させられ、その次の瞬間には唇を塞がれていた。

「んあう…………ん…………だ、め…………」

「いい、じゃない……少し、くらい……んっ！」

迦唯は抵抗するが、まるでびくともしない。

成す術もなく口の中を蹂躪されていく。

徐々に酸素が足りなくなり、酸欠で意識がぼんやりとし始める。

だ、め……ぼーっとしてきた。もう、何もかんあえられなひ

……。

不意打ちで完全に主導権を奪われた迦唯は、次第に身を麻莉亜に任せていった。

……数分後のことだ。

「ふふ……理乃ちゃんも混ざらない？」

突然声をかけられた理乃は、“くたー”とでも言おうか、力尽きた様にすっかり大人しくなり、半分寝ているような、現を抜かした目をしている迦唯を見て全力で首を振った。

「あら、遠慮しないでいいのよ？」

「してませんしてません！」

「そう、残念。なら、もう少しだけ待ってて頂戴。きりをつけるから」

一瞬だけ迦唯の目が、恨めしそうな色を宿してこちらを見たような……そんな気が理乃はした。

「……まさかいきなりあんなことされるなんて、思ってもみなかったわよ」

迦唯は不機嫌を装った。

「でも気持ち良かったでしょう？」

だが、麻莉亜はまるで悪びれる様子もない。

「そ、それは……そうだけど。でもいきなり、あんな……」

「硯に何をされたかを知っている身としては、ね。口直しみたいな

ものと思つて」

思い出したのか、迦唯の体が小刻みに震えた。

そんな迦唯の手を、理乃は握りしめた。

「！」

震えが、治まる。

「大丈夫か？」

「あ、ありがとう……」

そう言つて、迦唯は少し俯いた。

そんな光景を見た麻莉亜は、なるほどねえ、と内心呟いた。

「さて、そろそろ用件を聞きましょうか」

「……これのことなんだけど」

どうみても普通の鞘に収まっているそれを、迦唯は抜き放つ。

「刀……かしら」

「見た目は」

迦唯は薄く目を閉じ、刃と自分とを繋ぐ様なイメージを結ぶ。

冷たい風が吹いた。

刃の周りに、どこからともなく現れた氷のような花びらが舞い始

め、迦唯の周囲にも広がる。

「……これは……！」

麻莉亜は目を見開いた。

ありえない！アレがどうしてこんなところに？！

「……麻莉亜？」

目を普通に開いた迦唯は、激しく動揺している麻莉亜に呼びかけ

た。

「……え？ あ、ああ。ごめんなさい。さすがに驚いたわ」

「麻莉亜さんはこの刃のこと、知ってるのか？」

理乃は麻莉亜の驚きようから、何か知っているかと確信しながらも

一応訊ねた。

「これはね………っ?!」

麻莉亜が口を開いたのと、激しい揺れが三人を、いや、無法地帯カース

全域を襲ったのは、ほぼ同時だった。

「じ、地震か?!」

「いいえ、違う。これは」

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

何者かの雄叫びが、鼓膜を揺らした。

「おわっ!」

遅れてきた、音による衝撃で理乃は体勢を崩した。

雄叫びと時を同じくして、三人のいる部屋の壁に、床に人一人分
くらいの穴が次々と開いてゆく。

「……困まれたみたいね」

その光景を見て、迦唯は冷やかに呟いた。

第三十九話 地震?! (後書き)

何が、とは言いませんが……さすがにやばいでしょうか。いえ、独り言です。はい。

第四十話 前哨戦

脳裏に閃く映像。

理乃は咄嗟にその場に伏した。

「っ！」

先ほどまで胴体があった場所を何かを通り過ぎ、風圧が髪を揺らす。

これは……。また、敵が見えない！

「迦唯！ 麻莉亜さん！」

理乃は不可視の危険の警告を発しようとするが……。

「とりあえず、理乃ちゃんはまだもう少しそのままいてね」

微笑む麻莉亜の四方で血飛沫が上がり、

「……穴の数…… 16。初期侵入数16、以後増加中。撃破9」

迦唯は淡々と、穴より現れる何かをカウントしながら斬り伏せていた。

迦唯の方は確かに何かを斬っているようだが、麻莉亜の方はまるで彼女に動いた様子がない。

今のところ戦力外の理乃は、とりあえず邪魔にならない位置にいることに専念する。

二分後。

「対象の全滅を確認」

迦唯は呟いた。

「あら、もう終りなの？」

結局一步も動くことのなかった麻莉亜は退屈そうだ。

「……新手が来る様子はないわ」

「うーん、それは残念ね」

頬に手を当てて首を傾げてそう言う麻莉亜は、本当に残念そうに

見える。

「はは……は……」

理乃は乾いた声で笑うしかなかった。

「さて、それじゃあ迦唯ちゃん、理乃ちゃん。さっきの雄叫びの元凶、さすがにあれは放っておくと面倒だから倒してきてもらえないかしら？」

「……わかりました」

迦唯は物言いたげな視線を向けつつも承諾した。

「行くわよ、理乃」

「あ、ああ……」

理乃はさっさと行こうとする迦唯の後を慌てて追いかける。

血の絨毯が敷かれた室内を後にする前に迦唯は一度立ち止まった。その背に麻莉亜の声がかかる。

「その刃はあなたを決して裏切らないから！」

言葉に反応したわけではない。

けれど、迦唯は振り返った。

どうしても聞いておきたいことがあったからだ。

「本当に、一人で大丈夫？」

麻莉亜の身を案じた、迦唯の問いかけ。

「ええ！」

後ろ髪を引かれるような思いでいるであろう少女のその迷いを払うべく、麻莉亜は優しい笑顔を見せた。

立ち去って行く迦唯の背を見送った後、

「さて……少しは楽しめるかしら？」

麻莉亜はゆっくりと背後を振り返った。

いつも座っている玉座の上。

そこに立つ、見知らぬ女性に。

麻莉亜は獰猛な肉食獣を思わせる視線を注いだ。

第四十話 前哨戦（後書き）

さて問題は次話、私がどれだけ頑張れるかという……。

第四十一話 それぞれの場所にて

外に出でてみると、意外にも平穩そのものだった。

街の様子は常にあるものと何ら変わりはなく、路地裏や人通りの少ない場所からであろう、小さな悲鳴や淫猥な喘ぎ声、下品な笑い声や、恐喝しているかのような怒声が微かに風に運ばれてくる。

いつも通り過ぎて、迦唯は拍子抜けした。

街中穴だらけの敵だらけを予想していたからだ。

それが、その敵の気配もしない。

……ただ一つ、明確な敵意をあたり構わず撒き散らしている人外の気配を除いては、だが。

「北に向かつて移動しているわね……」

無駄に存在感溢れる強い気配を感じ取った迦唯は、六本の大通りの内、真つすぐ北に向かつて続く通りの方向を見つめた。

「北に何があるんだ？」

北に向かう存在の、その行動理由が気になるのか、理乃は訊ねてきた。

「北は門よ。無法地帯カウスと合法地帯ロウスとを隔てる、境界」

迦唯は視線を北にやっただまま、簡潔に答える。

「境界……。もしかして、合法地帯に行くつもりなのか?!」

「ただ門を壊して悪戯に両方を混乱させようとしているのかもしれないわよ？」

「うーん……」

「ここで考えていてもしょうがないわ。さっさと追いかけるわよ」
言うなり、迦唯は駆け出し……。十秒で止まった。

後ろを振り返ると、理乃が小さく見える。

あれ……。？ 理乃はなんだかんだいってそんなに鈍い方じゃないのに、どうしてこんなに離れてるのかしら？

立ち止まって首を傾げ、原因を思索しているうちに理乃が追いつ

き、

「びつくりしたじゃねえか！ 四秒後には縮地でもしたのかと思っ
たぞ！ そこまで全力で走らなくてもいいだろ……」

怒られて迦唯は困った。

そんなことを言われても、全く身に覚えがないからだ。

確かに戦闘中は縮地めいたことをするが、今は理乃が追いつける
くらいのペースにまでちゃんと落として走っていたはず……。

「ごめんなさい。でも、そんなつもりはなかったのよ……」

迦唯は申し訳なさそうに頭を下げる。

「え……？ それじゃあどうして」

「私もわからないの。だから立ち止まっていたのよ」

「ああ、確かに……」

理乃も迦唯が本気で困惑していることに気付いたのか、一応納得
したようだ。

「それで……理乃……」

「ん？」

「おんぶと抱っこ、どっちがいい？」

迦唯が訊ねると、理乃はなぜか狼狽したみたいだ。

「ちよ、ちよつとまで、どうしてだ？！」

「だって、また今と同じようなことがあっても困るから」

「で、でもよ……」

「原因がわからないんだから、仕方ないわ。諦めて」

それに、理乃に触れていたような気もするし、ね……。

せめてどちらがマシかと真剣に悩む理乃の姿を瞳に映しながら、
迦唯はそんなことを思った。

ギルドの地下、オーナー室には入った瞬間に殺されそうな空気が
漂っていた。

「そんな目をしないでもらいたい。こちらはただ、挨拶に来ただけ」
見知らぬ女　よく見るとまだ少女とうべき黒い布を幾重にも巻いたような衣装のそいつは、淡々と告げた。

麻莉亜は少女の体を、品定めするかのような目でくまなく観察する。

それはもはや、視姦しているとさえ言えるような、相手に性的不快感を与え得るものだった。

そんな視線を向けられた少女に恐れや不快感を抱いている様子はない。

麻莉亜の放つ殺気を全身に浴びながらも、まるでものともしていかないようだ。

「さっきの見えないものは、あなたの仕業かしら？」

「あれは私によるものではありません。硯が勝手に私兵を差し向けたものです。今頃彼は……」

少女は何かを感じ取ったのか、その場を飛びのいた。

「好戦的ですね」

ぱっくりと裂け目の入った左腕からぼたぼた血を滴らせた少女は苦笑した。

「私が訊いたのは、あなたの仕業がどうかだけ。その答え以外の発言を許可した覚えはないわ」

「それは困りました」

しかし少女は全く困っているようには見えない。

「その割にはしっかり避けているわね」

口を開いた瞬間には攻撃していたのにもかかわらず、かわされた。自然と口元が綻ぶ。

「この能力はね、あの子には全く通用しないの。だから遊べないのよね。すぐに“私が”負けちゃう」

ふと、麻莉亜は一人の少女を想う。

「あの子とは……？」

誰のことか気になったのか、少女は身に迫る何かをかわしながら

訊いた。

「ちょうど同じくらい的年かしらねえ」

「ああ、さっき出ていった……」

少女はすぐに気付いたようだ。

「あなたは挨拶に来たといっていたわね？」

麻莉亜は不意打ち気味に本題に入る。

「ようやく聞いていただけですか」

「誰の使いかしら？」

「それは言えません」

即答だった。

「なぜ？」

「私はただ、伝言を頼まれただけです。その際こちらの情報は漏らすな、と念を押されました」

「忠実なのね。それとも、お人形さんかしら？」

そう言うと、少女の表情に一瞬暗いものが垣間見えた。

「……確かに、そのようなものかもしれない」

「まあいいわ。でも、ここから帰れるとは思わないでね」

麻莉亜は不敵な笑みを浮かべた。

「やはり……素直に聞く耳を持つてはくれませんか」

ため息交じりに呟いた少女の顔から、一切の表情が消えた。

第四十二話 それぞれの場所にて 2

相手の気配の変化に内心で嬉々したのも束の間、麻莉亜の勘が警鐘を鳴らした。

「……！」

勘に従い、半歩ほど右に流れるように身を動かすと、左肩を何かが掠めていった。

「ようやく動きましたね」

右手前にまで一息で迫っていた少女が、両手それぞれに持つ得物 鋼鉄製の羽子板とでも表すればいいのだろうか 黒光りする 一対の獲物で麻莉亜の右腕を断ち切らんとする。

この程度か、とばかりにあえて反撃せず、その場を離脱する。 幾分か警戒の度合いを引きあげながらも、麻莉亜はまだ余裕であった。

これなら十三歳の頃の迦唯ちゃんレベルねえ……。

がっかりしたのが表情にも現れていることだろう。なにせ隠そうとしていないのだ。

さてどんな反応が……。

少女に対してそんな期待を抱いた時、少女の口の端が僅かばかり吊りあがって笑みを形作っていることに気付いた。

なにをする気かしら？

麻莉亜は期待に胸を膨らませて、相手の次の一手をわざわざ待ち望む。

それが、仇となった。

「 視界に何か黒く細長い物がちらついた。」

「 ? 」
それを視界の端に捉えながら、続く少女の三回目の追撃を避けようとしたところで、体が縫いとめられたかのように動かなくなった。

「 あら ? 」

眼前の少女の振り上げた鉄板が身に迫る。

体は 全く動かない。

「 ぐっ!! 」

両肩に立っていられないほどの衝撃。

肉が裂け、骨が碎ける。

肩は一拍遅れて激痛を訴え始める。

想像以上の威力。

少女が軽々と振り回しているものだから、鉄板の重量をはかり損ね、結果その脅威を軽く見過ぎていた。

膝をつきそうになっているというのに、体は立ったまま動かない。

「 そういう、こと……ね 」

ようやく気付く。

部屋の影という影から伸び、それぞれまた別の影へと消えている黒い線。

それらがある一点 麻莉亜の体に集中している。

おそらく、この黒い線が麻莉亜の体を縫い止めているのだろう。

これについては一切痛みを感じない。

下手にダメージも与えるようなものより性質が悪い。

これでは状況によっては気付けまい。

いや、気付いたところでどうやってかわしたのか。

「 これであなたはもう動けません 」

目前で無防備に勝ち誇る少女に向かって攻撃する。

だが、当たらない。

少女はまるで当然のことのように最小の動きでかわし、

「私の勝ちです。申し訳ありませんが、そのまま話を聞いていただきます」

そう冷めた口調で言い、麻莉亜の首筋に冷たい物をあてがった。

少女はこの時、麻莉亜を殺すか、さっさとこの場から立ち去ってればよかったのだ。

命令に忠実だったことが、少女にどんな結果をもたらすことになるのか。今の彼女は知る由もなかった

「こいつは……」

迦唯に抱きかかえられている理乃が息を呑んだ。

先に行くのは、あの地下施設で見た龍そっくりだった。

きっと同一のものなのであろう。

「大きくなっているわね」

迦唯は見たままの感想だけを口にした。

龍の図体ずったいは施設で見たものよりも、幾分か成長したように見える。

というより、確実に大きい。

理乃は驚いたようだった。

しかし迦唯にとつてはどうでもよかった。

それが反応の違いに見事反映されたようだ。

それよりも今の迦唯は釈然としない気持ちで一杯だった。

なぜなら、敵意を放つそれ 目前にいる龍 にあつという間に

迫いついてしまったからだ。

頭の中に地図を思い描く。

追い始める前に感じていた気配と、その発信源たる龍の位置はそれほど変わっていない。

北に移動していた気配の移動速度から考えて、迦唯たちが追いつくのは門の手前くらいになる計算だった。

だが現実には違った。門まではまだ距離がある。それなのに、すでにもう追いついてしまっている。

なにかがおかしい。

時間を無視しているようにも、距離を無視しているようにも思える。

違う、と迦唯は頭を振る。

ちゃんとここまでの道のりは走った覚えがある。

となると

時間。

でも、私の能力は時に影響しない。なら理乃の能力？ でも、理乃の能力の範疇を超えている気がする……。というか理乃も考えられないのかな……。

腕の中の理乃は龍に圧倒されているようだった。

確かにすごい迫力だが、まだ正面にしているわけではなく、見ているのは後姿だ。

今から恐れてどうするのよ……。

迦唯は内心で、それはもう深く溜息をついた。

龍といえば、追い抜きにかかる迦唯たちを完全に無視してただひたすらに北へ、北へと向かって行く。

「迦唯……これ倒せるのか？」

呆れられているとは露知らず、理乃はそんな弱音を吐いた。

迦唯は一発殴ってやるうかと本気で考える。

ただでさえ釈然としないことや、理乃の弱気と不信でムカツときているのに。

けれど今はそんなことをしている場合ではない。
だから、この苛立ちを籠にぶつけてやることにした。
八つ当たりだ。

そして籠を倒したら理乃を少しばかり虐めてやろう。

そう決めた迦唯は、

「倒せるに決まってるわ」

凄絶な笑みを浮かべて見せた。

その表情を見て身の危険を感じた理乃の顔から、さっと血の気が引いたのは言うまでもない。

第四十三話 それぞれの場所にて 3

「ふふふ……」

麻莉亜は嘲笑う。

笑うのではなく、嘲笑う。

何の前触れもなく唐突に嘲笑し始める麻莉亜に、少女は戸惑いを隠せなかった。

「な、何がおかしいのです……」

少女の声は震えていた。

「ふふふ……。いいえ、何も」

勘がいいのだろう。

無意識に身に迫る危険を感じている。

あてがわれた武器は手の動きに従い、小刻みに揺れている。

さてと。そろそろ遊戯はお終いにしましょうか。正直、飽きたわ。

「じゃあ、聞かせてもらえるかしら。その伝言とやらを」

我に返ったのか、震えが治まった少女は内容を話し始める。

「今回の件には……」

が。

その続きが少女から話されることはなかった。

「入状替態」

「え　　?!」

麻莉亜は眩暈のような感覚を味わいながら、少女の反応を、これから上がるであろう少女の悲鳴を待ち望む。

眩暈は一瞬だけ。

そして、それが治まった瞬間。
左腕に裂け目が生じ、ぱっくりと口を開いた傷から血が流れる。
唐突に感じる痛み。だが、そんな痛みなど麻莉亜にはどうでもい
い。

さあ、さあ、さあ、さあ！ 聞かせて頂戴。

まるで少女が、麻莉亜の心の声に応えるかのように。

「ぎっ、あああああああああああ」

少女の口から獣の鳴き声を連想させる、絶叫が上がった。

何の覚悟も心の準備もしていなかった激痛に、少女は我を忘れた。

「あああっ、肩が、肩があ！」

少女の両肩の肉が裂け、骨が砕けていた。

何に裂かれたわけでも、砕かれたわけでもない。

いきなり、突風のようにその現象は起こった。

十数秒後。なんとかパニックから立ち直り始めた少女は、

「そんな、どうして……？」

ようやく自分の身に何が起こっているのかを把握し、愕然とした。
影から伸びる黒い線は麻莉亜ではなく自らを拘束し、本来そうな
っているであろう麻莉亜は平然と目の前に立っている。

麻莉亜の両肩にあるべき怪我がなく、それは少女にある。

少女の左腕にあるはずの怪我がなくなって、麻莉亜の左腕にそれ
がある。

この状態が示すこと。

それは

お互いの状態が入れ替わっていることに他ならなかった。

「な、何をしたのです……?!」

「ああ……いい悲鳴だったわあ……」

少女の問いに答えず、麻莉亜は一人、悦に浸っていた。

恍惚とした表情を浮かべ、自らの体を抱きしめて悶える。

「だ、だから一体何、を……何を……」

背筋が震え、堪え切れなくなった少女はもう一度問いを発した。

それにピクリと反応した麻莉亜は無言で少女に歩み寄り、顎を手で優しく掬いあげる。

視線が合い、少女の目が恐怖の色を映す。

麻莉亜はその反応に内心で頷き、考える。

この娘を、どうしよう？

「どうしましょう……」

あえて、思っていることを口に出して言う。

おもちゃを見つけた子供のような目で、少女を見つめながら。

「ひっ……」

少女はただただ怯える。

自身の能力であるはずの黒い線はなぜか解除できず、身動きもとれない。

麻莉亜は少女の頭を撫でる。頬を撫でる。肩を、腕を、足を。

下まで行つて、戻ってきたところで麻莉亜は訊ねなければならぬことを思い出した。

「あなたを寄こしたのは誰かしら？ それを答えてくれたら帰してあげてもいいわ」

少女は数秒黙し、静かに拒否した。

「いい子ね……。でも、それじゃ困るのよ。こちらとしても、相応のことをしなければいけないの。あなたなら分るでしょう？」

麻莉亜はちつとも困っていないことを、これまたわざと表情に出す。

「そ、それでも、言えませ……ぎ、あああああああ！」

またも少女の悲鳴が上がる。今度は幾分か人らしい声だ。

なら仕方ないわねと、麻莉亜は傷口に指が食い込むように両肩を

掴んだのだ。

「それじゃあ痛みと快樂、どっちからがいいかしら？」

選択肢を与える麻莉亜は、嗜虐心溢れる笑みを浮かべていた……。

迦唯は、下腹部のうずきを感じて顔を顰めた。

「どうかしたのか？」

「……なんでもない」

理乃が心配そうにしたので、迦唯はすぐに表情を取り繕い平静を装った。

麻莉亜……あなたもしかして、またなの？ ……あの鬼畜拷

問馬鹿。

「理乃、すぐに戻るからここにいて」

そう告げるなり理乃を下ろした迦唯は未だ呼び名も知らない刃を構え、龍を飛び越えるべく跳躍した。

空中にいるうちに、迦唯の周りには花卉のようにひらひらと舞う小さな結晶が次々に生み出されてゆく。

体を捻って向きを変え、着地と同時に龍の足に向かって刃を横薙ぎに払う。

迦唯の周囲を舞っていた結晶が吹雪となって襲いかかり、それに龍の足が接触すると同時に龍の足は突然動作を停止し、バランスを崩したそいつは前のめりに地に倒れ伏す。

ちょうど迦唯の手前の場所へ降りてきた頭に刃を突き入れる。

抵抗はほとんどなく、あっさりと刃は龍の皮膚を突き破り中へと潜り込んだ。

龍は暴れることも、叫ぶことも、その血を噴出させることもなく静かに息絶えた。

あまりにもあつけない最後。
龍に向けた視線には哀れみ。
胸に抱いた思いは空虚さ。

あなたは私のお父さんを二人も食べたけど……なぜかしらね。
少し、かわいそう。

動かなくなった龍を見つめること数秒。

迦唯は理乃の元へと戻った。

「ほ、ほんとうにすぐに戻ってきたな……」

理乃はなぜか呆れたような表情で迦唯を見るなりそう言った。

「悪い？」

「いや、そういうわけじゃ……」

「そう。なら、行くわよ」

迦唯は歩き出す。

北へ向かって。

「え、そっちは……」

理乃が戸惑ったような声を上げた。

「何を言ってるの？ そいつはついでよ。本命はこの先でわざわざ
待ち構えているわ」

「そ、そうですか……」

理乃はなんだかなあと、なんとも言えない気分になって溜息をもらした。

第四十三話 それぞれの場所にて 3 (後書き)

実は、四万文字以上の話など書いたことないんですね……。なんかもうグダグダです。もうじき予定していた終局に辿り着けるはず……。大丈夫だろうか……。 (オイ)

第四十四話 硯の最期（前書き）

長さが安定せず申し訳ない……（汗）

第四十四話 硯の最期

無法地帯カースと合法地帯ロウカスとを隔てる境界 北門。

その門前に、そいつは佇んでいた。

顔つき、肌色とも、記憶に比べて随分と健康的で、雰囲気にも明るいものがある。

一見したただけでは、爽やかな好青年と言った感じだ。ただ一つ、目さえ見なければ。

迦唯は始め、そいつが誰なのかわからなかった。

しかしそいつのギラギラとした目を見た瞬間、理解したのだ。

「抱かれてみたいな、って初めて思ったけど、あなたなのね……がっかりだわ」

「よく言うよね。お前の傷は二度とそんなことを思えるようなものじゃないだろ？」

迦唯の嫌味にそう返したそいつ 硯すずいは侮蔑も明らかかな笑みを浮かべた。

「……………理乃」

理乃を一瞥すると、彼は頷いてくれた。

それだけでこちらの意図は通じたようだ。

理乃は対峙する二人から距離をとった。

「いいのかい、一人で。こっちは二人がかりでもいいんだよ？」

「その必要は ないわ」

あくまでも余裕の態度を崩さない硯。

こいつの相手は一人で十分、と判断した迦唯。

両者の視線がしばし交錯し

先に動いたのは迦唯だった。

水晶を打ち鳴らしたような、澄んだ音色が響く。

刀身に纏わりつかせた結晶が光を反射し、淡く光を放っているようにも見える迦唯の刀は、

少し濁った赤色の刀によって受け止められていた。
「あの龍が弱かったわけね」

全部、抜きとった後か。

得心しながら、飛び退き際に結晶を放つ。

それらは硯に着弾する寸前で何かに阻まれる。

「ははっ、無駄だよ」

硯の姿が霞む。

あっという間に迦唯の視界から消えたかと思うと、懐に飛び込んできていた。

「くっ」

棘のある、硬化された腕が突き出される。

なんとか体を捻ってかわすも、棘が服を掠め、その下の皮膚をも浅く裂かれる。

「ふっ！」

次いで突き出されてきた濁った赤い刀を自分のもつ刀でいなしながら、穿いたスカート裾がめくり上がり、健康的な太ももから下着までもが一瞬露わになるのもお構いなしに、硯の顎目がけて勢いよく足を蹴り上げる。。

超接近距離かつ急角度で放たれたそれを、もろに食らった硯は仰け反り後退する。

すかさず迦唯は開いた間合いを詰め 硯の生み出した赤い刃を、刀の腹からではなく峰から一刀の下、叩き斬った。

「馬鹿な！ 血刀の刀としての質はほぼ同等な上、硬化まで用いているのに、たったの一振りで、それも、なんの気負いもなく！」

「そのどこが血刀よ。偽物を作るにしても、もう少しマシなものにして。お父さんの血刀はこんなに弱くないわ」

硯の眼前に刃を突き出す。

「ふん。甘い　　な？」

硯は不思議そうな顔をしたまま、その人生に幕を下ろした。

「甘いのはあなた。私の能力の弱点は一番私知ってるわ。それは、他の能力も同じ。なんの工夫も無い、ただの劣化コピーだけでは、決して本物には届かないのよ……」

顔面を貫かれた硯の死体を、迦唯は冷たく見降ろしていた。

第四十四話 硯の最期（後書き）

水曜日の更新が厳しくなっていました……OTL
もしかしたらずが、来週は土曜に四十五話投下ということになる
かもしれません。

第四十五話 当たった予感

「さ、帰りましょう」

迦唯はこちらに一声かけるとさっさと踵を返してしまった。
結局、迦唯が一人で片付けてしまったことになる。

ただのおまけ。いや、足手まといか……。

理乃は思う。

かならず強くなるうと。

この少女を守るくらいに、強く。

「どうしたの？」

脇を通り過ぎ、数メートル歩いたところで迦唯は振り返った。

隣に並ぶ様子も、後からついてくる様子もない理乃を怪訝に思っ
たようだ。

「ああ、今行く」

想いを胸に秘め、理乃は彼女の隣に並んだ。

ギルドに戻った二人を待っていたのは顔面蒼白の男性だった。

ギルドから幹旋してもらった仕事の報告に、仕事を終えてすぐに
やって来たのか、幾分疲れているように見える。

迦唯の姿を見つけたその男性は渡りに船とばかりに歩み寄った。

普段は寄り付かないくせに自分が困れば頼りにくるとは、調子の
いいことねと内心ため息をつく。

「何？」

愛想も素気もなく訊ねる。

「オーナーがつ、オーナーがつ……」

寒そうに体を震わせ、酷く怯えた男性の様子から、しばらく前に

起きた腹部の疼きを思い出した。

虫の知らせというやつかしら……。にしても、悪い予感はあるものね……。

「落ち着かせればいいのね？」

男性はぶんぶん頭を縦に振る。

必死に。全力で。

隣の理乃は明らかに引いていた。

迦唯は理乃を置いていこうと考え、あえて伴ったまま麻莉亜が今いるであろう一室へ向かうことにした。

これからは無関係でいられないだろうから、知っておいてもらおうと思ったのだ。

ギルドの地下にはオーナー室の他に、麻莉亜の私室が幾つか存在する。

迦唯は完全防音の扉の前で、一つ深呼吸した。

「な、なあ……」

理乃が頬をひきつらせながら何か言いたげな視線を送ってくる。それもそうだろう。

目の前の扉の上部には『麻莉亜専用愛撫室 拷問ノ部屋』と書かれたプレートがはめ込まれているのだから。

「そのままの意味よ」

さっと血の気の引いた理乃の顔を確認しつつ、迦唯は彼の手を逃がすまいとぐいと引っ張る。それと同時に、もう片方の手で扉を勢いよく開け放つ。

有無を言わさぬ強い力で理乃を引き入れることに成功した迦唯は、ほっと一息つくと同時に顔をしか顰めた。

迦唯の視界に飛び込んできたのは魂の抜けた人形だった。

「う……あ？」

時折、口から意味を成さない言葉が漏れている。
虚ろ。

その少女を見たとき、迦唯はそれ以外に何も思いつかなかった。
麻莉亜の方向を向いている。ただそれだけ。

あまりにも空虚な目。

意志を微塵にも感じられない。

それは人形の目、あるいは 死人の目。

迦唯はそんな目をよく知っていた。

いくらでもそんな目は見てきたし、身に覚えもある。

自己を完全に閉ざした者の目。

理乃は言葉を失い立ち尽くしていた。

迦唯は彼を一瞥してから、この部屋の主に視線を移した。

この部屋の主　麻莉亜は、裸身をさらした見知らぬ少女の胸に
顔を埋めていた。

少女の首には、鉄の首輪がつけられていた。

「麻莉亜」

迦唯が呼びかけると、麻莉亜はこちらを振り返った。

「あら、もう片付いたのね」

麻莉亜の唇には赤い口紅が塗られていた。

正体は少女の血だろう。

少女は椅子に座らされていた。

腕は黒色のテコ　よく見ると鉄の羽子板のようなもの　によ

って肘かけに縫い止められている。

テコに見えたのは、肉からはみ出た上の部分しか視界に納めてい
なかつたからだ。

実際には腕を貫通し、さらには足の甲を二分にしている。

その状態のまま止血してあるようだ。

傷をよく観察すれば縫えるところは縫合してあった。きっと消毒
もきちんとしたのだろう。

理乃もこちらの意図を理解したようで、一つ頷いた。
迦唯は心の中で合図する。

せーの！

.....

.....

二人によって、麻莉亜がこっぴどい目にあわされたのは言うまでもない。

第四十五話 当たった予感（後書き）

次（46話）か次の次（47話）で本編ラストの予定であります。

最終話 涙の意味

「悪ふざけしないで」

「全くだ」

二人から窘められ、麻莉亜も流石に遊びが過ぎたかと反省した。ただし、後悔はしていない。

「同じネタはしないわよ」

「……同じネタは、ね。まだ何かふざけようとしている、ということではないかしら？」

「さてさて、仕事に戻りますか。迦唯ちゃん。その女の子を明日から預かってもらえない？」

「……わかった。って誤魔化さないで！」

「理乃ちゃんはそろそろ家に帰って無事な姿を見せてあげなさい」
矢継ぎ早に告げると、麻莉亜は走り去っていった。

脱兎のごとく逃げ去った、の間違いかもしれないが。

「へっ、ようやく帰ってきやがったか」

理乃が店に入るとカウンターの方から声がかかった。

「落ち込んでいないってこたあ、ちゃんと助けられた見てえだな」

そう言う声の主 逸は入ってきた理乃に向かって片腕を突き出し、親指を上げた。

「あつたりまえだ！」

照れ隠しとよくわかる荒っぽい口調で理乃が応じる。

理乃の姿が奥へと消え、二人は楽しそうに語り始める。

親子の数日ぶりの対面を、迦唯は店の前から眺めていた。
ちようど、逸のいる位置からは死角だ。

邪魔しちゃ悪いわね。少し、歩きますか。

そう思い、その場をそつと離れようとした時だった。

「ところで、迦唯さんはどうした？」

「あれ？ 確か一緒に……」

理乃はようやく迦唯の姿が店内にないことに気がついたようだ。

店の外にまで出てきてこちらの姿を認めると、心底不思議そうな顔をする。

「どうしたんだよ？」

「少しの間会ってなかったんでしょう？」

「それがどうしたんだ？」

「……水を差すのもどうかと思ったから」

「はあ？」

理乃が理解できないといった顔をした。

「なに言ってるんだよ。お前の無事な姿を見せないと意味ないだろ」

「そ、それは別に今じゃなくてもいいでしょう？ 今は親子水入らずの……」

「いいから!!」

迦唯は理乃に引つ張られて店内に足を踏み入れた。

「ちよ、ちよつと理乃」

その手を引く力は、意外に強かった。

「お、おお。迦唯さんじゃねえか！ 思ったより元気そうだなによりだ!!」

逸がまるで我がごとのように喜んでいるのをひしひしと感じた。

だから、そういった経験の乏しい迦唯は戸惑った。

「は、はい……あの……この度はご迷惑をおかけして」

「いってことよ。こんな息子でよければいくらでも使ってやってくれ」

だめだ。最後まで言う前に遮られてしまう。

「こんな息子ってなんだよ」

「まあそう言うな理乃。それより迦唯さん、どうせなら謝るんじ

やなくて礼を言っではもらえないか」

「え、あの……」

なぜだろう。いつものように自分のペースを保てない。

迦唯はますます動揺してしまった。

「ありがとうございます」

ペコリとお辞儀をすれども、

「違う違う。俺にじゃなくってだなあ……」

逸は目で理乃を示した。

「こいつに言っっちゃってくれ」

「い、いいよ別にそんなもん……!」

途端、理乃は顔を照れで赤くして拒否する。

「……その、理乃？」

「お……う？」

固唾を呑む理乃。

迦唯は深呼吸した。

どうしてかは知らないが、無性に落ち着かないのだ。

……なんだろう。すぐ、恥ずかしいような、くすぐったい
ようなこの感じは……。

「……ありがとう」

そう言っつて、頭を下げる。

別に頭を下げる意味などない。

ただ、顔を見られたくなかった。

たったの五文字を伝えるのに、こんなに勇気があるなんて。

「い、いや……別に。その、俺が勝手にやったことだから。それに、俺一人じゃ、何にもできなかったし……」

面と向かって言われた方も、どうやらくすぐったそうだ。
だから迦唯は、あえて自分のそれを表に出さないように努めて平
静を装った。

だって。だってそんなの、すごく恥ずかしいじゃない……。

顔を上げる。

表情は、普段のそれ。

「それでも、助けに来てくれたのは確かよ。だから、ありがとう」

念を押すように、もう一度ありがとを伝えようと、なぜか理乃だ
けでなく逸も驚いた顔になった。

「ど、どうした……の？」

「迦唯さん……どうして……」

「迦唯……なんで泣いてるんだ？」

私、泣いてるの？

試しに両頬に手を当ててみると、何かが掌に染み込んだ。

本当に、涙が出ていた。

次から次へと。

痛くもない。辛くもない。苦しくもない。

むしろ、嬉しいのに。

なのに、涙が止まらない。

それは、迦唯が初めて流した嬉し涙だった。

迦唯はゆっくりと理乃に接近する。

「ど、どうしたんだ……？」

戸惑い、動けないでいる理乃。

「これは、お礼よ……」

迦唯は、

その唇に、

自分の唇を

そつと、重ね合わせた。

軽く触れ合わせるだけの、フェザーキス。

呆気にとられた逸と、何が起こったのか未だ脳の処理が追いつかない理乃。

唇を離れた迦唯は、

「私、あなたのことが好きになったみたい」

さながら、長い間閉じたままだった蕾が花開くように

迦唯は、晴れ晴れとした心からの笑顔を見せた

F i n

最終話 涙の意味（後書き）

最後までご覧ください。

ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございます。

心より御礼申し上げます。 m (| |) m

これで本編は終了です。ですが内容でまだ未完了のものがあります。それは続編にて。（いつになるかわかりませんが）

今回、完結設定はしておりません。理由は、なんとなくネタ話でも書こうかと思ひまして。GW中になると思ひます。

では、またの機会に。

ありがとうございます。

おまけ 前編（前書き）

……遅くなりました……。まだ、完成しておりませんが……。あまりにも遅れているのでできあがっている分だけ……。とりあえずは……

orz

ろくにチェックもしていないので誤字脱字だらけの予感。

後半……いつになるんだろう（え

実は別の話にも力を割いているので……（オイ

えと、注意点です。あくまでおまけの話なので、設定やキャラが崩壊していても気にしない方のみどうぞ。本編には一切関係ありません。

おまけ 前編

月×日 曇り

日記をつけるなんて久しぶり。
発矢が行方知れずになったあの日から、私は書かなくなったんだ
っけ。

今も、本当は乗り気じゃない。
珍しく体調を崩してしまったこともあって、余計にそう思う。
けれどこれだけは。これだけは書き殴っておきたい。
というよりも、そうでもしないとまた変なことを考えてしまうか
ら。

……前言撤回。書き綴っているそばから考えてる。
仕方ないじゃない。

ああもう！ あれは反則よ！！
どうしてあんなに似合ってしまうのかしら。

彼は……理乃は本当に男の子？
私のあの服……。

誰にも言えない。麻莉亜にさえ明かしていない秘密の服。

私の……その……お気に入り服　ゴシックローリータ風の衣装。
仕事がなく外出する気のない日によく着ている。

……始まりはちょっとした興味だった。

中性的な顔立ち。華奢な体つき。私と大差ない身長。

女の子と言えなくもない外見。

いったいどうなるのだろう。見てみたい。
だからお願いしてみた。

一秒未満で返事が来た時には驚いた。

『誰が着るもんか！！』
まあ、予想していたけれど。
流石に、無理やり着せて服を台無しにされてしまっても困る。
どうしたものか。そんなとき、絶好の機会が訪れたのだ

朝。いつもの時間に目が覚めた。

目覚めの気分は最悪。

体が熱い。全身を襲う倦怠感と脱力感……それに酷く寒い。

どうしよう……動けない……。

迦唯は虚ろに開いた目で回る天井を見つめるしかなかった。

お腹……痛い……。

朦朧とする意識がさらなる異変を捉えた。

よりもよってこんなときに……だなんて……。……どちら
かというと、逆かな……。

大人しく眠っていれば少しくらい動けるようになるだろうか。
難しいな、とすぐにその考えを打ち消した。

「……あつ……」

意味のない呻き。

「どうしたんだ？」

と、

聞き慣れた声とともに部屋の扉が開かれた。

「なんだ、まだ寝てるなんて珍し……迦……唯？」

ぼんやりとした眼で確認した訪問者　理乃は、いつもと違う迦唯の様子に戸惑っていることがかろうじて見て取れた。

その際、ビニールの袋を手に提げていることに気付く。

理乃がベッドの脇に寄って来て、迦唯の顔を覗き込んだ。

「お、おい。大丈夫か?!　って熱っ!」

理乃の手が額に添えられたかと思うと、それはすぐに引っ込められた。

自分でも思うが、相当らしい。

「酷い熱だ。ちょっとだけ待ってろ」

そう言い残して、理乃は部屋を飛び出していった。

そういえば。今日はどうして家に来たの……かし……ら……。

強烈な睡魔が意識を急速に落としていった……。

「う……ん？」

ゆっくりと重たい^{まぶた}瞼を開く。

「ん……起きたのか」

すぐ傍から、声。

迦唯は声のした方向へ視線を向けた。

そこには当然のごとく理乃が居て、心配そうな表情をしている。理乃の手が動く、額にあつた違和感が取り除かれた。

水の音がした。

桶の中の水にタオルを漬け、絞る音だった。

額に冷たいタオルが置かれる。

ひんやりとした感触が心地よかった。

「冷た過ぎたりしないか？」

ふるふる

喉が渴いていて、声が出そうになかったので頭を横に揺らす。

「そっか、よかった」

理乃は穏やかな顔で言い、水差しに入れた水をコップに注ぐ。それを迦唯に見せる。

「飲めるか？」

こくん

今度はゆっくりと縦に。

飲みやすいよう、少し身を起こそうともがく。

すると、理乃は迦唯の肩の下に片方の手を潜らせ、少しだけ体を起こさせた。

迦唯の口元にコップがあてがわれる。

一気に水が流れないよう、徐々に傾けられるコップ。

休み休み、少しずつ少しずつ、飲み下してゆく。

そのリズムは、迦唯にとって完璧なまでに都合のいいものだった。

「まさかこんなことにも能力が役に立つとは思わなかったよ」

理乃はそう言って照れたように笑う。

……かわいい……。やっぱり、女の子みたい……。

迦唯はぼーっとしがちな頭でそんなことを思う。

熱でどうにかなってしまっていたのだろう。

迦唯はふと、想像してしまった。

あの服着たら、どんな風なんだろう……。

しかし。一度冗談半分で頼んでみたことがあるのだが、そのときはにべもなく断られた。

んっ!!

耐え難い痛み。

余計な事を考えているうちに忘れてしまっていたことが一つ。

「りの……」

喉が潤ったことで、かなり小さいが声が出せた。

「ん？」

「手を、貸して、もらえる……？」

「どうしたんだ？」

「……れ、行きたいのよ……。お……。……いたくて……」

……

迦唯が次に目を覚ましたのは、自分のベットの中だった。

「だ、大丈夫か……？」

酷く不安そうな顔でこちらを覗き込んでいるのは、理乃。

「うん……もうそんなに辛くない。今、何時？」

「夕方6時。びっくりしたよ、トイレの中で気絶してんだから」

「あれは……理乃にはわからないと思う……」

迦唯は苦笑いを浮かべた。

「とじろで……」

何か聞かれても返答に困るので、迦唯は話題を変えることにした。

「……なに？」

「理乃つて、今日は家に来る用事でもあったの？」

今朝からずっと気になっていた疑問をぶつけてみると、途端に理乃は「あっ」と失念していた何かを思い出したような声を上げた。そして

「ちよつと待つてて！」

理乃は、いきなり部屋を飛び出して行ってしまった。

「……………？」

なんだろうかと、迦唯が内心首を捻っていると、朝に見た袋を携えて彼が戻ってきた。

「こ、これっ—！」

理乃はその袋を差し出した。

「えっと……これは？」

「その……今日、誕生日なんだろう？」

「……そういえば、そうね」

「だから、プレゼントっていつかなんというか……」

「……！」

「それで、どんなのがいいかなって麻莉亜さんに相談してみたら、迦唯はアイスクリーム好きって聞いたから」

なるほど。袋の中身はアイスのか。さっきは台所に行ったのね。

理乃が袋に手をつ突っ込み、がさごと中身を取り出そうとする

「あっ」

重たそうな低音。響きがやけに鈍い。

何かを落としたらしいが、アイスとは思えない。もっとこう、硬くて重たい金属的な何か。

理乃はそれを拾い上げると、慌ててそれを背中に回して隠す。

迦唯は見た。

もう一つの袋を。その中に、なにか金属製の物があったような……。

「……それは？」

じつと見つめたまま視線を放さない迦唯。

観念した理乃は、後ろに隠したそれを見せる。

それは、鉄の首輪だった。ご丁寧に迦唯の名前まで彫ってある。

「理乃……あなたにこんな趣味があったなんて……」

「ち、違う。断じて違う！」

大いに慌てながら否定する理乃を軽く無視して、

「女の子にこんなものをつけさせて外を歩かせるのね……」

「だーかーらーちがつ」

あ、この反応も、いいな……。

必死に弁解する理乃を見てみると、少々嗜虐心が働いたので揺さぶってみることにした。

「そついうのがいって言うのなら、私は別に構わないわよ？」

「え……！」

「……そこは驚いて固まっているべきところではないと思わない？」

「あ……」

理乃がしまったという顔をし、懸命に言葉を探すも見つからず、何も言えないで口を魚みたくパクパクさせた。

こんなことするのって麻莉亜しかいないと思うけど、これはチャンスかもしれない……！

迦唯は思考を高速で巡らせ　そして閃いた。

よし、これなら逃げられないかもしれない。

「じゃあ、ごうしましょう」

「？」

疑問符を浮かべた理乃の顔はちよつと強張っていた。
嫌な予感がする、という内心を晒しているようなものだ。
うん。大正解。

「私はその首輪をつけて見せるから、理乃は私の指定した服を着て見せてよ」

「へ？ あの、まさか迦唯さんまだ女装のことを……」

「よくわかってるわね」

「ちよ、ちよつと待て！」

「何よ？」

「その、なんつーか……」

「わかったわ、私もあなたの指定した服を着て見せましょう。これならいいわね？」

「いや、あの、その……」

「そうだわ！ その後、無法地帯カースをぐるりと一周、散歩しましょう。もちろん、格好はお互いに指定した物のままで」

迦唯は語尾を弾ませながら、熱に浮かされたように（実際、熱はまだあまり下がっていない）かなりヤバイ内容（いろいろな意味で）の事を提案する。

「え、あのー……迦唯？」

「決まりね！」

理乃の言葉など聞いちゃいない。

「無視ですかそうですか……」

結果的に。

理乃は反論を差し挟む余地もなく、強引に約束させられてしまった。

肩を落とす理乃を尻目に、

「はむっ」

早速アイスを味わっていた。

冷たくて甘い……。おいしい……

彼女が浮かべた至福の表情に、果たして理乃は気付いただろうか……。

……

……

約束の日がやってきた。

なぜ。なぜこんなことになってしまったのだろうか。

理乃はこの日に至るまでの一週間、幾度となく繰り返してきた自問自答に耽っていた。

要するに、軽い（？）現実逃避だ。

俺はどこで間違ってしまったんだろう。

どう考えても迦唯の誕生日……否、麻莉亜に相談しに行った時点で歯車は狂い始めました。

正しくは、麻莉亜から預かった首輪を律義にも迦唯の元へ届けてしまったことが原因なわけで。

「はぁ……」

もはや何度目とも知れない溜息をつく。

それでも理乃が迦唯の家へと向かうのは、約束してしまったことと、ちよっとした下心があるからだ。

一方。

迦唯は期待半分、後悔半分と言った、微妙な心境に陥っていた。

朝起きてからというもの、廊下を行ったり来たり。

理乃のゴスロリ姿に想いを馳せて夢見がちになったり、自身がどんな格好をさせられてしまうのかを不安に思ったり。

不安に思う一方で、理乃に見られることを望んでしまっているの

だから始末に負えない。

そんな浮いたり沈んだりする迦唯の様子に、ネアもファウもいかんともし難く、身を潜めて静かに見守るに留めていた。正直な話、巻き込まれそうで嫌、といったところなのだが。

迦唯の首には既に首輪が装着されている。サイズもちよっぴり余裕があつて苦しくなかった。なんだかんだで、結構乗り気らしい。

昨夜は「あの時の自分はどうかしてたのよ……」と、ベッドの上で枕を抱いて転がっていたことは、理乃に告げない方がいいだろう。

理乃も迦唯も、ネアとファウまでもがこの時、同じことを思っていた。

無事に今日が終わりますように、と

おまけ 前編（後書き）

遅れてしまつて申し訳ありません。待っていてくれた方に感謝。 m

（―――） m

こつちの後編送る前に別の短編たぶんホラーものを投稿しているかもしれませんが、
気にしないでください。

ああ、石投げないで（泣）

おまけ 中編（前書き）

前話のあらすじ（うる覚え）。

ある日、迦唯の家を訪れた理乃は、そこで体調を崩した彼女の姿を見、介抱した。その際、熱でおかしくなった迦唯により、お互いに着せたい服を指定し、それを着て見せ合うという約束をさせられてしまった。今日はその約束の日。憂鬱になりながらも理乃は迦唯の元へと向かった……。

おまけ 中編

理乃は迦唯りのかいの家の扉を前にして、動きを止めてしまった。

ここまで来ておいてまだ躊躇ためらうとは、それだけ嫌ということなのだろう。

たとえ条件が、こちらに有利なものであったとしても。

少なくとも何を着る羽目になるのかは見当がついている。という
か一つしかない。

わかつているだけに“どんな姿を晒さなければならぬのか”という不安要素がなくなるので、その精神的負担は迦唯に比べれば軽い。

迦唯はどんな心持ちでいるのだろうか。

理乃はふと、そんなことを思った。

普段から露出の多い服装をしている彼女のことだから、平然としているのだろうか。

それとも、やはりそういう服装で出歩くのに、勇気を振り絞っているのだろうか。

初めて会ったときは平気そうに見えたけど。

ちよつとした事故で裸体を見てしまったときも、彼女は眉一つ動かさなかった。

やっぱり、平気なのかな？

自分や佐祭系ささいけいがいる目の前で、死して間もない二人の父親と体を重ねるくらいだ。きつと、大丈夫なのだろう。うん。

理乃は自分が見当違いな方向に迦唯の羞恥感覚を解釈してしまっ
た。

実際の迦唯は、夜の仕事をしているときにしろ、普段にしろ、いつも恥ずかしいとは思っている。明らかに性欲を晴らす対象としか

見ていないような視線には嫌悪と恐怖を覚えたりもする。今でこそ表には出さなくなってきたが、昔は顔をそれこそ夕日のように赤く染めて俯うつむいたまま、ろくに前を見て歩けなかったものだ。立っているだけ、ただそれだけなのに、足がガクガクと震えてしまうこともあった。

それは今も変わっていない。自分で決めたことだから、その意志で必死に押さえこんでいるだけなのだ。無愛想で表情に乏しいのはそれが原因だったりする。ようするに、精神的余裕がほとんどないのだ。

生死にかかわるので、警戒時あるいは臨戦時に限って、迦唯は恥じらいを捨てることができる。

それ以外は、ただの少女に過ぎない。

己を殺し続けることを選んだ、その一点を除けば……。

「……よ、よし」

理乃は今度こそ意を決したのか、硬い面持ちでドアノブに手をかけた。

手をかけたただけという段階で、まだ何もしていないのに扉が勝手に開かれる。

とどのつまり、内側から誰かが開いたということ。

しかし、扉は少々の隙間を生み出しただけで、開けっ広げにはならなかった。

中から「入って」と声が聞こえたかと思うと、腕を掴まれて中に引きずり込まれた。

「な、どうしたんだよ……か、唯……？」

いつもと違う雰囲気の彼女がそこにいた。

理乃が着せられると、思っていた服とほぼ同じデザインのゴシック

ドレスを纏った彼女は、顔を少し下に向け、その頬はほんのりと赤く色づいていた。真っ直ぐ伸ばされた手は下腹の辺りで重ねられ、足も内股気味である。その様はまさに恥じらう乙女そのものだった。いつもは肩口で二つに分けられている長髪も、今は合流して一本の滝のようになっていた。

全体的に、リアルな人形みたいだ。

首には先日首輪が装着されており、それが妙な感情を理乃に抱かせた。

なんだろうこの感覚は。言葉にできない何か……。

「お、おはよう理乃……」

迦唯にはいつものあっさりとした感じはなく、どこかぎこちない。

「おはよう」

理乃は訊くべきか逡巡し、

「その、どうしたんだその恰好？」

やはり訊いてみることにした。

「……誰にも言わない？」

迦唯はこちらの顔色を窺うような上目使い。

不安もあらわに尋ねられ、理乃は頭に疑問符を浮かべた。

秘密にして欲しいのだろう。それはわかるが、一体どうして。

よく似合ってるし、可愛いのに。

そのことを口に出して、はっきりと伝えてあげるべきだという考えは理乃の頭にはない。おそらく問われて初めて答えるだろう。

「ああ……」

彼女にも知られたくない秘密の一つや二つ、あってもおかしくはない。理乃は詮索しないことにした。

「私……こういう服が好きなの。なんだか安心できて……落ち着くから」

それって肌の露出がほとんどないからじゃ……？

理乃は喉元まで出かかった言葉を無理矢理飲み下した。

「そ、それより！ 玄関先で話し込むのはここまでにしましょう」

いたたまれなくなったのか、彼女は話を早急に打ち切りにかかった。

そんなに恥ずかしいのなら、どうしてわざわざ。

「……そうだな」

内心首をかしげつつ、いつまでもこうしているわけにはいかないのも確かだと頷く。

廊下に行く理乃は、先導する迦唯の後姿を見ながら、数分後の自分はどうなっているのだろうかなどと考えていた。

逃げたい。いや、やっぱりそれもだめだ。

理乃は自分の服装を思い出し、頭に沸いた考えを消し去った。

話は遡って数分前。

普通の衣類から、かなり際どい水着やらボンテージスーツやら合ロウズ法地帯の学校というところの制服まで。案内されたのはそんな服のるこほ増埒のような部屋だった。

そんな部屋の入口は迦唯の部屋にあった。

ベッドの下の床板をはがすとそこには階段があり、その階段を降りた先が今の理乃のいる場所というわけだ。

もしかするとからくり屋敷なのかもしれない。

さて、その部屋に入るなり迦唯は、

「理乃からね」

と告げるや否や不敵に微笑んだ。

さつきまでの様子は幻だったのだろうかと思えるほどの変わり身だ。

しかし、そんなこととは比べ物にならない衝撃的な事態が理乃を襲った。

なんと彼女は、理乃のいる前でゴシックドレスを脱ぎ始め、脱いだそれを「はい、これ」と、理乃に手渡したのだ。

なんとということだ。ありえない。これはないだろう。未来視にすらなかったぞこんなの！

まさか目の前で脱いで、それをそのまま手渡してくるなんて。

まだ彼女の温もりの残るゴシックドレスを手に固まった理乃を、

迦唯は固唾を呑んで見守っている。その目は期待で満ち溢れていた。

この場を動く気配も当然ない。

「あの……迦唯さん？」

「ど、どうしたの？」

「いや、だから」

理乃の言わんとすることがまるでわっていないようだ。
「ご丁寧に首まで傾げてくれている。」

「着替えるんですけど……？」

「それはわかってる」

「できれば後ろ向いてて欲しいなーなんて」

「着替えるところも見せて」

いま、なんと……？

「着・替・え・る・と・こ・ろ・も・見・せ・る・の」

呆けた顔をした理乃に止めを刺すかのような一言が、迦唯の口から放たれた。

仕方なく、理乃は迦唯の前で着替えることにした。よくよく考えると、彼女も下着姿だ。

もっとも、迦唯が勝手にそうしたわけなのだが。

そもそもサイズ大丈夫か、これ？

いざ着替えようとして、理乃はサイズの問題にようやく気がついたが、どうやら杞憂だったらしい。むしろ丁度いいくらいだ。

なぜかすごく虚しいような気がするの、気のせいだろうか。

理乃はとうとう見た目が完全に女の子にしか見えなくなってしまった。

なんか下半身が不安だ。随分と風通しがいい。スカートだからか？

それを見た迦唯は慌てて大量にある衣服の中から同じような服を持ち出して、それをいそいそと身につける。

その手にはどこに置いてあったのか、カメラを持っていた。

「写真……！」

どこか興奮した様子で、迦唯が短く言った。

そうして、今に至る。

ああ、耐えるしかないのか。

そんな理乃の内心を知ってか知らずか、すっかりご機嫌な彼女は、ぐいぐいと体を密着させたりして、いろんな体勢の写真を撮影している。

それに付き合わされている理乃は、顔を赤くしたり慌てたりして忙しそうだ。

迦唯が満足した頃には、すでに理乃は疲れ切っていた。

「ごめんなさい。調子に乗り過ぎたわ……」

「……疲れた」

床に座り込んでしまった理乃を見て、迦唯は申し訳なく思った。

「少し休憩しましょうか。その後は、理乃が私の服を指定する番よ」

「そうしてくれ……」

「何か持ってくるわ」

そう言って上に向かった迦唯を、こちらの要求にどういった反応をするだろうかと、理乃は想像を膨らませながら待つことにした。

おまけ 中編（後書き）

とてつもなく遅れて申し訳ないです……。m（―）（―）m
九月中にはおまけを完結させたいところなのですが……。o r z

おまけ 後編

休憩が終わり、今度は迦唯が着る番になった。

「あなたが着せたいと思うもの、何でもいいから持って来て。でもない服は流石に無理よ」

伝えることは伝えた。だから迦唯は口を閉ざした。

今しがた潤した喉はもう渴き始めている。理乃の女装、ゴシックドレス姿を見た時とは違う意味で心拍数が上がり、浅い呼吸を繰り返す。

この待っている間って、想像していた以上に緊張するのね。

迦唯は目を閉じ、呼吸を落ち着かせることに努めた。

理乃による服の指定が始められ、間もなくその服を着て見せることになるだろう。

ただ、服の種類が多いので探すのに苦労するかもしれない。

しかし、理乃に動く気配は一向になかった。

不審に思った迦唯が目を開けると、そこにはなにやらぶつぶつと眩きながら、難しい顔をしたりにやついたりしている理乃の姿があった。

てつきり服を取りに向かったと思っていたのに、一体何をぶつぶつと……？

耳を澄ませてみれば、「やっぱり全裸はまずいよな」などといった危ない発言が聞こえてくるではないか。

「当然よ。それだと服関係ないじゃない！」

「うわっ！ ごめん……」

すっかり自分の世界に入っていたらしい理乃は、迦唯の鋭い叱責に跳び上がった。

別に、理乃になら裸くらい見せてあげてもいいけど。減るものじゃないし。

「考えてこなかったの？」

なかなか決められそうにない理乃に、訊ねてみる。

「いや、まさかこんなに色々あるとは……」

「何着でもいいわよ。時間の許す限り、だけど」

「うーん、そうだな……」

服の道をうるうるし、やがて戻った理乃の手には合法地帯ロウズの学校というところの、体操服があった。どうやら彼はブルマ派らしい。スパッツやハーフパンツもすぐ側にあったはずなのだが、ブルマだけを持ち出していた。

「これ……いい……」

迦唯は皆まで言わず体操服をひったくる。

理乃が言いたかったことはおそらく、『これ……いいか？』だろう。いちいち許可を求める必要なんてないのに。どうせならもつと

堂々として欲しい。

例えば『これを着ろ!』とか。

要求する側に恥ずかしそうにされると、余計に恥ずかしくなる。さっさと着替えてしまいたい心境なのだが、そうするわけにはいかない。

嫌がる理乃の着替えを、さっきはじつくりと勧賞させてもらったのだ。こちらも見せた方が公平だろう。焦らすともいう。

あんまり嬉しくないでしょうけど。こんな貧乳娘の下着姿なんて。

着ているゴシックドレスをわざとゆっくり脱ぎ、まずは体操服の上を着る。次いで下を身につけ、ふと思う。

「ねえ理乃。シャツは外に出す派？ それともブルマの中に入れる派？」

夜の仕事の際、そういう趣味の人が熱弁をふるっていたので気になったのだ。できる限り理乃の希望を叶えようとする、こつこつ細かいところも気にしなければならぬ。

訊ねられた当人は数瞬の間呆け、慌てたように答えた。

「な、中かな」

「わかった」

言われた通りにして、今度は別の内容を訊ねる。

「して欲しいポーズとか、ある？」

「えええと、あの、その……」

理乃の顔はだんだん真っ赤になっていった。視線も定められなくなったのか、落ち着きなくきよろきよろと目が動いている。さつきから様子が変だ。何かの病気だろうか。

「言いにくいなら、耳元で囁いてくれればいい」

「い、いや、でもな……」

「……つまりそういうこと考えてるのね」

その瞬間、理乃が固まった。まさか呼吸まで止めるとは。どう考えても凶星だった。

かまをかけたつもりだったが、理乃は本音を口走る前に態度で示してくれたようだ。

「じ、ごめんなさい！」

まさに電光石火。迦唯の目にも追えない速さで理乃は土下座していた。

謝るくらいなら初めから……は無理か。どれだけ今の見た目が女の子同然だとしても、やっぱり理乃は男の子だし。それに、娼婦やってる私が怒るのも何か変よね。

「そんなに、その……したいの？」

つくづく理乃には甘い自分を自覚しながらも、だからといって厳しくなるうとしてもなれない。これが戦闘訓練だったらこうはなら

ないのだが、どうにもそれ以外だと甘くなってしまう。

「え……や、その、まあ」

恥ずかしそうに理乃は頷いた。

「夜ならしてもいい」

迦唯はそう口にしたところではっとなった。かあっと頬が熱くなるのを感じた。

なんて破廉恥なことを言っているのだ。

とてもじゃないが理乃と顔を合わせてはいられず、迦唯は顔を背けてしまった。

「……それと、服を着たままがいいなら、そのときの私の衣装も今のうちに選ぶといいわ」

顔を背けていながら、それでも言いかけたのだからと最後まではつきりとした声のまま伝える。

場が静まり返った。

不安になった迦唯が横目で理乃の様子を見ると、彼は沈黙してしまっていた。

というより、開いた口がふさがらないと言った感じだ。

「どうしたの？」

顔の向きを戻し、問いかける。その動きに伴い、長く黒い絹糸の滝が揺れた。

「えっと、まさかあんなこと言うとは思ってなかったから」

「　　っ！」

迦唯の顔がみるみる紅潮した。

そんな迦唯の状態などお構いなしに、理乃は照れたような笑いを浮かべながら続ける。

「その、なんだ。迦唯ってさ……」

一体何を言われるのだろうか、胸の内に不安が一気に広がり、それが羞恥と入り混じってわけがわからなくなる。

しかし理乃の口から出た言葉は、迦唯が予想していたものとは真逆の内容だった。

「足、長いよな。鍛えてる割に太いってわけでもないし、かといって細すぎるわけでもない。うらやましいな」

身構えていた迦唯は拍子抜けした。正直な話、こけそうになった。

「え？　あ、ありがとう」

……って、なんで今それを言うのよ！

まあ、褒められて悪い気はしない。というか、素直に嬉しいわけだ。

「……で、次の服なんだけど　　」

いつの間に決めたのだろう。

小走りであっちへ行ったりこっちへ行ったり。今度はどうやら、

まとめていくつか持ってくるつもりだった。

「とりあえず優先的に見たいのはこんなところなんだが」

戻ってきた理乃の手には見覚えのある物が。

「スクール水着に巫女装束に浴衣にボンテージスーツ……………」

どれも夜の仕事の際に要求されたことのある服装だった。

^{カース}無法地帯では見慣れない、^{ロウズ}合法地帯の物だから、珍しいのだろう

……………と思いたい。

「だめ……………か？」

中性的な顔立ちにゴシックドレス姿。

そんな理乃に不安そうに言われたら、迦唯には断りようがない。

もっとも、迦唯の答えは初めから決まっている。

だからその一言を躊躇わずに口にする。

「いいわよ」と……………。

月 日 晴れ

昨夜は時間がなかったから、その翌日に書いておくことにした。

昨日は恥ずかしかったけど久しぶりに一日中楽しかった。

目当てだった理乃のゴシックドレス姿も見られて、夜には……な
こともして。好きになる前に一度したのとは違って、今度はお互い
にお互いを感じ合えたと思う。

理乃はまるで、トランプタワーを作っているような慎重さだった
なあ。ちよつと触ったくらいで私は壊れたりしないよ。でも、嬉し
かった。

理乃は私のコスプレで喜んでくれたのかな？ 見た感じはそうだ
ったけど。

執拗なまでに足へ向けられる視線がちよっぴり怖かったです。

まさか理乃がああいう趣味だったとは思わなかったけれど、喜ん
でくれるならまたコスプレして見せてあげようかな……。

これからギルドに向かわなければならぬので、今回はこれくら
いにしておこう。

たぶん依頼だ。殺しの方の。

いつか理乃にも、人を殺すときがくるのかな……。

正直に言えば殺して欲しくない。私みたいに、理乃にはなっても
らいたくない。

けれど、そういうのは理乃が決めることだ。私かとやかく言っ
ていいことじゃない。

でも……もし、もしも理乃が人を殺したら……。

そのとき、私はどうするんだろう。

そうならないよう、私は秘かに願っている。

それくらいしか、今の私にはできないから。

あとがきという名の独り言

長くなりそうなので、今回はこちらに。

まずはここまでお読み下さり、ありがとうございました。 m (

—) m

気がつけば四か月以上も遅れている……。誰だ、GW中とか言ったの。私だ……。

待たせてしまった方、申し訳ないです。本当に。

気長に待っていてくれた方、感謝です。

少しでも楽しんで頂けたでしょうか？ (だといいなあ……)

……以下は注意連絡等。

その一。

ここから先はなんかいろいろとぶっちゃけてます。不快に思われる方もいるかもしれません。ですので、余程心に余裕があり、暇を持って余している方のみどうぞ。

とはいえ、おもしろいことなんて何一つないですが。

その二。

前篇にも確か書いたような気がしますが、これはあくまでおまけの話であって本編とは関係がありません。

それでも若干混ざっています。本編的な何かが。

それは没ネタだったり、書き忘れだったり、続編に関係あるようなないようなものだったり、ラジバ……いえ、なんでもないです。

その三。

続編についてですが、半年は書かないかと。忘れた頃に投稿していると思います。

理由は、間を開けて自分の書いたものを見直すことと、ノープラン、ほぼノーメモで書いたので、色々情報を整理しなければならぬことなどが挙げられます。

ちなみに、おまけみたいな書き方でいくかもです。まだ文体など模索中なので断言できかねますが。

こちらの方は、おまけを投稿する前に最終話とかサブタイトルに使ってしまったので、続編部分をこちらには投下せず、一応完結ということにします。

例えばの話ですが、タイトルを『舞刀迦唯 二刃、衝突』
みたいな感じにして続編を投下しようかと。もちろんジャンルはその他です。いろいろ混ざるので。

その四。

第二十一話、彼女の受難について。

前後の話との読者数グラフの差がヒドイ……。

どん引きされて少なくなると思っていたのに、むしろ多いとはこれいかに。

私はただ……どんな目に合っているかを書いただけですよ。あんな目に合されても、それでも彼女は自分の決めた道を進み続けるということを示すために。一応無意味なわけではない旨、ここに記しておきます。……なんか日本語変な感じが。まあ、いいか。いや、よくはないのだけれど。

正直こういうのって、アウト？ 自重したつもりでしたが。もうこういったシーンはカットしようかな……。

……以下戯言。

ぶつちやけますと、本編といいおまけといい、ろくに設定も練らず、構成も考えず、プロットも作らず、ほとんどメモらしきものを取らず、で書いてしまったのです。

それが原因でこんなことに……私の馬鹿。

今考えれば、せいぜい三万字くらいまでしか書いたこともなく、そもそも書き始めて二、三か月の初心者が長編なんて、ねえ……。痛い目見ました。なんとか区切りを迎えられたのは奇跡か……。なんて言つと奇跡が安つぽくなつてしまえますね。最後だけは決めておいたのが功を奏したのでしょうか。

まあおまけも合わせれば一年以上かかっているわけですが。

遅すぎる……。遅筆なんて次元超えちゃってるよ……。OTZ

今作『舞刀迦唯』は、実は実験作だったりします。いろいろな要素を混ぜてまとめて実験しました。途中から作風変わったのもその一環です。私最低です。大馬鹿者です。書き手としてダメです。これで上達してなかったらどうしようか……。どんな文体にするか、模索していたもので……。

さて、戯言はここらへんにしておきます。では、また縁があれば

……。

お疲れ様でしたm()m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1709c/>

舞刀迦唯

2011年2月25日15時26分発行